
引きこもり魔術師のマジック在宅ライフ

紅森弘一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

引きこもり魔術師のマジック在宅ライフ

【Nコード】

N9997DK

【作者名】

紅森弘一

【あらすじ】

引きこもりのダメ人間、ハルミはある日自室ごと異世界へ召喚されてしまう。

そんな彼に与えられたのは、魔術の才能と知識と多種多様な魔術書。ハルミは決めた。魔術を駆使して充実した引きこもり生活を送ることとを！

錬金術から悪魔召喚まで、様々な魔術を緻密な説明文と共にお送りするワンルームファンタジー！

この作品は「カクヨム」にも投稿しています。

第1話 引きこもり、無理やり外の世界へ出される

今日も自堕落引きこもり生活。1日の大半を費やすネットサーフィンを終え深夜に俺は寢床に入るのであった。が、

「眠れない……」

今日はなかなか寝付けなかった。たまに外を通り過ぎる車の音、かすかに聞こえる虫の声。そんなものがいちいち気になってしまうような、眠れなさだった。

布団に潜りながら、必死に目を瞑る。が、それでも気になってしまつ。雑音はだんだんと耳に慣れ、聞こえやすくなってきた。

耳元で、カサカサと囁くような音がする。

「っ!?!」

飛び起きた。まさか、この部屋に虫が湧いたのか!?

俺は慌てて枕元に振り返る。すると、

そこには、人がいた。

「ぎゃあああっ!?!」

しかも、ただの人間ではない。痩せこけた頬に尖った顎、肌は死人の如く青ざめている。背丈はかなり高い。俺の部屋の本棚くらいはあるだろう。真っ黒なコートを着て、頭には同じく真っ黒の帽子を被っているのが薄暗い部屋の中でも分かる。それくらい黒かった。

「どうも、ハルミさんですね」

「ひいひいっ!？」

その男は、氷のような声で、丁寧にお辞儀をしながら俺の名を呼んだ。

「まあまあ、そう驚かないくださいよ」

俺はその場に固まったまま動けない。よく見るとこの男、顔つきは端整だ。恐ろしく不健康な輪郭でパツと見ではそうは見えなかった。

「無理もないですね、こんな急に気味の悪い男が現れると」

俺は、コクリと頷く。

「では驚いている間に驚くようなことを全て言ってしまいましたよ」
そいつはそう言つと、とんでもない事を言った。

「私は悪魔です。あなたに賭けを挑みに参りました」

「っ!？」

悪魔。驚いたが、もう驚いているのどこいつが悪魔でも何も不思議ではないので実際はそれほど驚いてはいなかった。

「ほら、悪魔ですよ。こんな事もできますし」

男がパチンと指を鳴らすと、彼の指の上に青白い火が灯る。

これはもう信じるしかないようだ。

しかし、こいつは賭け、と言った。それは何だ。

「信じてもらえたようですね。では、『賭け』の話しましょう」

俺は再び頷く。

「あなたには、これから異世界へ行っていただきます」

……なんだと。異世界？

「そして、再びこの世界に帰ってこられるかどうか、それを賭けようというわけです」

「なんだよ、それ……」

「そうなるでしょうね、いきなりのことですので。ですが、これは私も本気なのですよ」

「いや、でも、異世界って、意味わかんねえよ」

「分かりやすく言いますよ？ あなたを無人島に放置し、帰ってこれるかどうかを賭ける。それを異世界でやるよというのです」

「ま、待て。無理に決まってるだろ」

「大丈夫です。あなたには異世界で生きるために必要なものを与えます。それに戻る手段は複数存在しますしやればできますよ」

「いや、だからそんないきなり言われてもだな」

「残念ながらいきなりというところがミソです。実はこの賭けに参加しているのは私だけではないのですよ」

「……は？」

「私の知り合い数十名を巻き込んだ大掛かりな賭けなのです。題して『墮落した人間が更正することは可能なか?』です」

なんだ、話が大掛かりになってきたぞ。

「この賭けをするために根っからのダメ人間を探していましたね。そこであなたに白羽の矢が立ったのです。ダメ人間をいきなり過酷な環境に放り込むのです。これが重要」

「あ、悪魔だ……」

世の中いくらなんでも理不尽過ぎないだろうか。部屋からほとんど出ていないのに危険に晒されるなんて聞いていないぞ。

「悪魔ですしね。あ、悪魔らしいことはまだありますよ。あなたが死んだ場合は魂をいただきます。これがあなたが賭けるもの、ということで」

「じゃあ、お前が賭けるものはなんだよ……!」

「今のあなたの生活を大きく改善するような、満ち溢れた才能とやる気、莫大な資産などありったけの幸福を差し上げましょう」

「まさに人生を賭けるってわけか……」

こいつら、引きこもりが人生終わっていていつ死んでも構わないような人間だと思ってやがる。

「その通りです。では早速異世界へ参りましょう」

「ちょ、ちょっと待て！ まだ心の準備が……」

「そんなの知りませんね。それ」

男が指を鳴らす。俺は思わず目を瞑り頭を抱えた。

「……」

「……」

「……ん？」

何も、起きない？

「もう着きましたよ」

「は！？」

俺は目を開けた。が、

「……は？」

何も、変わっていないかった。

「分かりませんか。もうあなたは異世界にいるのですよ。部屋ごとね」

「は!?!」

俺は寢床から飛び上がり、窓へ駆け寄りカーテンを開ける。

「……なッ……!?!」

目の前に広がるのは、普段見ている住宅地……ではない。赤い屋根と白い壁、木組みの家が立ち並ぶ住宅街。ヨーロッパの古い町並みで見るような、それだ。

空に浮かぶ白い月も心なしが大きく見える。まさか、本当に異世界に着てしまったのか。

「あなたの部屋を、この世界のどこかの町にある、空き家の一室に転移させました。あとはここから元の世界に戻ってください」

悪魔が後ろから声をかける。

「先ほども言ったようにいきなり何もなしに生きていくことはできないでしょう。なので、あなたにいくつかのものを与えます」

ドサリと音がする。振り返ると、影で見えにくい様々なものが山のように置かれているのが分かった。

「数日分の食料と簡単な生活用品です。この世界で普通に生活するためのものです。そして、ここからが重要ですよ」

悪魔は荷物の山から何かを拾い上げる。それは、本だった。

「あなたにはこの世界の様々な魔法について書かれた魔術書の数々を差し上げます。そして、それを実用するための知識と才能も与えましょう」

……魔法、だって？

「これらの魔法の中には相当便利なものも混ざっていますが……それを活用できるかはあなたの頭脳とやる気にかかっています」

つまり、今の俺はそこそこ有能な魔法使いというわけか？

「さて、説明は以上です。分からないことがあれば、とりあえず赤紫の表紙の本を読んでみてください。それは今回の賭けのための説明書のようなものです」

「あ、ああ……」

「それでは私はこれで失礼いたします。あなたが無事に帰ってくることに、私は願ってはいませんが願っている方はいるので頑張ってくださいね」

悪魔は指を鳴らし、青い炎に包まれて消えた。

俺は、気の抜けたようにへたり込む。色んなことが一気に起きすぎてわけが分からない。

「……とりあえず、外に出てみるか」

山積みになされた荷物をよけながらドアまで移動し、おそろおそろ

ドアを開ける。

そこには、ところどころボロボロになり蜘蛛の巣があちこちに張った木造の廊下が闇の中へ吸い込まれていく光景があった。

「ーっ！」

俺はボタンとドアを閉める。ヤバい。こんな中外へ出るなんてたまったもんじゃない。

そう思い始めると、考えはどんどん違う方向へ進んでいく。

部屋の外の時点でこれなら、外の世界はどれだけ恐ろしいんだ。俺にそんなことができるのだろうか？

「……待てよ」

俺は、気づいた。そうだ、危険だらけの場所に無理に行く必要は無い。

俺には魔法の才能とそれを使う知識、それに必要な魔法書があるのだ。

その魔法書はこの世界の様々な魔法があるとあいつは言っていた。おそらく食べ物に困ったときの魔法や、金を稼ぐための魔法のようなものもあっておかしくはない。

つまり、つまりだな……。

そういうことなのだ。

「俺は一生この部屋から出ねえっ！」

第2話 はじめての魔法

さて、今俺は窓際で悪魔の置いていった解説書とやらを読んでいる。

この世界は電気が通っていないようで（この家が空き家だからという可能性もある）、明かりがつかなかった。なので月明かりを頼りにするしかない。

ロウソクなりランタンなりが生活必需品としてあるのかもしれないが、今はそれを使うようなときでもない。資源は大切にしなければ。

「なるほど……こりゃ見事な異世界だな」

どうやらこの世界は魔法やモンスターの類が存在するファンタジーな世界のようなのだ。そして俺が今いるのは「ミカルト」という小さな町の一角にある空き家のようなのだ。この町は城下町から少し離れたところにある町で、他の町や村と交易を行いそこで仕入れた商品を城下町でさらに交易することで成り立っているようだ。交易の継地というわけだ。

「こんなところかな」

他にも別の町や、森などの場所についての説明や有名な人物や伝説の説明もあったがそれはどうでもいい。この部屋から出る気の無い俺にとっては外の世界や人間について知る必要は今のところなかった。

「それよりも、魔法だ魔法。なるべく部屋から出ないようにして生

きるには何が必要だ？」

水、食料、トイレ、風呂……。

「まずは水か……」

水。先ほど本で知ったが、この町には水道がそこまで発達していない。せいぜい役所のような大型施設くらいだ。ほとんどの住民は町にいくつがある井戸から水を調達している。

これは中々困る。見知らぬ男が今まで空き家だった場所に入りにしているところが見られてしまう。そもそも俺に生活に必要な量の水を運べるだけの力もない。

やはり魔法に頼るしかないな。

「ええと、魔法書は……これか」

日本語では無かったが、「世界魔法大全 - 1 -」という文字は読めた。

俺はその本をめくり、目次に目を通す。

「み、み……水の魔法……あつた！」

見事に発見。「水の魔法」というそのままの項目が存在した。急いでそのページを開け、文章に目を通す。

水の魔法

水、および氷と水蒸気を含む純水を操る魔法。または水にまつわる魔法。水は火、風、地の魔法と並んで四大元素の一つである。守護神はシュレイフ。

数ある魔法の中でも比較的簡単に使うことができるものが多い。

そのため大月暦 8 1 2 4 年現在世界で最も使用者の多い魔法である。

「なるほど」

「どうやら簡単な魔法のようだ。おそらく俺になら使えるレベルの魔法だろう。」

さて、探しているのは水を確保するための魔法だ。さらに本を読み進める。

……

・水を探知する魔法

自分の近くにある水を探し出す魔法。

右の魔方陣を地面（なるべく大地が好ましい）に描き、中央の円に榎の木の杖を挿し右の呪文を念じる。杖の倒れた方向に水が存在する。

この魔方陣で探すことのできる水は人間が飲むのに適したものである。魔方陣上部の文様により探す水の性質を変えられる。本書5巻の各種魔方陣の効果についての説明を読まれたし。

・水を召喚する魔法

自分の近くに水を召喚する魔法。水の守護神シュレイフの聖地より純水を召喚することができる。

右の魔方陣を描き、右の呪文を念じる。魔方陣の中央部から水が湧き出る。

魔方陣の大きさと文様の違いにより量と勢いを調整することができる。右の魔方陣は水を器に注ぐのに適した勢いのものである。

勢いの調節は魔方陣上部の文様を変えることで行う。本書5巻の各種魔方陣の効果についての説明を読まれたし。

「これだ」

水を召喚する魔法。おそらくこれを使えば飲み水を確保することができる。

どうやら魔方陣を蛇口のように使えるようだ。早速試してみよう。俺はそばにあったダンボールの一部を剥ぎ取る。そしてボールペンを使い、そこに魔法書に書いてあった魔方陣を丁寧に描いた。

さて、これで魔方陣は完成だ。いきなり大量の水を出して部屋が水浸しになっても困るので、小さめに描いた。

「えーと、何か水を入れるのに相応しいものは……」

と、部屋に転がっていた空の500mlペットボトルを見つけた。数日前に飲んでほったらかしにしていたものだ。よし、これでいいか。

俺はペットボトルの飲み口をダンボールに描かれた魔方陣の中央にしつかりと押し付ける。

もし水をこぼしても被害が少ないように部屋の隅へ移動し、腕を突き出す。

「よし、水よ、出るっ……！」

魔法書に書いてあった呪文を、頭の中で念じてみる。すると、

「おおっ!?!」

どくん、と腕に重い力が加わり下へ動いた。それと共にペットボトルにどばつと水が流れ込んだ。成功だ!

水はどンドンと溢れ出し、ペットボトルを8割がた満たしたところで止まった。

「やったぞ……! 俺、本当に魔法が使えるんだ!」

俺はダンボールを投げ捨て、ペットボトルを口にして水を飲んだ。

「……うまい！」

この水は守護神の聖地から召喚した純水であると書かれていた。日本で飲む水道水よりも遥かにうまかった。引きこもりになる前、幼少期に上った山で飲んだ湧き水、その何十倍もうまかった。

「これが、異世界ってやつか……なかなか住み心地いいじゃねえか……！」

俺は、魔法が使えた喜びと、その恩恵に与りうまい水を飲めた喜びで、胸が一杯になったのであった。

すると、窓の外に一筋の明かりが見えた。あれは……、

「朝日、か？」

俺の部屋があるのは空き家の2階部分のようだった。前にある住宅同士の間から見える丘の向こうから、朝日が昇ってきたのだ。

「綺麗なもんだな……」

つい俺はその美しさに見入ってしまった。別に日本で見ると朝日と何も変わらないのだが、今の俺にとっては絶景であった。

そして、

「……眠い」

ここで、一晩寝ていないことに気づいたのだ。そうだな、寝よう。

明け方に寝るのは慣れている。

俺はカーテンを閉めた。朝日がシャットアウトされ部屋は薄暗くなる。

「こっつして見ると、普段と変わらねえ部屋だな。荷物が増えたくらいで」

俺は、寝床に潜り込み、目を閉じる。

こっつして、俺はいつもと変わらない眠りの中へと落ちていくのであった。

第3話 使い魔が欲しい！

「……………ううん」

目が覚めた。

特に夢も見ず、ぐっすりと眠っていたようだ。

布団から這い出てカーテンを開ける。眩しい日の光に思わず目がくらんだ。今は何時だ？

時計なんてあるのかと思っただが、時計はこの部屋と一緒にこちらの世界に送られていた。

「……………12時か。お昼だな」

この世界の時間の流れがどうなっているのかは分からないが、日の昇り方や窓の下を通る人の数からしてお昼時のようだ。

「まだ外の人にはバレてないようだな……………」

もうしばらくはここに籠っていても余裕だろう。

そうなれば早めに体勢を整えなければ。次は何だ？ 食料？ トイレ？

「いや、違う。もっと先のことを考えなければ」

この部屋に長期間引きこもるために絶対必要なもの、それは……………、

「……………養ってもらえる人」

そう。引きこもりとは決して一人でできるようなものではない。部屋からなるべく出ないとすると、自分の世話をしてもらえる人は絶対必要だ。

自分一人で生きていくことも考えたが、やはり限界はあるだろう。ここは人の手を借りるしかない。

が、どうするか。俺はこの町に突如として現れたよそ者である。そんな人間を養ってくれるような人はいない。

となるとすることは一つ。

「召喚する、しかないか」

魔法が使えるのだ。ということは定番である召喚術も可能だろう。それで自分を養ってくれるような忠実な僕を作るのだ。

それならやってみるしかない。まずは調べることからだ。

俺は「世界魔法大全」の山を調べはじめる。「召喚魔法」については4巻目にあった。

召喚魔法

この世界、あるいは魔界やその他の世界からものを自分の元へ召喚する魔法。高度な魔法の一つであり、運用するには綿密な準備を必要とする。違う世界から召喚を行うにはこの世界からのものよりも多くの魔力を必要とする。

召喚魔法の起源は神代にまで遡り、神と魔族の対立の原因でもある。歴史に名を残す英雄の中には異世界から召喚されたものも多々いる。

使用するために多くの過程を必要とし、召喚による影響も大きい。ため個人での使用は憚られる。

うーむ。中々難しそうだ。しかも、召喚するといつても0から生み出すわけではないようで、これだと人を呼び出しても自分を養っ

てくれる保障は無い。

俺はさらに読み進める。

・生物の召喚

召喚魔法の中でも高度な技術を要する。失敗した場合、召喚対象を死に至らしめるだけではなく条件が悪ければ魔物と化する。

紙に指定の魔方阵（巻末資料153ページ）を描く。この魔方阵はこの世界全体を表している。召喚対象のいる地域にあたる部分に右の魔方阵を置き、中央の空白部分に対象についての情報を記入する。情報が詳しいほど成功率は上がる。

大きいほうの魔方阵の周囲に描かれた円の中に、召喚対象に合わせた魔力媒体を配置する。場所に指定は無い。召喚対象と魔力媒体の対応表は巻末資料200ページから500ページに記載。

最後に魔術適正のある者を最低3人以上集める（魔術適正が極めて高い者ならば1人でも可能）。集めた者を魔方阵の周囲に立たせ、右の呪文を念じれば召喚することができる。

本書ではこの世界からの召喚、それも簡単なものだけ記述している。高度な召喚や異世界からの召喚は世界へ多大なる悪影響を与えるとされ現在は限られた場合のみ使用される秘術とされている。

召喚魔法の全容を記した書物には大月暦1200年に書かれたマークリッド・マクセウス著『召喚術と異世界論』が存在する。レール王立図書館禁書庫に所蔵。

……これは参った。思った以上に難しそうだな、3人以上の人間が必要らしい。そもそも召喚対象はあらかじめ誰なのか分かってい
る必要があるとは。

がつくりとうなだれる俺。しかし、その下に書かれていた項目に
目が留まった。

・悪魔召喚

魔界から悪魔を召喚する。悪魔とは魔界に住み人を墮落させる存在である。

悪魔の召喚は古来から魔術師の間では必需魔法とされてきた。ただし過度な使用は召喚者の墮落と世界への悪影響を引き起こすため、これを禁止する国も多い。

悪魔がこちらの世界に出現するためには限られた場所に決まった時間を開くゲートに侵入するか召喚してもらうしかない為、呼び出された際は召喚者に対して友好的なものも多い。

召喚した悪魔は召喚者に対し知識や物品、使い魔などを与える。短所としては悪魔を召喚した者は神聖属性の魔法の恩恵を得られなくなる。

召喚の方法は、召喚したい悪魔に対応した魔方陣、魔力媒体、呪文を用意する。魔方陣の中央に魔力媒体を置き呪文を唱えると対応した悪魔を召喚することができる。悪魔によっては特殊な召喚方法が必要。使用者の魔術適正が低い、神の加護を受けている等の場合は失敗することもある。失敗すると対応した悪魔の眷属が呼び出され、召喚者を攻撃することもある。

召喚できる悪魔と対応した召喚方法については巻末資料580ページから700ページに記載。ただし悪魔召喚は魔術の中でも莫大な資料を有する分野である。本書は其中で実用性が高くよく召喚されるものを抜粋して掲載している。

悪魔召喚専門の文献にはセントニウス・オウル著『悪魔召喚』が存在するがこれは禁書であり入手は難しい。マスレイドン著『悪魔召喚大全』は危険な悪魔を除いた悪魔召喚専門の魔術書であり、多くの魔術師は一般的にこちらを使用している。

この長い項目を読んだとき、俺の目に入ったのは「使い魔」という言葉だった。そうだ、使い魔だ。ご主人様に忠実な使い魔を呼び出して、そいつに養ってもらえばいいのだ。

となるとその使い魔を呼び出す方法が必要だ。悪魔に使い魔をも

らうという方法もあるがそれは最終手段にしよう。あんまり頼りたくは無い。

俺は再び魔法書を漁り始めた。

「……あつた！」

『世界魔法大全 - 6 -』の中に使い魔の項目があつた。

使い魔

魔術師に使え補佐を行う存在。主人の為ならばどんな命令でも聞く。神のような上位存在を除く自立的に行動するもの全てを使い魔として使役できると言われている。

単純な主従関係やペット、支配魔法等によって使役するものとの決定的な違いは自らの意思を持ちながら最終的な決定権は主人にあるという点である。また使い魔は主人の魔法の恩恵を受けやすいという性質も持つ。

使い魔を入手する方法はいくつか存在し、使い魔によって異なる。

この項目に入手方法が書いてあるようだ。

・使役魔法の使用

使役魔法によって対象を使い魔にする方法。この魔法をかけられたものは使い魔として主人に使えることになる。

使役魔法は操作魔法の中でも最上位に位置する魔法であり、それだけにこの魔法を解くためには上位存在による改変を必要とする。

ただし失敗する可能性も高く、対象の知能と魔術耐性が高いほど成功しにくい。当然だが非生物には無効。

右の魔方陣を描き、その上に対象を置き右の呪文を念じると対象を使役することができる。ただし使用時に多くの魔力を消費するためマグナイト鉱石20g相当の魔力媒体が必要となる。

・使い魔を生成する

1 から使い魔を生成する方法。基本的には鉱石や道具のような非生物に命を与えそれを使い魔として使役することとなる。そのため創造魔法の一種でもある（創造魔法については本書13巻に記載）。対象となるものを用意する必要はないが、動物のような創造難度の高いものを使い魔とする場合は上記の使役魔法よりも可能性は低くなる。失敗した場合は「アリスト」（不定形な出来損ないの生物）となって生まれてしまうので注意が必要。

非生物系の使い魔はあまり頭が良くないので使用状況は限定的。

右の魔方陣を描き、その上に希望する使い魔を描いた紙を置く。そして右の呪文を念じると紙に描いた特徴を持つ使い魔を得ることができる。使い魔の特徴をより細かく指定する場合は本書1巻の巻末資料200ページから1000ページを参考に描くこと。

・死体から使い魔を生成する

死んだ生物を利用して使い魔を生成する方法。最も使用されている方法である。

黄泉から再び魂を呼び戻し、新たに使い魔としての特性を与えた上で復活させる。蘇生術の一環であり、特徴も類似している。

魂を利用しているため、死後長期間経過した死体の場合は記憶や知識が欠如したり最悪の場合アンデッドとして復活してしまう。また、悪魔と契約している、神の加護を受けている等魂が他のものに所有されている場合は失敗する。

右の魔方陣を描き、中央に対象の死体を置く。その後対象の体全体に満遍なく水を撒く。そして右の呪文を念じると対象が復活し使い魔となる。

・悪魔から入手する

悪魔を召喚し、眷属を使い魔として授かる方法。

悪魔によつて眷属の種族は違つたため欲しい使い魔を持つ悪魔が危険な悪魔の場合は使用しないことを推奨する。入手できる使い魔は当然魔界に住む魔物のため、人間や神聖な動物は入手できない。悪魔の召喚については本書4巻に記載。

「おいおい、思ったより厳しくないか……これ」

上二つの方法は難易度が高いと言われていて、3つ目の方法は死体が必要らしい。いや、一番上の方法も対象になる生物が必要と言われている。

今入手できる生物またはその死体はせいぜい虫やネズミ程度のものだらう。そんなもの使い魔にしても役に立たない。1から使い魔を生み出すにしても生物を作るのは難しく何やら失敗するリスクもあるらしい。当然非生物を使い魔にする気も無い。

となると……、

「やはり、悪魔か……」

頼りたくはないがここは悪魔を召喚するしかない。

よく考えれば俺は既に悪魔に会つていて魂を賭け金にされているのだ。今更だ。

「ええと、確か悪魔召喚には専門の本があるんだっけ？ それはここににあるのか？」

俺は本の山をかき分ける。

「……あつた。これが」

「悪魔召喚大全」。先ほど魔法書で読んだ、危険でない悪魔の召

喚方法を集めた本だそうだ。

早速俺はこれを読むことにした。

・アーグ・ロウエイ

神代から存在しているとされる悪魔の一種。序列15位の高等悪魔である。悪い噂や陰口を司り彼の手に堕ちた町は不和が蔓延りやがて崩壊する。

醜悪な犬の顔を5つ持ち、そのどれもが罵詈雑言を吐く。右手に持った剣は強固な城壁をも切り裂くとされる。

召喚者したものに敵対するものの悪い噂を流布することができる。使い魔を願った場合は口の悪いカラスや黒犬を与える。常に悪態交じりで話すため意思の疎通が難しい。

魔方陣に彼の悪口を書いた生物の肉を捧げ、呪文を念じると召喚できる。

こんな風に悪魔の説明と魔方陣がずらりと書かれている。

俺はその中から、なるべく人型で頭の良さそうな使い魔をくれる悪魔を探すことにした。

第4話 悪魔召喚の儀

さて、あれから数時間。分厚い魔法書をざっと読み目ぼしい使い魔をくれる悪魔をリストアップした。

これが結構骨が折れる。なんせ召喚できる悪魔は数百種類いるのだ。さらにこの本の冒頭には、

そのため本書に記載している悪魔は召喚しても被害の少ないものである。また、これらに加え強い力を持たず名前もほとんど知られていない悪魔や新しく生まれた悪魔、神との戦争の中で行方不明となった悪魔などが存在しており、本書は魔界に住む悪魔の数十分の一程度のものしか記載をしていないことになる。

なんて書いてある。一体どれだけ悪魔いるんだよ。ということ、俺が選んだ悪魔が次の4つである。

・イットウル

序列31位の悪魔。悪魔の大富豪とも呼ばれており、その名に恥じず魔界に巨大な城を構え魔界の交易を支配している。

ワニの顔をした太った男のような姿をしており、三つ首のラクダに乗って現れる。

彼に取り憑かれた者は金の亡者となり金品を溜め込むことしか考えられなくなる。その末に死ぬと溜め込んだ資産は全てイットウルに押収されるという。魂を奪わない珍しい悪魔である。

召喚された場合、召喚者の提示したものの価値を教える。また、商売の技術も授けることができるがその手段は善悪問わないものである。使い魔を望んだ場合、財宝の在り処を探し当てるトカゲ、または商売の才能に富んだ魔族の男を与える。

望む内容によっては金品を要求されるが、交渉次第で免除してもらえる。

魔方阵の中央に金貨数枚を乗せ、呪文を念じると召喚される。

・サリバ・スクトウラウト

序列178位の悪魔。銅を操るとされ、銅山に出没することもある。そのため一部の銅山では彼を崇める習慣があるという。

筋肉質の男の姿で現れる。その頭や背中からは銅の棘が生えている。全身が青銅でできた馬に乗っている。

サリバ・スクトウラウトの怒りに触れたものは銅像にされ、彼の館の庭に飾られると言われている。万が一怒らせてしまった場合には川魚を捧げると怒りは収まるが確証はない。

召喚された場合、召喚者の提示したものを銅に変える。また、沢山の銅製品を与えることもできる。使い魔を望んだ場合、4千里走っても疲れない馬が聞き分けの良い魔族の子供を与える。

魔方阵の中央に川魚を置き、呪文を念じると召喚される。

・ジステイラ

序列201位の悪魔。元々は北国の山中にある村で崇められていた異形の生物であったが、死後悪魔によって復活し自らも悪魔として魔界へ住むことになったという。

霧と共に現れるため姿を確認することは難しい。彼が崇められていた村の言い伝えでは鳥の頭を持つ怪物であったとされるため、そのような姿をしていると思われる。彼に捧げられた生贄の娘達を魔界の館に住まわせており、彼女を連れて現れることもある。

召喚された場合、召喚者をしばらくの間寒さから守る。使い魔を望んだ場合、生贄となった娘を使い魔として与える。

魔方阵を描き、呪文を念じると召喚される。

・レイロロウ

序列290位の悪魔。女の悪魔である。

黒い服に青紫の頭巾を被ったまつげの長い女の姿で、赤毛のライオンに跨って現れる。

彼女の住処に繋がる谷間がどこかの森に存在し、森に迷い込んだ人間を巧みに谷間へ誘いこみそのまま魔界へと連れ去ってしまうという伝説がある。

召喚された場合、召喚者に占星術の知識を与える。使い魔を望んだ場合、羽の生えた魔族を授ける。レイロロウは口数の少ない悪魔で必要最低限のことしか話さない。使い魔にもその傾向が見られるが主人の言うことはよく聞く。

魔方阵を描き、呪文を念じると召喚される。

以上だ。どの悪魔も人型の使い魔をくれるようだ。

さて、誰を選ぼうか。

女の悪魔レイロロウ。彼女の使い魔には羽が生えているらしい。今後外に出て活動してもらうことも考えると、これは不便だ。まずはこいつを却下。

イットウルの使い魔には商売の才能がある魔族の男がいる。割と良さそうではある。が、イットウルは召喚時に金品を要求することもあるようなので、とりあえずは保留だ。

ジステイラは生贄となった娘。死んでいる……のだろうがまあ使い魔なので気にする必要はないだろう。特に言うこともない、普通の使い魔のようだ。

サリバ・スクトゥラウトは聞き分けの良い魔族の子供。これも問題は無さそうだが……が、よく見たら召喚に川魚が必要らしい。これは用意できない、残念だ。

となると、イットウルかジステイラだが……これはジステイラかな。

イットウルは金品を要求するという不安点もあるが、使い魔は魔族だ。もしかすると角や尻尾があるかもしれない。

それに対しジステイラの使い魔は生贄となった村娘だ。こちらのほうが安全だろう。召喚に特別な条件もない。

ということで俺はジステイラ召喚のための準備をすることにした。どうやら魔方阵は水を出したときよりも大きなものが必要らしい。何か大きな紙はないだろうか……と探して見つけたのが、壁に貼ってあったアニメのポスターだった。

ちょっと勿体無いが、ここから出られても出られなくてもいらない物になるだろうということだ。思い切って使ってしまうことにした。ポスターの裏にマジックで魔方阵を描く。そして敷いてあった布団を畳み部屋の隅に寄せ。魔方阵を部屋の中央に置いた。

カーテンを閉め、俺は深呼吸する。さあ、呼ぶぞ……！

(出るっ……！)

俺は目を瞑り、呪文を心の中で強く念じる。すると、部屋の温度が急に下がった気がした。

成功か！？ 俺はゆっくりと目を開ける。すると、

部屋の中は白い霧で充満していた。魔法書に書いてあった通りだ。

やった、成功した！

「私を呼んだのは、お前か？」

「！」

霧の中から、男の声がした。しゃがんでいるが、それは若い男のものに聞こえる。

俺は相手を怒らせないように、落ち着いて答える。

「はい、あなたを呼び出したのは私でございます」

「そうか。私はジステイラ。霧と氷の悪魔である。お前の名はなんだ？」

「はい、ハルミと申します。この度はあなた様に願いがあってお呼びいたしました」

「ふむ、私を呼び出す魔術師は久々だ。今日は気分が良い。では言うがよい、お前の望みを」

……良かった、機嫌がいいようだ。

「使い魔が、欲しいのです」

「……なるほど、使い魔だな。分かった、お前の願い聞き入れた」

すると、あたりの空気が先ほどよりもさらに冷たくなる。あたりの霧も深くなりどんどん視界が狭まってゆく。

だんだんと体が寒さに耐えられなくなり、ガタガタと震えだした。寒い、が、耐えるしかない。一種の試練だと思っしかなかった。俺は肌を突き刺すような寒さの中、ひたすら立ち続けた。

「よし、連れてきたぞ」

「……え？」

ジステイラの声がすると、今まで部屋を覆っていた霧がだんだんと晴れてゆく。それと共に寒さも和らいできた。俺はこわばらせて

いた腕を解く。

「それでは、私の僕をお前に授ける。自由に使うことだな」

その言葉が終わったあと、白い霧が渦巻き、魔方陣へと勢いよく吸い込まれていった。

そして、その後に残ったのは……、

「……え？」

女の子だった。

しかも、美少女だった。

さらに言えば、メイド服だった。

「えええっ!?!」

「ひいつ!?!」

俺が驚くと、その子も驚いた。

だって、メイド服だ。いや、いくら生贄にして自分の家に住まわせるからってメイド服? どんな趣味の悪魔だよっ!

……いや、現代日本の基準で考えるな、魔界ではこれが普通なんだ。

俺は深呼吸をし、目の前の美少女に話しかける。結った長い黒髪と、白い肌が美しい。見た目的には14〜18歳の間くらいだろうか。

「お前が、俺の使い魔か？」

ちよつと偉そうな言葉遣いだが、使い魔は魔術師の下僕だ。言葉遣いを気にする必要はない。

「はい、ご主人様。私はジステイラ様の元より参りました、サキア・アーストランドと申します」

「サキア……か。俺はハルミだ。よろしくな」

「はい、ハルミ様」

深々と礼をするサキア。礼儀正しい子のようだ。

「じゃあ、お前のこと俺はよく知らないし、簡単な自己紹介でもしてくれないか？」

「自己紹介……ですか？」

「そうだ。お前がどんな奴か知っておきたいからな」

「はい、分かりました。私は16の頃にジステイラ様の生贄として選ばれました」

16で生贄かぁ……よく考えたら壮絶な人生だ。

「その後ジステイラ様のお屋敷で雑用係として35年間お仕事させていただき、そして今日ご主人様の元へ参りました」

「さ、35年間……!？」

第5話 引きこもりの同居人

使い魔メイド少女サキアは、元々は人間だったわけである。これは俺にとっては好都合だった。

なぜならば、彼女は这个世界の仕組みについて知っているのである。今まで説明書を読んでいた俺だが、実際に这个世界に暮らしていた彼女に聞くほうがよっぽど早いのである。

そんなわけで、俺はトイレと風呂の問題を解決した。

そもそも魔法には必ず魔力媒体というものが必要で、それを消費することで使えるものらしい。今まで読んできた魔法書にも時々書かれていた。

が、特に魔力媒体に指定のない魔法もいくつかある。それらの魔力媒体の多くは、使用者自身であるらしい。

一般的に広まっているシステムの魔法は使用者自身を魔力媒体とする場合、生きていくための重要度の低いものから消費されていくらしいのだ。つまりは排泄物や垢である。

ちよつと都合が良すぎるのではと俺も思ったがサキア曰く、

「現在広まっている魔法は構築者が様々な研究を重ねた結果完成した、利便性に富んだものなのです」

ということらしい。ようは魔法も手軽に便利に使えるように色々研究されているわけだ。俺のいた世界でいうパソコンの進化に近いのかも知れない。

魔術師は部屋に籠りきりになることも多いらしいので、食事と排泄の手間を省きたがるんだとか。

というわけで俺が不安視していた問題も大分片付いた。もちろん全くトイレや風呂を使う必要がないわけではないらしいが、頻度が

極端に減るならばこの部屋内で魔法の力で済ませてしまっていていい。あとは食べ物か。数週間分の食料はあるしサキアは料理もできるだろうが、食材をどうやって調達するかも考えなくては。

「ご主人様、お屋敷のお掃除が終わりました！」

サキアが扉を開けて入ってきた。

「ご苦労さん」

「ありがとうございます！ あ、これ頼まれていたものです！」

サキアが紙を差し出す。それに書かれていたのはこの家の概要だった。

一階には玄関、客間、居間、台所、トイレ、2階には空き部屋が1つと俺の部屋。こじんまりした民家のようだ。

「この家、人が住めそうか？」

「はい、ところどころ古くなってはいいましたが問題はありません。なるほど。じゃあここに住んでいいようだな。」

「なあサキア」

「はい、何でしょうか？」

「お前、飯は食うのか？」

「私は使い魔なので魔力媒体を消費すれば必要はありませんが、普

通に食事をしたほうが効率はいいかと思います」

「そうか、じゃあやっぱり食材の確保は重要だな」

「それならば私が調達しますよ？ ご主人様がお屋敷から出られないのであれば」

「いや、問題はその調達の方法なんだ。今俺はある程度の金は持っている。しかし俺は金を稼ぐ手段を持っていない。どうにかして食費を捻出する必要がある」

うーむ、と俺は頭を抱える。サキアも人差し指を顎に当て首をかしげ、考えるポーズを取る。

「あ、それならば！」

と、サキアが言った。

「なんだ？ 何か思いついたのか」

「私がお金を稼げばよいのです！ 元は取るに足らない村娘でしたが、今では魔界の力を得た使い魔です！ この町周辺のモンスターなら取るに足らないでしょう！ 討伐の依頼を受けてそれでお金を稼げばよいのです！」

……え？ いきなり何を言い出すんだこいつは。

「ま、待て。お前を働かせるわけにはいかん」

「ご心配いりません！ こう見えても私、モンスターの討伐経験は

ありまして！ 大きいものなら四つ首の化け熊を一人で屠ったこと
もありません！」

なんでこんな饒舌になっているんだ。もしかして意外と戦闘狂だ
ったりするのか。

「そついう問題じゃない。確かにお前は強いのかもしれんがメイド
のお前があんまり外に出すぎるのもよくない」

「……そ、そうですね。過ぎた真似を、申し訳ありません」

あと、異世界まできて人の金で生活するのはちょっと嫌なのもあ
る。金くらいは自分で稼ぎたい。

「俺としては、自分の魔法で金を得ることができればいいのだが…
…」

こう考えるとイットウルに使い魔を貰ったほうが良かったのかも
しれない。今となつては無駄なことだが。

……いや、待て。金と魔法……、相応しいがあるんじゃないか？

「錬金術……！」

「ご主人様、どうなさいましたか？」

そつだ、錬金術。金を作り出す魔法の代表格、きつとこの世界に
もあるんじゃないか？

「なあサキア。錬金術は知っているか？」

「は、はあ。石を金に変えられるという魔法ですか？」

「そうだ。それを使って、金を稼ぐ、というのがどうだ」

「しかしご主人様。差し出がましいようですが、錬金術は、ちょっと無理があるのでは……」

……は？

「どういうことだ？」

「錬金術は古来から魔術師にとって重要な魔術だといわれています。ですが、鉱物を価値のあるものへ変化させる錬金は実用性は薄いと
言われていました……」

「な、なんだって……？」

俺は「世界魔法大全」を取り、錬金術の項目を探す。それは6巻にあつた。

錬金術

ものの元素を操り性質を変える魔法。

神代には既にその基礎となる理論が構築されていたと思われる資料が残っている。古来は薬学の一種と捉えられていたが、研究が進むにつれて全ての元素にまつわる魔法であるとされ一つの魔法学として独立した経緯がある。

その研究と魔法の膨大さから、悪魔召喚や占いと並んで魔法の代表分野として挙げられる。

魔術師の中でも錬金術を専門とするものは錬金術師と呼ばれ、彼らの目的は元素を自由に操る魔力媒体「賢者の石」の作成であるこ

とが多い。しかし歴史的に見てもこれを完成させたものは少ない。高価な鉱物入手するために錬金術に手を染めるものも多いが、錬金術の魔法はどれも特殊な魔力媒体を必要とし対価と釣り合わないため推奨はしない。特殊な薬を作るためや、魔力媒体の不足を補うために使用されることが多い。

「くそっ……確かにこれは無理そうだ……」

ようは、金塊1個作るのにダイヤモンドを大量に消費しなければならぬとか、そういうことなんだろう。まあ世の中そう上手くはいかないよな。

「どうすればいいんだ……」

このままでは貧困に飢えて死んでしまう。

「あの、ご主人様……」

サキアが心配したように話しかけてくる。

「なんだ」

「魔法で生計を立てるならばうつってつけのものがあるのですが……」

「っ!?!? なんだ!?!? 部屋から出なくてもお金を儲ける方法が!」

「あります!」

次は自信たっぷりに言った。

本当にそんな夢のような方法があるのか？

「それは何だ？」

「占い、です！」

「占い？」

占い…… 占い……、な、なるほど……！？

「魔術師の多くは近隣の住人からの依頼を受けることで生計を立てています。その中でも、自宅からあまり出ない者の多くは占いで報酬を得ているそうです。ご主人様ほどの魔法適正を持つ方ならば占いをするには十分でしょう」

「なるほど！」

確かに、占いは盲点だった。なんか俺の住んでいた世界にもあるつちやあるものなのでなんとなくファンタジー感が無くて意識の外にあった。

「よくやった、サキア！」

「ありがとうございます！」

「じゃあ今から勉強をしなければいかん！ お前は夕飯を作って来い！」

「はい、分かりましたご主人様！」

こうして、収入の目処は立った。
俺の引きこもり生活は明るい！

第6話 「占い」の世界

この世界で金を稼ぐにはまず占いからが手っ取り早いと知った俺は、占いを学ぶためにお馴染みの「世界魔法大全」を開く。

占いの項目は3巻にあった。

占い

魔法の力で対象の特性や未来を知る魔法。

広義の意味での「占い」は魔法適正の無い者でも可能である。成功率が低く「迷信」と呼ばれる行為がこれに当てはまる。

本書が意味する「占い」とは通常では低確率でしか成功しない特性や未来を知る行為を魔法の力で成功率を引き上げることとする。

また、似た行為として「神託」が挙げられるがこれは占いにおける魔法が神通力に置き換わったものである。

占いの歴史は神代に遡り、魔法の中でも最も古いものであると言われている。

占いの種類は数千種類に及び、本書でこれらを全て記すのは不可能である。

占いを専門に扱った魔法書には、レキウリス著『ミストルア』があるが、禁書とされており閲覧は難しい。オーギス王立魔法図書館編纂の『世界の占い』は一般公開されているため閲覧が可能。

こんな感じの項目だ。

占いは相当数が多いようで、確かにこの本でもかなりのページ数を使っているようだ。流石に全てを見るのは無理だろう。

今までの魔法書は上のほうに書かれている魔法ほど有名だったり使用者が多かったりしたので、とりあえず最初のほうのページを見ればいいだろう。

俺はページをめくった。

・占星術

天の星の力を利用することによって対象について占う魔法。知識さえあれば魔法適正が薄くとも成功しやすい魔法。

占いの中で最初に魔法として理論が確立されたものと考えられている。古来より民衆の間でも親しまれた魔法であり、使用者も最も多い。

占いの中でも成功率が高い部類の魔法である。国や世界といった大きな対象を占うことに適した魔法であるが、その反面個人のような小さな対象を占う場合は成功率が落ちる。

占星術の派生として「星占い」があるが、これは占星術を研究する過程で発見された、対象の生まれた月の星と対象が持つ特性の法則性をまとめ魔法適正を持たない者が簡易的に占星術ができるようにしたものである。

なるほど、テレビ番組でやってる星占いが外れるのはマジの占いをかいつまんでやってたからんだな。

いやいや、そんなわけないか。そんなことよりも、占星術は個人を占うのには向いていないようだ。俺はこの町の住民に対して商売するわけだからなるべく個人向けのがいいかな。

占星術のページは意外に多く、占いの項目の4分の一程度はあった。

その他の占いだと、水晶占いや甲骨占いがあったが、これも必要なものを揃えるのが難しそうなので却下した。

やはり今すぐ始めるとなるとなかなか条件にあったものが見つからない。

「うーむ、これは参った」

俺が悩んでいると、ドアの外から声が聞こえた。

「ご主人様、夕食を持ってまいりました」

「おう、入っていいぞ」

「失礼いたします」

ドアが開き、サキアが入ってくる。手には料理の乗った皿を乗せたお盆を持っている。

「ええと、どこに置けばよろしいでしょうか？」

そういえば、この部屋には机はパソコンデスクしかない。というかこのパソコンどうしようか。

「そうだな、じゃあ……」

俺は本棚の前に積み重なった通販のダンボールの山から大きめのものを選び、部屋の中央に置いた。

「とりあえず、ここに置いといてくれ」

「はい、分かりました」

サキアは屈み、ダンボールの上にお盆を置いた。

肉を焼いたものと、スープとパン。あまり豪華とは言えないが今ある食材で作るならこんなもんだろう。それよりもいい匂いだ。早速腹が減ってきた。

「サキア、お前はどつするんだ？」

「私は余った食材を適当に料理して食べますので……ご主人様はお気になさらず」

「そうか、悪いな。いつかお前にも上手い飯を食わせてやれるように努力しないとな」

「いえいえ、大丈夫です！ その気になればネズミでも生で食べられるので！」

「それはやめろ！ ネズミを踊り食いするようなメイドは嫌だぞ」

「す、すいません！ ご主人様を不快にさせてしまい申し訳ありませんでした！」

「い、いや、まあそこまで謝る必要はないけどな」

なんでこの子はちよくちよくバイオレンスなんだ。腐っても魔界の住人なのか。

「……そうだ。さつきあんなに張り切っていてこの有様なんだが、色々調べてみたが今すぐ始められそうな占いが見つからないんだが、お前何か知ってるか？」

「占い、ですか？ そうですなえ……」

サキアは考えているポーズをとる。

「私の暮らしていた村は、村に住んでいた魔術師がジステイラ様の恩恵を受けて占いをしていました……」

「ほう、悪魔にも占いができるのか」

「はい。というよりも占いや呪いまじないは悪魔の得意とする分野なのです」

「なんだと、それは知らなかった」

あの魔法書にはそんなこと書いていなかったぞ。もしかしたら見
ていないページにあったのかもしれないが。

「ジステイラ様はそれほど占いが得意な悪魔ではありませんが、多
くの悪魔は占いの力を持っているのです」

へえ、なるほど。確かに「召喚者に占いの知識を授ける」と書か
れた悪魔は結構いた気がする。

「占いが得意な悪魔を召喚し、その恩恵に与るのはどうでしょう
か？ 私も何名か心当たりがございます」

「そうだな。それが确实そうだ」

一度悪魔を召喚してしまったのでもう怖いものなしだ。

「そうと決まれば早速悪魔を探すとするかーっ！」

と、腕を突き上げたとき、

ぐうっ

俺の腹が鳴った。サキアはきよとした顔で俺を見ている。やっぱり、恥ずかしい。

「……やっぱり飯が先だな。すまないがちょっとここで待っていてくれないか」

「はい、喜んで！」

俺は床に座り、簡易食卓を前にする。こうするとよりいっそうよい香りが鼻を刺激する。

サキアも俺に合わせ、スカートとエプロンを丁寧に揃えながら上品に床に座った。

よく見ると、サキアは靴を脱いでいる。何も言っていないのに俺が部屋で裸足なのを見て察してくれたのだろうか。よくできたメイドだ。

と、サキアの白いストッキングに包まれた足を眺めている場合はなかった。

「いただきます」

俺は手を合わせ、ナイフとフォークを取る。

いそいそと肉を切り、フォークに刺して口へ運んだ。

「……う、旨いっ！」

旨い、めちゃくちゃ旨かった。噛み締めると肉汁があふれ出し、ジューシーな味覚が口いっぱい広がる。そして、最後にほんのりとした甘さが残った。

なんだこれ、何の肉かは分かんが旨い！

「おいサキア、旨いぞー!」

「あつ、ありがとうございます」

顔をぱあつと明るくして喜ぶサキア。

「しかしこれ、何の肉だ? 牛や豚かと思ったが、微妙に違う気がするし……隠し味とかか?」

「それは牛の肉ですね。ですが、ご主人様のおっしゃる通り、隠し味を入れてあります」

「何だ、それは?」

家を掃除していたら見つけた怪しいキノコを入れてみましたー、とかはやめてくれよ?

「私の、髪です」

……は? 今、なんて?

「えつと……サキア? 何を入れたって?」

「私の髪の毛です、ご主人様」

「はあああつ!?!」

髪の毛ツ!?

「ひいいいっ！ 申し訳ありませんっ！」

涙目になりながら後ずさりするサキア。

「なんで髪の毛なんて入れたっ！？ といっかなんで髪の毛でこんな味になるんだっ!？」

「そっ、それは……」

サキアはガクガクと震えている。

「いや、俺は怒ってるわけじゃない。驚いてるだけだ。教えてくれ」

「は、はい……」

ふう、とサキアは息を吐き体勢を戻す。

「はい、ジステイラ様に捧げられた生贄は魔界の住人となります。その際、ジステイラ様に仕える役割ごとに体質が変化するので」

「……ほ、ほう」

「私達メイドはジステイラ様の身のお世話をするのに相応しい特徴を持った体になるのです」

「な、なるほどな」

まあ、分からんでもないな。ここまででは。

「その特徴の一つが料理に合わせ様々な味に変化する髪の毛です。」

ちなみにこの髪の毛、束ねて使えばしつこい汚れを落とすタワシ代わりにもなります。あ！もちろんタワシに使うときは切り落としているので清潔です！」

「う、うーむ……」

それを何故髪の毛の特性として与える必要があった？

「他にも用途に合わせて様々な特徴がありますよ。爪や汗、あとは……」

「いい、もういいー！」

これ以上聞くに変なことまで口走りそうなので制止した。知らないほうが良いこともある。俺に危害があるわけじゃないだろうしな。

「ご主人様……もしかして私のことが嫌いですか？」

「いや、そんなことはない。ただな、ちょっと信じられないというか」

「信じられない……のですか？」

「今までこんな経験ないわけだし、カルチャーショック的な？」

「そうですか……」

と、サキアは立ち上がった。え？

すると、食卓をよけて俺のほうへ歩み寄った。何をやる気だ？

「それならばご主人様……」

「っ!?!?」

サキアは、俺の目の前でしゃがんだ。端正な顔がぐっと近くなる。そして、揉み上げの髪の毛を手のひらの上で軽く束ねるように整える。そして、

「味わって、みますか?」

そう言って髪の毛を差し出してきた。
コイツ、何やってんだ!?

「ちょ、ちょっと待って!」

「大丈夫です。髪は常に清潔に保っております」

そういう問題じゃねえ!
ぐっと近くなった髪の毛から、ほんのりと美味しそうな香りが漂う。

そんなことより顔が近い! こいつ怖い!

「待て! ストップ! ストップ!」

「……あっ! はい! すいません!」

サキアはすっと身を引いた。

「分かったよ、信じた信じた。髪の毛を使つなとも言わんから、な
?」

「す、すいません。ご主人様を驚かせてしまったようで」

「いやいや、郷に入れば郷に従えっていうし、俺が慣れるしかない」

サキアは再び立ち上がり、元の位置に座る。

俺も食事を再開することにした。

「……なあ、お前みたいな体の変化って、魔界の住人になった人間みんながそうなるのか？」

「はい。魔界に住むためにはこちらの世界のままでは適応できません。そのため何かしらの変化は起きます」

なるほどな、つまり魔界の人間はみんなこんな珍妙な特性を持つてんのか。

「ジステイラ様はその変化を意図的に操作して、メイドに相応しい特性を与えているのです」

……は？ それってつまり、

「……お前の髪の毛が旨いの、ジステイラがそういう風に操作したってことか？」

「その通りですね」

あの野郎ーっ！ 生贄の女の子をメイド姿で働かせているだけでも十分変態だと思っていたが、相当な変態じゃねーか！

しかもよく考えてみる。バイオレンスで料理に髪の毛入れるメイ

ドって完全にヤンデレじゃねえか！ あいつはヤンデレメイド萌え
のド変態悪魔かよ！

「……ご主人様、どうかしました？」

「いや、なんでもない。旨いぞ、飯」

「ありがとうございますっ！」

満面の笑みを浮かべるサキアを見ながら俺は苦笑するのであった。

第7話 狂気の悪魔

食事を終えたときには外はすっかり暗くなっていた。が、俺の部屋の中は本を読むのには十分な明るさが確保されている。

サキアの魔法により、小さな光球が10個程度この部屋の中をふわふわと飛んでいる。

……ちなみに、この光球の正体、サキアの脂、らしい。

本人曰く、「不要な脂分を抽出し燃料として光らせているのです」と言っていたが、いくらなんでも生々しすぎないか。

そんなえげつないことを平気でする彼女は食器を片付けに行っている。俺はその間にサキアに教えられた悪魔を「悪魔召喚大全」で調べているところだ。

「ええと……エークエル、はどこだつと」

教えられた悪魔の名前は「エークエル・エエイエス」。エが多くで言い辛い。

どうやらジステイラの知り合いの悪魔らしい。変態の知り合いなのできつとこいつも変態なのだろう。

「エークエ……、あつた！」

俺は求めていた悪魔の名前を発見した。

・エークエル・エエイエス

序列118位の悪魔。通称肉塊の悪魔。

殺した者の体の一部をもぎ取り自分の体に埋め込むことで成長し続ける悪魔。戦を好み、戦の噂を聞きつけると眷属を送り死体を集めるさせる。打ち捨てられた身寄りのない死体を処理すると伝えられる。浮浪者の中には彼をかたどったアクセサリーを身につけるとで死後の保障とする者もいる。

悪魔召喚によりこちらの世界へ呼び出された際には巨大な腕の姿で現れる。腕の手のひらの部分に男の顔が付いている。

召喚された場合、肉体の一部を提示すればの持ち主を探し出し、召喚者が望むならばその場で殺す。または人を占うための技術を与える。使い魔を望んだ場合には、屍食鬼^{グール}か賢いシテムシを与える。魔方阵の上に召喚者の肉体の一部を置き、呪文を念じると召喚できる。肉体は量が多いほど成功しやすくなる。

「……」

とんでもないイロモノだ。変態を通り越してサイコパスじゃねーか。いや、悪魔に言う言葉ではないな。

エグい性格している割には警察犬みたいなことするんだな。というか占いがオマケみたいに書かれているぞ。本当に大丈夫なのか？

「ご主人様、入ってよろしいでしょうか？」

「あ、いいぞ」

ドアが開きサキアが帰ってきた。

「飯は食ったのか？」

「はい。もう済ませてあります」

「よし、俺も言われた悪魔を見つけたところだ。早速召喚するぞ」

「はい！」

不安しかないけどな！

俺は壁に貼ってあったポスターを剥がし、召喚のための魔方陣を描く。

すると、サキアが後ろから話しかけてきた。

「あの……ご主人様、少し気になることがあるのですが……」

「なんだ」

「その紙に描かれていた絵もそうなのですが、ご主人様の部屋にはメイドの絵が沢山ございますね」

「ブツ！」

思わず吹き出した。

「一体これは何なのだろうと思ひまして……」

そこ聞いちゃうの？

「そ、そうだな……」

どっやってかわすべきか……。

「……いずれ話す」

「はい！ すいません、失礼いたしました」

逃げる！

そんなこんなで魔方陣が完成した。

さて、あとはここに俺の肉体の一部を置けばいいらしい。

「なあ、肉体の一部って、もしかして片腕よこせとかそんなもんじやねえだろうな？」

「いえ、髪の毛や爪でも召喚できますよ」

「そうか、良かった」

俺は適当に髪を掴み引つ張る。今日はやけに髪と縁があるな。

ブチッ

痛え。

今髪を抜いたことをのちに後悔するようないかならないのを願うばかりである。

俺は抜いた髪束を魔方陣の中央に置く。

「さて、召喚だ」

「……はい」

サキアも緊張しているのか、ごくりと唾を飲む。

俺は、先ほどやったように頭の中で呪文を念じる。

すると、周囲の空気がぐるぐると渦巻き始めた。それと同時に魔方阵が光り始める。

「きましたよ……!」

サキアが呟く。

やがて俺の髪の毛が風に巻き上げられ、ふわりと浮き上がったその時だった。

『ウオオオオオオオオーツツ!!!!!!』

「なツ!？」

「きゃっ!？」

魔方阵から巨大な腕が伸びたのだ。その腕は拳が天井スレスレの位置まで伸びたところで、止まった。

成功……したのか？ 土色の握り拳が、ゆっくりと開きはじめる。

「我を呼んだのは……お前か？」

開いた手のひらにあったのは、いかつい男の顔。魔法書に書いてあった通りの容姿だ。

「はい。私はハルミと申します。この度は、あなた様に力をお借りしたく召喚した次第でございます」

「なるほど……ハルミか。不健康そうな体をしているな」

「はっ！ まことに申し訳ありません！」

なんだこの悪魔。文句は言えないし事実なのだが、失礼なことを言うな。

「しかもなんだこの髪の毛は。このままだとお前の毛は10年もしないうちに抜け始めるぞ」

ハゲ宣告やめろ！ 当たって欲しくないけど今から占い教えてもらう身としてはこの事実が辛すぎる！

「まあいい。お前は我に望みがあるそうだが、それは何だ？」

「はい！ 私に、占いを教えていただきたいのです」

「なるほど……占いか。珍しいな」

エークエルは腕（顔？）を傾け、親指以外の指を軽く丸める。恐らく、考え事するときに顎に当てる手の形だろう。そのポーズ、意味あるのか？

「いいだろう。それではまず、お前にこれをやろう」

エークエルはそう言うと、腕（顔？）をパチンと鳴らした。すると、俺の目の前に何かふにやっとした物が落ちた。俺はそれを確認する。

「……手袋？」

間接くらいまで覆えそうな、少し長い手袋だった。

「そつだ。私の力を借りて占いをするならば、その手袋をはめて行え」

「はい！」

俺は手袋を拾う。……ん？

なんか、この手袋妙な触り心地だ。

「どうした？ ……その手袋が気になるのか？」

俺は頷く。

「無理はないな。なぜならその手袋は人皮でできているからな」

「ギイツー！！？？」

俺は、ネズミの断末魔のような悲鳴を漏らした。
じじ、じじじじじ、人皮！？

「恐れる必要はないぞ。魔界の工房で腕の立つ者が作った品だ。血もついておらぬし毛も全て抜き毛穴を塞いである」

そ、そういう問題じゃねえよ！

やっぱこいつとんでもなくヤバい奴だ！

サキア、とんだクレイジークソ悪魔を紹介してくれたな！

「それから占いに必要なのは、占いたい人間の情報を書いた紙だ。名前と、生まれた年月日と星、あとは最近気になることや心残りな

こと、これらは最低限必要だ」

勝手に説明を進めるエークエル。

そんなことより俺は今手の中にあるおぞましいモノが気になって仕方がない。

「あとは肉体の一部だな。なるべく髪の毛……なければ他の毛でもいい。それを紙に貼り付け、ロウソクの火で燃やしその煙を吸えば占いの結果が出る。分かったな？」

「はっ……！ はいっ！」

「よし、では我は返るとするか。また呼びたくなったらいつでも呼べ。私の腕は2000本あるからな！ フハハハハハハ！！！」

エークエルは高笑いと共にしゅるしゅると魔方陣へと戻っていった。

「……やるしかないのかよ」

「い、ご主人様……？」

サキアが心配したように話しかけてくる。

こいつを叱りたい気持ちもあったが、そんなことしても何も解決しないのでぐっつと我慢した。

「だ、大丈夫だ。さあ、明日からは忙しくなるぞ。早く寝て明日に備える！」

「はいっ！」

……やるしかないのか。

俺は、この世界が俺の常識を超えた遙かに超えているのだと感じ始めていた。

第8話 フォーチュンアミュレット

翌日。

俺達はちよつと早めに起き朝食を取り、占いのための準備をすることにした。

「まずは……自分を占ってみるとするか」

「はいっ!」

よく占い師は自分を占えないというのが、実際のところはどのなのだろうか。

「ええと、名前と……生年月日……あれ？」

今は何年の何月何日だ？ そもそも俺のいた世界と暦が違ったりするのであるのでは？

と、とりあえず今から逆算したものにしよう。

「なあサキア、今日は何年何月何日だったけ？」

「そうですね……人史76523年5月9日です」

「な、ななまん……」

この世界は暦の種類が多いようでよく分からんな。

とりあえず、サキアに言われた今日の日付から逆算したものを俺の生年月日とし、星座は元の世界のものを書いておいた。

「次は近況かあ……」

近況つつつても俺がここに来たのは昨日のことで、それ以前となると引きこもって自堕落な生活を送っていただけだ。

「ええと……この先生活が上手くいくか不安……つと」

これくらいしか書くことがない。

「ご主人様、安心してください！ 私がついている限りご主人様の生活を安定した物になります！」

あ、ありがとう。でもそれはそれで俺は不安だぞ。

「そして髪の毛を貼り付けねばいいんだな」

髪の毛を一本抜く。

ああ、また一歩ハゲへ近づくわけか。

俺は糊を持っていなかったので、ダンボールからガムテープを少し剥ぎ取りそれで髪の毛を貼り付けた。

「よし、これで完成だ」

目の前の机にロウソクを立てる。今までパソコンを置いていたものだがもう使えないと思ったので、パソコンはクローゼットの奥にしまっておいた。

サキアがロウソクの芯を指先でつつくと、そこに火が灯った。早く俺も火をつける魔法を覚えないとな。

「ようし……」

俺は意を決して、人皮でできた手袋をはめる。中は布で覆われていたため、気持ち悪さは幾分か和らいた。

自分で書いた紙をつまみ、ロウソクの火へと近づける。

紙はチリチリと燃え始め、燃え移った徐々に上へと進み始める。

不思議と熱さは感じなかった。手袋に特殊な加工を施してあるのだろう。

やがて火は指先まで届き、紙を焼き尽くしそこで消えた。

俺は、うつすらと見える煙を鼻で軽く吸い込んだ。すると、

「っ……！ み、見えた……！」

「上手くいきましたか、ご主人様！」

「ああ……」

俺の頭に、占いの結果が現れる。

隠し事を教える者と教えない者を区別して行動せよ

「隠し事を教える者と教えない者を区別して行動せよ……だそうだ」

当たっているような気はするが、実に曖昧で、そこは占いらしい。

「隠し事……ですか？ ご主人様、何か私に言い辛いことがあるのですか？」

「……ま、まあそうだな。今は言えん。お前が『教える者』として相応しいと俺が思ったら、そのときに教えることにする」

サキアが知っているのは、この世界についてよく知らない俺が突如としてこの部屋に現れ生活に困っているということだけである。

本当のことは信じてもらえるかも分からないし無闇に言っていることでもない。使い魔のサキアになら言っていないかもしれないが、俺はまだ1日程度しか生活を共にしていない者に心のうちを話す気にはなれなかった。

「はい！　いつかご主人様に認めていただけよう、私頑張ります！」

こうして見るとサキアは真面目で良い子だとは思う。生贄なんかにならないければ普通に嫁に行つて幸せな家庭を築けたんじゃないだろうか。

「さて、次はサキア。お前を占う」

「えっ！？　私ですか？」

サキアは驚いたように言う。

「そうだ。俺だけでは占いが成功したか分からんからな。ほら、書け」

俺はサキアに紙とペンを渡す。

「はい、分かりました」

彼女は座り、机の上で紙に必要なことを書き始める。

『ご主人様の使い魔として、お互いの全てを共有したい』

怖い！ やっぱりコイツ素質がある！

「さ、サキア……」

「きゃっ!? ご、ご主人様!? 見ないでください!」

「おめーも俺の見ただろっ」

「あっ……すっ、すみません! でもこれは見なかったことに……」

サキアが紙を隠そうとする。

「それを渡せ!」

俺は強く命令した。

「い、嫌ですっ! 恥ずかしいですっ……あっダメっ……!」

サキアは命令に逆らえないのか、嫌がりつつ俺に紙を差し出す。

「きちんと書けているな。よし、髪をよこせ」

「う、うっ……」

サキアは髪を一本抜き取り俺に渡す。

俺はその万能調味料を髪に貼り付けた。

「よし、じゃあおっぞ」

「やめてください……許してください……」

めそめそと許しを請うサキア。まったくオーバーリアクションな奴だ。

俺は無視してロウソクの火で紙を燃やした。

「だめです……だめですう……」

結果が出たようだ。

忠誠と親愛は分けて行動せよ。菜の花に幸運の予兆あり

「……だとさ」

これでサキアの言動がマシになってくれればいいが……。あと親愛とは何だ。

「……はい、分かりました！ 私、ご主人様の理想のメイドになるために、この占いを心に留めて努力いたします！」

うーん、これ改善されるのか？

「さて、占いはまあ問題ないだろう。後は商売道具を揃えないとな」

「そうですね。紙とペンとインクと……あとはロウソクと糊ですね」

「だな。あとは依頼者の話を聞く部屋だが……。サキア、それはお前に頼んでいいか？ 俺はこの部屋ですることもあるし」

サキアが依頼者から話を聞き紙に必要な事項を記入してもらい、俺がそこから占うという形をとろうと思っっている。

俺は部屋からあまり出たくない。面倒くさいのもあるが、人に顔を見られてあとで面倒ごとに巻き込まれるのも避けたいのだ。

ついでにこの形式ならば、俺が手が離せないときは紙だけ書いてもらい、後日来てもらってあらかじめ占っておいた内容を伝えるということも可能だ。

「はい、分かりました！」

「あ、そういえば他にも必要なものがあるんだっけか。そうそう、お守りだ」

実は、エークエルは俺の部屋に彼の占いについて詳細に書かれた紙を置いていったのだ。

そこには、エークエルの魔力のこもったお守りの作り方が書かれていた。

つまり、依頼者が望むならこのお守りを売ることができるという寸法だ。

その内容はこうだった。

肉体のアミュレット

エークエルの魔力の恩恵を受けたアクセサリ。

所持者は自身の肉体の異変にいち早く気づくことができる。このアクセサリを持ち強く願えば魔力と引き換えに自身の肉体を癒すことができる。

また、死後魂の行くあてがない場合、一時的にエークエルの館に滞在することができる。

・作り方

動物の皮を丸く切り、表に下に書かれた紋章を彫る。牛の毛で編

んだ紐を両端につなげ首飾りの形にする。

エークエルの魔方陣を書きその上に完成した首飾りを置き、下の呪文を念じると完成する。

紋章の裏側に名前を彫るとアクセサリーはその名前の者を所有者として認める。

「牛の皮に牛の毛で編んだ紐……か。これ、手に入るのか？」

「おそらく町の雑貨屋に行けば置いてあると思いますよ？」

結構なんでも売ってるんだな、この世界は。

「じゃあ、お前は買い物に行つてこい。そら、金だ」

俺は金貨の入った袋を渡した。実は全財産である。

結構な出費になりそうだが、これも初期投資だ。仕方ない。

「はい！ 分かりました！ それでは行ってきます！」

サキアは一礼すると、部屋から出て行った。

さて、俺は魔法のべんきよ……、

「……寝るか」

異世界に来て、性根は変わらないのであった。

「ただいま帰りましたっ！」

玄関のほうから聞こえた、サキアの声で俺は起きた。
どうやら買い物物を済ませて帰ってきたようだ。階段を駆け上がる音がする。

「入ってよろしいでしょうか？」

「ああ、いいぞ」

扉が開き、サキアが現れる。沢山の荷物が入っているだろうと思われる麻袋と、金貨の入った袋を持ち、そして、

「なんだ、それは」

「菜の花です！ 町外れの花畑に生えていたので持ってきました！」

菜の花だった。そういえば占いでサキアのラッキーアイテムになっていたな。

てかそんなもの持ってきて大丈夫なのか？ 人の敷地のものじゃないよな？

「掃除をしていたら綺麗な花瓶があったので、それに入れておきますね」

「あ、ああ……」

しかも摘んできたわけではない。根っこがある。こいつ引っっこ抜いてきたな。

さらに、根っこの土は綺麗に取り払われていた。

「じゃあ、お守りの材料はここに置いていけ。お前は客間の準備と

昼飯を頼む」

「了解いたしました！」

サキアは袋からさらに小さな袋を二つ取り出し床に置き、部屋から出て行った。

俺はその袋を開けると、頼んだ皮と紐が入っていた。

早速俺はお守り作りに取り掛かるのであった。

「ご主人様、お昼ができました。入ってよろしいですか？」

作業に夢中になっていたところに、サキアの声が聞こえた。

「いいぞ」

「はい！」

サキアが昼飯を持ってきた。

「ご主人様、どうですか？ できましたか？」

サキアはテーブルに昼飯を置きながら床に座る。

「ああ、今は4つほどできたが、これは中々難しいな。最後の魔方阵で魔法をかける工程以外は今後お前に任せたいが、大丈夫か？」

「はい！ 喜んでさせていただきます！」

良かった。また一つ俺の仕事が減った。

「あ、そうだサキア。いま出来てあるのはほとんど魔法を使っていないものなんだが、一つだけ完成しているものがあるんだ」

「……？　それが、どうしたのですかご主人様」

サキアは首をかしげる。

「これ、お前にやろうと思うんだ」

俺は、完成したお守りを差し出した。

「……えっ！？　えええっ！？」

サキアは驚く。

「ほら、お前の名前もきちんと彫っておいたぞ」

お守りの裏側を見せる。そこには、「サキア・アーストランド」と彼女の名前が彫ってあった。

「いえっ！　そ、そんな、恐れ多いです！　この私なんかに勿体無いっ！」

彼女はばたばたと手を振る。

「駄目だ。折角作ったんだから貰ってくれないと俺が困る。さあ」

「……は、はいっ！　ありがとうございますっ……！」

サキアは震える手でお守りを持った。

「これが、ご主人様の……、ありがとうございます……」

「使い魔のお前にはあまり意味のないお守りかもしれんが、大事にしてくれ」

「はい！ 分かりました！」

「喜んでくれて俺も嬉しいよ」

これからお世話になるんだ。変な奴だが、少しずつ距離を縮めることにしよう。

「あ、あの……実は、申し上げにくいのですが、私もなのですが……」

サキアがぼそりと言った。

「ん？ 何だ？」

「実は、私も先ほどご主人様のためにお守りを作ったのです」

と、彼女はおずおずと手を差し出した。なんと。考えることは一緒なんだな。

彼女の手の中には、乳白色の美しい首飾りがあった。

「使い魔の私が作ったものなので、効果は期待できないかもしれませんが、私からの『親愛』の気持ちということで、受け取っていた

「だけるとありがたいです……」

「……そうか。ありがとう。嬉しいよ」

「いいじゃないか。こういうのは嫌いじゃないぞ。」

「俺は彼女の、ひんやりとした手のひらから首飾りを受け取る。」

「ありがとうございますっ……!!」

「うるうると目に涙を貯めながら喜ぶサキア。本当に大げさなやつだ。」

「いやしかし、異世界で魔法生活も悪くないじゃないか。かわいいメイドと共に支えあい生きていく、今までアニメやゲームの中で見ていたことが、今現実になっているんだ。」

「ははは、泣くなよ、全く」

「と、俺は首飾りを撫でる。」

「ふと、その紐を見て気になった。」

「……なあ、サキア」

「……はっ!? な、なんでしょうか!？」

「気になった、というよりも悪い予感がしたのだ。」

「この紐、黒いんだがこれってもしかして」

「はい! 私の髪です!」

第9話 占いと名前

朝。今日はついに俺の始めての仕事の日だ。

そうすぐに依頼がくるとは思えないが、もしものために今日くらいは真面目に人を待つことにしよう。

「ご主人様、入ってよろしいですか？」

「いいぞ」

いつもの断りと共に朝食の片付けを終えたサキアが入ってきた。

「さて、これから遂に仕事が始まるぞ」

「……そうですね」

「まずはこの町の人間に俺達の存在を知ってもらう必要がある」

「そうですね」

「ということでサキア。お前には昼ごろまでご近所さんを回って挨拶してこい」

「挨拶……ですか？」

「そうだ。俺達は急にこの空き家に引っ越してきたわけだからな。魔術師とそのメイドがこの家に住むことになって占いをしていると
いう旨を伝えればいい」

実はこの家、4日ほど前に俺が所有していることになっていたらしい。悪魔の置いていった説明書に書いてあった。その辺も準備万端というわけだ。

「分かりました！」

「その為に俺の挨拶状も書いておいた。主人は外へ出られないからとでも言っただけ」

昨日の間に書いた10枚ほどの挨拶状の束をサキアに渡す。
このあたりをきちんとしておけばある程度の信頼は得られるだろう。

「あつ、それならば……！」

サキアが何かを思いついたように言う。

「どうした？」

「ご主人様、少しお待ちいただいてもよろしいでしょうか？」

「ああ、いいけど」

「では、失礼します！」

サキアは一礼すると部屋を飛び出した。

数分後。

「ただいま戻りました！」

戻ってきたサキアが持っていたのは、小さなカゴだった。

「なんだ、それは」

「実はですね、お客様がこられると言うことで、こんなものを作っていたのです！」

じゃん、と笑顔でサキアが見せてきたのは、

「クッキー……か？」

「はい！ これをご主人様のお手紙と共にお渡しすれば、きっと喜ばれると思います！」

なるほどな。挨拶状だけだと堅苦しい魔術師の主人のイメージを持たれて人が来ないかもしれん。

それならば気さくで可愛いメイドの印象も与えておきたい。

「いいぞ、良い思いつきだ」

「ありがとうございますっ！」

サキアは深々と礼をした。

……と、そこで俺はあることに気づいた。

「なあサキア。このクッキーにも髪の毛入ってんのか？」

「いえ！ 私が髪の毛を使うのはご主人様のお料理だけでござい
ます！」

それは、俺の世界ならば嫌がらせか歪んだ愛情だととらえられる
ぞ。

「ただいま帰りました！」

サキアが挨拶回りから帰ってきた。さて、あとは客を待つだけだ。
俺達はそれまでゆっくりと昼食を取ることにした。

「本当に来るかねえ」

「どうでしょうか。この家がそうだと分かればよいのですが……」

「え、もしかして家の前に何も置いていないのか？」

「……あつ！ すいません！」

仕方ない俺もそこは気づかなかった。

「いやいや。俺も悪かったよ。しかしそう考えると、俺は重要なも
のを決め忘れていたな」

「なんででしょうか？」

「この店……いや、店じゃないな。家？ ……の名前だ」

「……あ、確かにそうですね」

商売をするならば、人目で分かるような看板なんかが必要だ。だがそれを作るにはまず店の名前が必要だ。

「俺は魔法の研究の傍ら占いをやってるていでいきたいから、店というわけではないけど、やはり名前が必要だ。『魔術師ハルミの家』なんていうダサイ名前が定着する前に決めたい」

「『なんかの占い屋』といった感じでしようかね……」

「いや、いつかは占いに限らず色々な依頼を魔法でこなしていきたいからそうなった時にでも使える名前がいいな」

「そうですね、その方が私もよいと思います」

「なあサキア。こういう魔術師は自身の店や家を決める際どういう風に決めているのか分かるか？」

「私はあまりそういうことには詳しくないです………すみません」

申し訳無さそうに頭を下げる。

「気にしなくていいぞ。なら、お前が昔住んでいた村の魔術師のもいい」

「そうですね……私の村は小さかったので『何某の家』と呼ぶことが多かったのですが……、あ！『八本足の館』という名前の魔術師の家がありましたね」

「八本足？」

「はい。そこに住んでいらした魔術師の方は蜘蛛がお好きでして、大量の蜘蛛を飼っており家中が蜘蛛の巣で真っ白でした」

「へ、へえ……」

またヤバい奴が一人。サキアが変なのは村自体に問題がある説が浮上したぞ。

「やはり自分の家には好きなものや得意な魔法、己の信念にちなんだものを名前に入れる人が多いんじゃないでしょうか？」

「なるほどねえ……」

好きなもの……アニメとか？ 得意な魔法……は分からん。己の信念……外へ出たくない。

ダメだ。俺本当にダメ人間だ。

「な、なあ。サキア、お前は何か良い案はあるか？」

「わ、私ですか？ 本当によろしいのですか？」

「一応参考にしたйкаらな」

「そ、そうですねえ……。『親愛の魔術店』……」

「まだそれを言うか……」

そんなにあの占いが気になっているのか。

ん？

占い？

「そつだ！ 占いだ！」

「えっ！？ どうしたのですか、ご主人様？」

「占いだよ、占いで決めればいいんだ！」

「なるほど！ 流石ご主人様です！」

そつと決まれば実行あるのみだ。

早速俺はペンを取り、紙に必要な事項を記入し、最後に「家の名前が決められない」と書いた。そして、髪の毛を糊で貼り付ける。

「よし、やるぞ。火をつける」

「はい」

ロウソクに火がともされた。俺は手袋をはめ、紙を燃やす。そして、その煙を吸い込んだ。

……！

「出た！」

「……じくじく」

「……だそうだ」

「素晴らしい名前ですね！」

「……なわけあるかつ！」

なんだこの名前！

「なにが『血肉』だ！　こんな誰も近寄らねえよ！」

「いえいえ！　私は魔術師の家としては最高の名前だと思いますよ！」

「雰囲気はいかにもだが、俺は金が欲しいんだよっ！」

「でも占いで出たということはこれが最適なのではないでしょうか？」

「うう……でも、こんな占いつ……ん？　待てよ？　この占いを教えてたのは……」

肉塊の悪魔、エークエル。

「アイツの仕業かあああああっ！？」

「ご主人様っ！　占いの結果は神でもないと変えることができないと言われています！　エークエル様は関係無いと私は……！」

「……本当にそう思うか？」

「わ、私は……」

サキアは黙った。流石のコイツも擁護はできないかと、その時だった。

「フハハハハッ！ 我の話をしていただろう？ 我を疑っていただらうっ？」

「なッ！？」

「きゃっ！？」

どこからともなく、エークエルの声が出た。

「ど、どこにいやがる！」

「ここだッ！」

その時、ダンボールの山の一部分が崩れ、その中から土色の腕が飛び出してきた。

……が、大きさは俺の腕ほどしかなかった。

「ひいっ！？」

そばに座っていたサキアが飛びのいた。

「お前、なんでここにいる！」

俺は床を這う腕に言った。

「我は召喚されたときは必ずその場に肉体の一部を残すようにしているのだ。我を召喚した者がその後どうなったかを確認するためにな。そして今、我に濡れ衣を着せる声が聞こえたからここに残しておいた腕の毛を媒体に今顕現したというわけだ」

「そんなこと聞いてねえぞ」

「言っていないな。言っていないがしないとも言っていないがな」

「こ、コイツ……」

盗聴とは許せん。

「悪魔が善意のみで動くわけなからう。お互い利用されることを前提とするのが悪魔召喚だ」

今すぐ捻り潰したいが、そうはいかない。

「で、お前は自分が無実だと言いたいようだな」

「そつだ。先ほどお前が占った結果は、正しい。我に介入する余地は無い」

「本当にそつなのか？」

「本当だ。そもそも、お前はこの家の名前を占ったと思っているな？」

「……………ああ」

何かあるのか？

「どうやら、その占いの結果は家の名前だけではなく、家の未来を表しているようだ」

「何だって……………？」

この家の未来が、血肉の館……………？

「我もこの結果が少し気になっている。だからお前達の前に姿を現してまで説明しているのだ」

「つまり、どういうことだ？」

「この家は、将来血肉に染まるのだ。占いは、それを加味した上で家の名前を『エルク・ニル・ワイズ血肉の館』とした。ハルミよ、気をつけたほうがいいぞ」

「俺にどうしろってんだよ……………」

急にそんなこと言われてもわけが分からん。

「ただ、そこまで心配することはない。明確な結果が出ないということは、この未来はまだ起こるのは先であろう。また、回避できる可能性もある」

「ようはただ不安にさせるだけの占いじゃねえか」

「占いとはそんなものだ。当たるも八卦、当たらぬも八卦。心がけて行動すれば……そうだな、そのメイドが牛を裁くのに失敗し部屋中血肉まみれになる程度で済むかもしれんな」

「わ、私ですかっ!？」

急に自分の話になり、サキアは慌てる。

「我が言いたいのは、占いの結果に我は関与していないということ、そして占いの結果に気をつけて行動しろ、だ」

「全く……引つ掻き回すだけしておいてあとは『せいぜい頑張れ』かよ」

「お前も占いをするのだろうか？　これが占いだ、心しておけ」

「はいはい、じゃあ帰ってくれ」

「そうだな、我はこれで……おっと、家の名前については間違いない占いを信用していいぞ」

嫌だけど、この気味悪い名前にするしかないのか……。

「我が与えた術は上手くいっているようで安心だ。この部屋に残した私の肉体も持って帰るとしよう。もう勝手に出ることはないから安心して占いに励むといい」

そう言つと、エークエルの腕は光に包まれ消えた。

「……行っちゃったか」

「びつくりしましたね……」

もう出ないと言っていたが、信用はしない。

もしかして占いの結果は、あいつが今後もホイホイ出てきて、それが人に見られるとかそういうオチもありうるぞ。

「と、とりあえず不本意ではあるが家の名前は決まった！ サキア、後でもいいから家の前に飾るものの準備をしておけ」

でかい看板なんかも欲しいが……それは金が貯まってからだ。

「はい！ 分かりました！」

「よし、じゃあ客を待つとするか」

俺は肩の力を抜いて息をついた。

「あの、ご主人様……。これを……」

「ん？」

サキアが何か差し出した。

「実はご主人様にも、と思って作っておいたのです」

それは、朝サキアが見せたクッキーだった。

「おお……ありがとう！」

ハート型のクッキーばかりなのが気になるが嬉しい。

「じゃあ早速食べてもいいか？」

「はい！ どうぞ召し上がってください！」

俺はそれを一つつまみ口に放り込んだ。

サクサクとした食感と極上の甘みが口に広がる。

やっぱりコイツ、いいメイドだよ。

「ウマイ……！ 今までこんな食べたことねえな」

「ありがとうございます！ ご主人様のものには私の『親愛』を入れておいたので、味も格段に違うと思います！」

……やっぱりコイツ、ダメメイドだよ。

『親愛』と髪の毛は切り離してくれ……。

第10話 マジックアイテム

翌日。

昨日は家の名前の件もあって、結局客は一人もこなかった。しかし今日は違う。サキアはそれなりに宣伝を頑張ってくれたし、家の前には『『血肉の館』占いやっています』と書かれたボードが置かれている。

さあ、今日こそは金を稼ぐぞ！

と意気込んでから数十分。3分置きくらいに外が気になり窓の外を覗いてしまう。

いけない、俺は何をしているんだ……。

「そつだ、こんな暇な時間こそ魔法書を読むべきだ」

占い以外にも、金を儲けられるような手段を手に入れなければ。

「そつだなあ……占い以外に、魔術師に頼むような依頼かあ」

そもそも占い自体が割となんでもアリな魔法だ。ただの相談事ならこれで解決する。

別に悩み事だけじゃなく、探し物や浮気調査なんかもカバーできてしまうのだ。

しかし、言葉でのアドバイスで済む依頼が占いで解決できるとなると残るはアウトドアな依頼、うーむ、悩ましい。

俺はちまちまと作っていたアクセサリを眺めた。

「そつだ、商品を増やすか」

このアクセサリーは健康祈願的な効能がメインだが、もちろんそれだけではカバーできないだろう。

アクセサリーだけではなく、色んな魔法道具を作成して売ればいいんじゃないだろうか。

魔除けのお札とか、ネズミ退治の笛とか、需要あるんじゃないだろうか。

俺は早速魔法書を開き……、ん？

「こういうのってどういう魔法なんだろうか」

魔法道具の作成、とかか？

しかし魔法道具つつつても多岐に渡るだろうしなあ。とりあえず目次を見てそれっぽいを見つけよう。

俺は魔法書の目次にざっと目を通し始めた。

「おつ、あるじゃないか」

「世界魔法大全」の7巻に「魔法アイテム」という項目があった。

魔法アイテム

魔法の力を受けた道具の総称。

魔法アイテムは作成方法の違いにより、魔道具と魔術品の2つに分類される。

魔道具は魔法を使用するために作られた道具を指し、魔術品は魔法の力を付与されたものを指す。

魔力の付与の中には神の力を付与された「祝福品」、魔界の力を付与された「呪縛品」などの付与も存在するが、これらは魔術品に

含まれない。詳しくは本書3巻の「魔力付与」の項目を読まれたし。

こんな具合の説明が書かれていた。

ここになら何かしらのヒントが書かれていそうだ。

俺はさらに読み進める。

魔道具

魔法を使用するために作られた道具。魔法適正の低い者でも魔法を使用することができるとは道具である。

使用すると道具に込められた魔力を消費するため、使用回数が限られている。

魔術品の為の媒体には主に杖や紙が使われる。

作成のためには、付与したい効果を持つ魔法が使える必要がある。使用に大量の魔力媒体を必要とする魔法を付与する場合には、魔力媒体適正の高い素材を使用しなければ付与しても使用ができない。また、付与すること自体ができない魔法も存在する。

まず、右の魔方阵の上に付与したい魔法の魔方阵を置く。

・スクロール

紙でできた魔術品。作成に必要なコストが低く、大量に生産でき持ち運びも容易なため使用率も高い。

紙は魔力媒体としての適正は低いため、ほとんどの場合1度しか使用できず、強力な魔法の付与もできない。

大きな紙を使用したり複数の紙を使用すればそれらの問題を解決することもできる。この内複数の紙を使用し書物の形をしたものをマジックブックとも呼ぶ。

・ロッド

棒状の魔術品。木製か金属製のものが一般的であり、魔法によって使い分けられる。

魔力媒体としての適正が高い素材をそのまま使用でき、装飾として足りない魔力媒体を追加できる点が魅力。スクロールよりも使用できる回数が多く魔法の幅も広い。

旅人や商人など、長距離を移動する者が所持していることが多い。

まだまだ沢山書かれていたが、とりあえずはここでやめておいた。今すぐできるようなものではなさそうだ。また、使える魔法が増えてからだな。

次は少し飛ばして魔術品の項目を見る。

魔術品

魔力を付与された道具。使用して魔法の効果を得る魔道具に対し、魔術品は常に効果を発している。アミュレットや魔除け道具のような所持しているだけで効果を発揮するもの、魔法の補助を得た武器などがこれに当てはまる。

付与させたい魔法の描かれた魔方陣の上に付与対象となる道具を乗せ、右の呪文を念じると作成することができる。

一つの魔術品に複数の付与を与えることもできるが、付与できる数は対象の魔力媒体適正に応じて変わる。また、作成者の魔法適正と対象の魔力媒体適正に応じて付与された効果の強さや付与の成功率も変わる。

本書は付与できる魔法全てを掲載していない。魔術品の作成は、ロード・イグナス著『魔術品・魔法付与・エンチャント』が詳しい。本項では魔法による付与のみを掲載している。魔法以外での魔力付与については前述の通り書3巻の「魔力付与」の項目に記載。

・幸運

この付与がされた魔術品を持つものに幸運を与える。幸運と言っても、所持者に直接危害を加える不幸を一定の確率で回避することができる程度のものがほとんどであり、過信はできない。

神の力による魔力付与の一つ「祝福」が似た効果を持つ。

・耐毒

この付与がされた魔術品を持つものが毒におかされた際、それを軽減あるいは完治させる。

病気を防ぐことはできず、それを防ぐ付与に「耐疫」が存在する。

俺は一旦ここで読むのを止めた。

どうやら魔術品の作成が今俺にもできるものと思われる。

ゲームでよくあるような概念なので、すんなりと理解できた。

今のところはエークエル直伝のお守りしかないが、占いの内容に合わせたお守りを作ってもいいなと思った。

「幸運」「退魔」「安眠」……このあたりは便利そうだな。

「ご主人様、依頼です！」

と、ドアの向こうからサキアの声がした。

「お！ ついに来たか！ 入れ」

サキアが部屋に入ってくる。彼女は占いのための紙をきちんと持っていた。

「いつの間に来てたんだ、気付かなかったぞ」

「そうですね、今から40分ほど前ですね。先ほど帰られました。明日また来たときに結果を聞く、とのことですよ」

「40分！？ そんなに長居してたのか」

「はい。実はこの近くに住んでいる奥様でして、昨日私が渡したクッキーを気に入ってくださいましたようです。お喋りが好きな方のように、つい話し込んでしまいました」

「ご近所回り効果が早速。」

「そうか、じゃあそれ渡してくれ」

「はい！」

サキアは俺に紙を渡した。

さて、初仕事だ。ええと、内容は……、

『結婚指輪が見つからない』

探し物の依頼かあ。よし、やってやろうじゃないか。

小さきものにより隠されし小さき光は、屋根裏に輝けり

これが結果だった。

「小さき光は屋根裏に……ということは屋根裏にあるんだろうなあ。しかし……」

「小さきものにより隠されし……ですか」

「そうだな。これは無くしたのではなくて、何者かが意図的に隠し

たつてことか」

小さき者、ということとは夫の浮気相手とか、そういうドロドロした話ではなさそうだ。

「その奥さんってのは、子供はいるのか？」

「はい。17になる娘と、5歳の息子がいるそうです」

「となると、怪しいのは息子……か」

「ですが、息子さんが指輪を隠す理由は……？」

「そこなんだよなあ。子供だから、案外綺麗だからって理由で屋根裏にもある宝物部屋にでも置いてあったりとかな」

「それはありえますね……どう伝えますか？」

「屋根裏にある、とだけ言えばいい。子供のすることなら、別に注意する必要はないしな」

「はい、分かりました！」

これで、俺の初仕事は終わった。

ちなみに、今日来た客はこのご近所の奥さん一人だった。

「ご主人様、奥様がお礼としてシチューを分けてくださいましたよ！今日の夕ご飯が一品増えますよ、ご主人様！」

サキアが鍋を持って部屋に入ってきた。
どうやらこの前の占いが当たったようだ。

「そうか、それはよかったな」

「それですねご主人様、占いにあった『小さきもの』も分かりました!」

「なんだ、息子さんじゃなかったのか？」

「それがですね、屋根裏を調べたところ、ネズミが巣を作っていたそうです。そして、その巣の中に指輪があったそうですよ」

「ね、ネズミだったかあ……」

まだまだ、占いの腕を上げる必要がありそうだ……。

第11話 異世界で引きこもりが生きるには

あれから数週間。

俺は占いの他にも、魔法アイテムを作成するようになった。これを町で出荷することで結構なお金になることを知ったのだ。今のところは占いよりもこつちがメインの収入になっている。

「24まいい、25まいい、26まいい……」

俺は、スクロールを作る作業をしていた。

魔方陣の記入はサキアに任せているが、魔法でスクロールにするのは俺がやらなければならない。面倒な作業ではあるが、これを続けたおかげでお金は順調に貯まっている。

俺もサキアも食費以外に金を使わないので貯まる一方なのだ。

「ご主人様、そろそろ休憩してはどうですか？」

ドアを開けてサキアが入ってきた。紅茶とお菓子を持っている。

「……そうだな。もう3時か」

ちょっと働きすぎたかな。

「しかし本当に魔法アイテムは売れるな」

俺はクッキーを頬張りながら言った。

「今までこの町から城下町へ届けられる魔法アイテムは、遠い地方から輸送されてきたものが多かったのですが、うちの魔法アイテムはこの町で生産する分安くなっているのです」

「なるほどな」

この世界にもそうやって稼ぐ業者はいるわけだ。

「でも、大丈夫ですかご主人様」

サキアが、心配そうな目で俺を見る。

「ん、なんだ？」

「ご主人様、働きすぎではないですか？」

「働きすぎ？ でも働かなければ食っていけないしなあ」

「でも十分にお金は貯まっています。もうちょっと生産量を落としても生活には困りません」

「いや、もしものことがあると困るから……」

そうだ、もしもに備え今のうちに働いておかなければ……。

「ご、ご主人様っ！ しっかりしてください！」

「えっ!？」

サキアが急に、声を荒げた。

「最近ご主人様はおかしいです！働かなきゃ、働かなきゃって…
…!」

「そのの、何が悪いんだ…?」

そうだ、別に悪いことではないだろう。

「悪い…とかではないんです！今のご主人様は、ご主人様らしくありませんっ！」

「俺らしくない？」

「そうです！私がここへ来た頃のご主人様は、こんなに勤労意欲に満ち溢れた人ではありませんでした！」

「おい、ちよつとそれは酷くないか」

「私にとってはむしろそちらの方がよかったです！今のご主人様は、働いてお金を稼ぐことばかりに躍起になって、全然楽しそうじゃありません！」

「なっ…!？」

楽しそうじゃ、ない？ そんな風に見えてたのか？

「ご主人様にはもつと自分のしたいことをやってほしいんです！」

だんだん、サキアの口調は強くなっていく。

「何を言う、俺は好きでこの仕事をしているんだ」

俺も、ちよつと嫌な気になる。

「本当ですか！？ ご主人様は、この仕事をするために、この……、私に事情は分かりませんが……この部屋に来たんですかっ！？」

「この部屋……？」

「そうですよっ！ 私が最初に会ったご主人様は、『なるべく楽しんで働きたい』と言うような人でした。少なくとも進んで働くような人ではありません！」

「でもな、人は変わるもんだしよ……」

「じゃあこの部屋から出たらいいじゃないですか！」

「！」

その言葉が、何故か俺の心に強く響いた。

「なんで部屋から出ないんですか……？ 出たら、もっとお金を稼げますよ？」

サキアの声は、震えていた。

「べ、別に外に出て働く必要ねえし……」

「そういうことじゃありませんっ！ ご主人様？ご主人様がお金を稼ぐのは、何のためですか？」

「そりゃ、生きていくためだな」

「じゃあ、生きて何をするんですか？」

「何をするって言われてもな……」

それはちよつと哲学的な話になるんじゃないかろうか。

「そもそも、何故ここに、この部屋にいるんですか……？」

「それは……」

変なことに巻き込まれて、無理矢理連れてこられたのだ。

「ご主人様は、外に出たくないのでしょうか？　なんで出たくないのですか？」

そりゃ、下手に人に見つかりたくないからだ。

「外に出てやりたいことが、無いからなのではないですか……？」

次に俺の心を打ったのは、その言葉だった。

「……」

「この部屋の中で、やりたいことがあるのでしょうか？　でも、その

ためにはどうしてもお金が必要で、そのために仕方なく働いているんでしょっ?」

「……」

「それなら、もう少し休んでください。もう少し、心に余裕を持つて欲しいのです」

違うんだ、そうじゃないんだよ、サキア。

俺は確かに外の世界に自分の欲するものはないと考えている。

だけど、この部屋に閉じこもるのは目的があるわけじゃない。

何も、ないんだ。

俺は、何もしたいことがないからここに引きこもりになった。

「ご主人様……?」

サキアが、俺に声をかける。

「……サキア」

よし、こうなったら、言ってしまうおっ。

「……はい?」

「俺は、何もしたくないから閉じこもっている」

……言っちゃったよ。最低のクズだな、俺は。

「あるじゃないですか、したいこと」

「……え？」

「外に出ず、何もしたくない。これがご主人様の望みなんでしょう？」

「でも、そんなの生きている価値ないじゃないか」

事実ここへくる前は俺はそういう人間だったしな。

「ありますよ、生きている価値は」

「……どこにだよ。俺が死んでも、誰も困らないよ」

「困ります！ 私が！」

「……サキアが？」

「はい！ 使い魔にとってご主人様は自分の全てを投げ打ってでも支えなければならぬ存在です！ 私は、ご主人様の幸せが第一なのです！」

「お前、結局俺にどうなってほしいんだよ」

「ご主人様には、この部屋から絶対に出てほしくありません。この部屋の中で、のんびりと過ごしていただければ結構です。身の回りの世話はもちろん、本当ならばお金も私が稼ぎたいくらいです」

「ようは、俺にヒモになってほしいと？」

「私、ご主人様ことがなんとなく分かる気がします。ご主人様の一番の望みは、この部屋で特に大したこともせず、自堕落に日々を過ごしたいということだと思います」

「……お前、ご主人様に向かってよくそんなこと言えるな」

「当たってはいるけどさ。」

「申し訳ありません。でも、きつとご主人様は望んでいるはずですよ」

「まあ……そうだが」

「なら、全てを私に任せてしまってもいいのです。何も気を負う必要はありません。私は使い魔なので。私は、ご主人様のために働くことが幸せなのです」

「お前、とんでもないダメ女に見えるな」

「何とでも言うてください。私にご主人様を幸せにさせてください」

それは、立場的に俺がお前の両親に言うべき台詞だぞ。

「ご主人様は、一切外に出たり働いたりする必要はないのです。全てを私に委ねてください。ご主人様がいつか亡くなるまでも構いません。全てを、私に」

「ちよ、ちよっと待てー！」

怖い怖い怖い！ 『あなたは何もしなくていいから、全てを私に任せて、部屋から出ずに一生過ごしていればいい』 って完全にヤバい女の台詞だぞ！

そういえばコイツ「素質」のある奴だったー！

「何か嫌なことでもありますか？ ご主人様の望む世界を、私が守りたいのです」

「ちょーっと待った！ 本当に待った！ お前の言い分は分かった！ しかも、大分的を射た内容だ！」

俺は、慌てて制止した。

このままいくともっとヤバい発言をするかもしれん。

「……分かって、もらえたのですか？」

「……ああ。確かに、俺はこの部屋からは出たくない。本当ならここでぐうたら過ごしたい」

「ならば私に……」

「でもな、人に養って貰うのは、『良心』が傷つくんだよ」

元の世界の俺も、筋金入りの引きこもりではあったがこれは最後まで克服できなかった。

「良心……」

「そう。自分の中で、それなりに親しいと思う人間に頼り続けるのは俺の中で申し訳なさが降り積もる。これが中々に苦しくてな、そんな思いはしたくないんだよ」

「それならば、私をゴミクズ以下の使い魔だと思って……」

「無理だよ。もうお前とは、短い間とはいえ深い関係になってしまった。人間そう簡単に割り切れないよ」

「では私はどうすれば……」

「だから、お前も働きすぎる必要はないんだ。俺に、少しでも俺とお前の生活に貢献しているという思いをさせてくれればいい」

「ご主人様……」

「お前の言ってることは正しかったよ。ちょっと俺は働きすぎていた。今の貯金を崩しつつ、適当に魔法アイテム作って気まぐれに金を稼いでいればいいんだ」

その先のことは、後で考えればいい。

「俺は一人では生きていけない。だから、一緒に生きてほしいんだ」

「うん、うん……」

サキアの目には、涙が貯まっている。

「ご主人様っ！」

そして、俺に抱きついてきた。俺は、運動不足の腕で受け止めてやる。

「ありがとうございます……！ごぞいます……！」

「俺もだよ、ありがとう」

これからは、お互いをもっと知っていかなくちゃな。

……そういえば。

隠し事を教える者と教えない者を区別して行動せよ

そうだったな。もうサキアは「教える者」だ。言おう。

「なあ、サキア」

俺は、サキアを抱きとめたまま言う。

「……なんでしょうか、ご主人様」

「言うよ、俺のこと。なんでここに、俺がいるのかをな」

第12話 賢者の石

「……ご主人様は、別の世界から来ていたのですか……。驚きです」

俺は、サキアに全てを話した。俺が元の世界でどういう人間で、なぜここへ来たのかを。

「俺も驚きだよ。まさかこんな世界があるなんてな」

「実は異世界から来た人間、というのはまれに現れるのです。ですがほとんどの人はすぐに亡くなったり事情を隠しているのらしいです。私もご主人様以外では会ったことがありません」

「そうか、結構あることなんだな」

「はい。歴史に名を残すような勇者の中には異世界からやってきた者もいます。やはり異世界の人間は特別な力を持っているということでしょうが」

「うーん、そうかなあ……」

俺はどうなんだろうか。この魔法適正とやらはあの悪魔に貰ったものということでもいいのかな。

「あ、話がそれてしまいました。すいません。そして、ご主人様はこれからどうするのですか？」

「それなんだよなあ……。正直元の世界へ帰りたいとは思えん」

あの世界は、俺にとって苦痛すぎた。仮に悪魔からの報酬で苦勞の無い生活を送れたとしても、帰りたいとは思えなかった。

ここでの引きこもり生活が、ちよつと心惜しくなってきたかもしれない。

「ですが、ここで一生を終えると魂を奪われる……」

それはちよつと嫌だな……。

「というか魂奪われるとどうなるんだ？」

「ご主人様の世界ではどうなるか分かりませんが、こちらの世界では死後の世界の概念がありますね」

そういえばそういう記述はよく見た。

「神を信仰するものは、その神に救われ天界へ上げられます。そうでないものは、こちらの世界へとどまりながら行き場を探すのです」

「行き場？」

「はい。多くは、新たな命として転生することになります。ですが、転生できず彷徨う魂もいます。これらが幽霊や妖精へと変化するのです。そして、それらにもならない魂はやがて薄くなり、エーテルとしてこの世界を漂うことになります」

「なるほど、魂としてふらつくとその後の保障は無いから神を信仰する奴は多いんだな」

「そうですね。そして、最後に悪魔です。悪魔と契約したものは、死後は悪魔の所有物となります。下僕となったり食料となったり、基本良いことはありませんね」

うへえ、怖いなあ。

「じゃあ、もしかすると俺も死んだらそうなるってわけか」

「ご主人様の世界の悪魔がどうなのかは分かりませんが、少なくとも良いことはないでしょうね」

負けたときのペナルティになっているわけだな。

「このまま生きながらえて死ぬと魂を奪われる、かといって帰る気にはなれない……。一体どうすれば……」

と、俺が悩んでいると、サキアがぼんと手を叩いた。

「いえ、ありますよ。よい方法が！」

「え！？ 本当か！？」

「はい、簡単なことです！ 死ななければよいのです！」

「……は？」

それ、無理だろ。

「あのな、サキア、人というものはいつか死ぬものであってだな」

「ご主人様、この世界には『不死』という概念があります」

「……ふ、不死？」

「そうです。決して死なない、不死です。神はもちろん、妖精や悪魔といった超常的存在は死の概念を持っていません。私も、生贄となり魔界で悪魔の眷属になってからは不老不死の存在となりました」

「ふむふむ」

こいつ、年を取らないのは分かってたけど死ぬこともないのか。

「ではそうでないものは皆寿命がありいつか死ぬ……というわけではないのです。私のように、後天的に不死を手にする者もいます」

「なるほど」

「神の一員となったり、悪魔になったりなど、超常的存在への変化の他にももっと手近な方法で不死になることもできます。その中でも、ご主人様になればそれが可能なものがあります」

「それはなんだ？ 言ってみる」

「賢者の石、の作成です」

「賢者の石……」

いつか錬金術の本でも読んだし、そもそも俺のいた世界でもファンタジー作品ではお馴染みのアイテムだ。

「賢者の石はあらゆる元素を操る、錬金術における最高の魔力媒体とされています。そして、この性質を利用して作られる薬品、エリクサーは生き物に不老不死を与えるとされているのです」

「エリクサー……不老不死……」

「この賢者の石およびエリクサーの作成の難度は非常に高く、歴史的にも成功した人間は少ないです。しかし、ご主人様ほどの魔法適正をお持ちの方ならば可能性は十分にあると思います！」

「本当かよ……。俺、そんなに凄い人間じゃないぞ」

てか、こんな抜け穴をあの悪魔は放っておいたのか？

「ご主人様なら大丈夫です！ 実はご主人様は、それなりの悪魔に匹敵する魔力適正をお持ちのようなのです」

マジかよ……。

「ま、まあでもそれが一番の方法ならばやるしかねえな」

「もし成功すれば、不老不死になれるんです。つまり、今の課題だった食事の問題が解決されてこの部屋に引きこもるのには最適の状況が整います！」

「なるほど、それは最高だ！」

「それに……それにですね、私も、不老不死なわけで……」

サキアが、ちよつともじもじする。

「つまり、お前ともずつと暮らしていけるってわけだな」

「っ！ そ、そうです！ 私も、ずっとご主人様の使い魔として生きていけるのです！」

「そうなりゃ、やるしかねえな！」

実はここまで、帰ることも選択肢にはあつたが今それは消えた！
ここには、俺に精一杯尽くしてくれる女の子がいるじゃないか！

「はいっ！」

「……というわけで錬金術の本を引っ張り出してきたわけだが」

・賢者の石

あらゆる元素を自由に操ることが出来る人工魔力媒体。これを利用することで鉛を金に変えることができる、というのは有名は話である。

多くの錬金術師にとっての研究の最終目的となる。しかし、作成難度が非常に高く、歴史的に見てもこれに成功した者は少ない。

元素を自由に操るといふ性質を利用することで、生き物を不老不死にする薬「エリクサー」を作ることができる。

なお賢者の石の作成は禁術に関わるされているため、本書には記載しない。

作り方書いてねえじゃねえか！

「レシピだけでもいいから書いてくれよ！」

「いえご主人様、まだ方法はあります。一般に出回る書物に期待するだけ無駄です」

「方法って何だ？ 不老不死になる方法か？」

「賢者の石の作り方を知る方法です」

「うーむ、なんだろうか。あ、そうだ。」

「占いだ！」

「学んでいておいてよかった占い！」

「いえ、違います。それよりももっと簡単な方法です」

「がくつ！」

「な、なんだ？」

「悪魔に聞くのです」

「悪魔……なるほどね」

「そついや悪魔には色々な学問に精通しているやつがいるな。」

「悪魔の中でも、錬金術に詳しくて気性の大人しい方を知っています」

「なんだと、早速紹介しろ！」

・レゲリウス

序列340位の悪魔。

犬の足が生えたフクロウの姿をしており、帽子を被っている。

悪魔の中でも大人しい部類の悪魔であり、東の森の中の洞窟で錬金術の研究をしているという。

錬金術に精通しており、召喚者に錬金術の技術を教える。使い魔を望んだ場合は美しい女性の魔族を与える。

魔方陣の中央に水晶を置き、呪文を念じると召喚できる。

「なるほど……」

「召喚に水晶が必要ですが、雑貨屋に置いてあると思うので後で買ってます」

「こいつ、美女を使い魔にくれるのか……」

「な、なんてところを気にしてるんですかご主人様っ！ 今は賢者の石の作り方を知ることが第一です！ 使い魔なんてあとでもいいです、というかこの私が許しません！」

「あー、はいはい、分かった分かった」

流石に今する気はないし、今後もやらない。新しい女の使い魔なんぞ貰ったらその日の晩御飯に謎の肉料理が並びそうだな。

……ということで、サキアが水晶を買ってきて準備は整った。

俺は、ここへ来てから3回目の悪魔召喚を行った。もうすっかり慣れてしまった。

魔方陣が光り、そこから記述通り帽子を被り犬の足を生やしたフクロウが現れた。

「私は悪魔の錬金術師レゲリウス……。お前の望みは……。美女か？」

「ち、違いますっ!」

サキアが身を乗り出してきたので、腕で静止した。

「あつ、すいません。美女ではないのです」

「ほう……。ということは錬金術だな？　錬金術を教えて欲しいのだな!？」

雰囲気似合わずちょっと興奮気味なレゲリウス。登場してすぐ望みの内容を美女だと決め付けてきたあたり、美女狙いでこいつを召喚するやつが後を立たないんだろ……。難儀だな。

「はい。実は、賢者の石の作り方を教えて欲しいのです」

「賢者の石!　それは素晴らしい!」

レゲリウスは声を荒げる。

「錬金術師というもの、目指すべきは賢者の石だ。安心しろ、この

レゲリウス、かのシルギアス・メグリダレアスに賢者の石への道筋を示した悪魔である！」

胸を張って高らかに言う。

ああ、長年錬金術目的の召喚が無くて悔しい思いをしていたんだろつな……。 「召喚者を増やしたい……。 そんな目先の欲に眩み使い魔を美女にしてしまった……。 」とか思ってたんだろつな。

「……シルギ……。 なんだ？」

俺はレゲリウスの挙げた人物が分からず、ぼそつと呟いた。

「……最初に賢者の石の作成に成功したと言われる人物です」

「近年は錬金術の研究も遥かに進み、賢者の石も随分と作りやすくなった。人間はこれを禁術としているようだが、それは納得いかん！ 召喚者よ、この術をどんどんと広めるが良い！」

「あ、ありがとうございます……」

そんなつもりはないけどな。ごめんよ。

「で、何故賢者の石を？ おぬしは錬金術師ではなさそうだが。 金か？」

「いえ、エリクサーを……」

「エリクサー！？」

彼はまたでかい声を上げる。

「エリクサーだと！ 素晴らしい！ 賢者の石を欲しがる奴は決ま
って金、金、金……！ どいつもこいつも目先の欲に眩みすぎなの
だ！」

ああ……、さっきお前が目先の欲に眩んできるとか妄想してごめん
よ。

「賢者の石とは本来は錬金術の素材や魔法の魔力媒体を石ころ一つ
で補えるようになるという画期的発明だったはずなのだ……。それ
が今となってはこんなことに……。ちよつと錬金術を勉強すれば賢者
の石で金を作るくらいならば真面目に働いた方がマシだということ
に気付かんか！」

なぜか一人で怒り出すレゲリウス。あー、この人、最近の若者は
とか言っちゃう人だ。

「エリクサーは、賢者の石の特徴を最大限に活かした薬だ。そもそ
も錬金術の発端は薬学であって、エリクサーの作成は錬金術の根底
にあるものを錬金術最高の発明で導き出す、錬金術中で至高の好意
なのだ！」

楽しそうに話すなあ……。しかし話長いなあ……。

「よし、気に入ったぞ。お前には最高の錬金術の知識と、賢者の石
とエリクサーの作成方法を教えよう。私達錬金術師の夢を、世界へ
広めてくれ」

すると、レゲリウスから放たれた緑の光が俺の胸へ吸い込まれる
ように入ってしまった。今、錬金術の知識を手に入れたのだろう。

そして、目の前に二枚の紙束が落ちた。

「頼んだぞ！ 若き魔術師よ！」

レグリウスは、魔方陣の中へ帰っていった。

……なぜか錬金術師達の夢を託されてしまった。

「……ご主人様、どうですか。賢者の石」

「おっと、そうだな」

俺は、落ちた紙束の一方を見る。

「……なるほど、これは結構骨が折れそうだな。特に備品と素材の調達が」

何やらよく分からない名前名の鉱石が沢山ならんでいる。

「それならば、私が収集してきます！ 場合によっては遠出をしないといけないですが……」

「いいよいいよ。俺も錬金術の勉強しないとならんしな。お金も貯めないといけない。これからは忙しくなるぞ！」

「はい！ でも、働きすぎはダメですよ？」

「そうだな。でも、今俺はやりたいことがある。だから、ちょっとくらいの無理は許してくれ。お前は、そんなときに俺を支えてくれればいい」

俺は、サキアに向かって言った。

今の俺、ちょっとカッコいいかもな。少なくとも引きこもりしていたときよりは。

「はいつ!」

そして彼女は、満面の笑みを浮かべた。

……あれから1年の月日が経った。

俺は部屋にこもり、研究を続けている。

早く賢者の石を完成させなければならぬ。人間、いつ死ぬか分からないからな。

……一人は寂しいなあ、やっぱり。

こんな時にサキアがいたらなあ。

……やめよう、何度同じことをにとらわれているんだ俺は。

……ん?

音? 1階で、何かの音がした。

客……なわけないか。看板は出してない。

と、次は階段を上ってきた。それも、結構な速さで。

誰だ？ 俺は、息を殺し、扉の前に立つ。

その足音は、扉の前で止まる。

そして、扉を勢いよく開けて飛び込んだのは、

「ご主人様ーっ！！」

サキアだった。

「サキア！」

俺は、飛び込んできた彼女をそのまま抱きしめてやった。

「ただいま、帰りましたっ！」

「よくやったぞ！ 成果は？」

サキアは、扉の前に置かれた袋を指差す。

「はい！ きちんと全て調達してきました！」

そう、彼女はこの3ヶ月間家を離れ足りない賢者の石の素材を集めていたのだ。

「ずっとご主人様のことが心配で心配で……！ 大丈夫ですか？ 食料は足りましたか？ 泥棒が入ったりはしませんでしたか？」

「俺もずっと会いたかったよ。大丈夫、なんとかやっていけたよ」

「あつ！ 部屋がこんなに散らかって……！」

「ごめんごめん、外に出ないからゴミが貯まるばかりで」

「もう……これだからご主人様は私がいないとダメなんです」

「全くだな」

このあと数時間に渡りお互いの状況を話しつつ、俺達は久しぶりの再会に涙したのであった。

ま、話した内容のほとんどがサキアの旅路での出来事だったけどな。俺は引きこもっていたから何も言うことないし。

……ということで、サキアの持ち帰った魔力媒体で賢者の石を作る用意は整った。

俺は、魔方陣の上にレゲリウスからもらったレシピ通りに魔力媒体を置く。

「……これで、あとは呪文を念じれば完成だ」

「いよいよですね」

「ああ……」

俺は、深呼吸をすると、魔方陣に向かって強く念じる。

この1年の間に大分魔法への知識も増え、コツもつかんできた。

これなら、やれる。

魔方陣が怪しく光り、魔力媒体が動き出した。

それらはだんだんと光り始め、中央に置いた石へ吸い込まれるように動く。

全ての魔力媒体が一点に集まった。

すると、一段と強い光りが部屋に満ちた。

しばらくすると光りは止んだ。

そして、後に残された魔方陣にあったのは、七色の不思議な光りを持った鉱石のような石　賢者の石　だ。

「……成功、した」

「えっ……!!」

「成功したぞ！　賢者の石だ！」

「おめでと〜ございますっ！」

サキアが抱きついてくる。

「まてまて、本当に賢者の石か確かめないとな」

俺は彼女の方を抱きながら、そばにあった石ころを賢者の近くに置く。

「今からこの石に念を送り、金になれば成功だ」

俺は、石に向かって魔法を使用した。

すると、石にヒビが入った。

「これは……」

サキアが息を飲む。

ヒビはどんどん大きくなる。隙間からは、金色のものが見えた。

そして、まるで卵の殻のように薄い石の外側の部分がパリパリと崩れ落ち、中から金色に輝く物体が現れた。

俺は、それを持ち上げる。重い。

「金だ！ 賢者の石の力で、石が金になった！」

「ご主人様！ おめでとうございますっ！」

俺にしがみついていたサキアが、さらにぎゅっと抱きしめてくる。

「ああ、本当によかった。だけど、これで目的達成じゃない」

「次は、エリクサーですね」

そこからさらに数日後。

俺達の前には、ビーカーに入った緑の液体があった。

「これが、エリクサー……。成功ならば俺は不老不死になるはずだ」

「これで本当に最後ですね」

「そうだな」

俺は、ビーカーを手にする。

「いくぞ」

「はいっ！」

そして、ビーカーに入ったその液体をぐいっと飲み干した。

うまいかと聞かれると、おいしくはない。味わうものでない味だ。

エリクサーは、俺の喉を通り胃に収まった。

「……どうですか、ご主人様」

「うーむ、何か変わったような感じはしねえな。薬だし体に吸収されるまでちょっとかかるだろう」

「そうですか……。じゃあ、お昼にでもします?」

「……そうだな」

というところで、昼食だ。

今日の昼食はパンとスープとベーコンだ。貧相ではあるが部屋から出ない俺にとっては十分な食事だ。

「本当に成功したんですね」

「おいおい、不安になるようなことは言わないでくれよ」

「す、すみません……」

「いや、そんなに気にする必要は……ねえんだけど……んむ」

「……どうしたのですか？」

サキアは俺が変顔していることに気付いたようだ。

「いや……なんかベーコンの筋？ 的なのが歯に挟まって」

「それは大変ですね。フォークでも持ってきてきましょうか？」

「いや、別に気にするほどで痛えっ！？」

「ご主人様！？」

「し、舌噛んだ！」

舌でなんとか取ろうと思っていたところであんなに喋ってしまい、噛んだ。口に鉄の味が広がる。

「やべ、血も出た」

「ただだ、大丈夫ですか！？ ちょっと見せてください！」

サキアが駆け寄り、俺の口をのぞく。ほんと、過保護だなあ。

「……あれ？ ご主人様、どこも怪我してないですが」

「え？」

俺はさつきしつかりと痛みを感じたぞ。あれ？

「痛く……ない？」

「……え？」

「さつき噛んだところ、痛くねえ。血もなんか収まってる」

「……ご主人様！ それって！」

あ！

「エリクサーの効果！？」

不死身の力で、怪我を治したのか！？

「サキア、そのナイフ取ってくれ」

「……はい。気をつけてくださいね」

俺は、サキアからもらったナイフで、腕を軽く切る。

鋭い痛みがにじみ、真っ直ぐな切れ口から赤い血が垂れる。しかし、

「おい……!!」

「……!!」

しばらくすると、傷口がみるみると閉じていき、やがて塞がった。

「せ、成功だ!」

「ご主人様!」

俺達は抱き合った。

「やったぞ! 俺は不死身になった! なにもせずとも、生きていられる体を手に入れたんだ!」

「おめでとつございます!」

「ああ! サキア、お前ともずっと一緒だ!」

「はい! 一生、いえ、永遠にお供いたします!」

ああ、なんて幸せなんだろうか。

引きこもり、今まで自虐的に使ってきた言葉だが、今日からはこ

と言える。

「俺は、引きこもりになれて幸せだ！」

第一章・完

第13話 弟子にしてください！

俺は不老不死を手に入れた。

不老不死、ということと特に不自由無い生活を送っている。

毎日やることといえば、窓の外を眺めながらポケーっとなしたり、魔法書を読んだり、あと少しだけ働いたりする。

引きこもりとしては一切働かないのがベストなんだろうが、一応金はある程度稼いでおいて損はないし、魔法を使って人助けするの、もまあ悪い気分ではない。

魔道具を毎日十数個程度作っているが、スクロールの紙の裏側にうちの宣伝を入れている。

これを見てやってくる人がたまにいるのだ。

以前と比べて出来る魔法も増えたので、占い以外の要望にも応えることが出来る。

引きこもりなんちゃって魔術師ライフ、良きかな良きかな。

「なーんか俺、労働はしているけどやる気の無さに関しては人生で最低の状態だろうなあ」

俺は床に寝転びながらぼやく。

死ぬことが無くなったので、一切動かなくても問題ないという気

持ちがあるせいだろう。

「それでいいんですよ、ご主人様。私がいいますから」

紅茶を飲みながらサキアが言う。ほのぼのとした昼下がりだなあ。

「いつそご主人様は何もせずにベッドに寝ているだけでもいいんですよ？ 身の回りのことは全て私にお任せください」

「へ、こわーい。」

ドンドンドンドン

「……ん？」

「おや……？」

何やら、扉を叩く音がする。

「客か……？」

「私、ちょっと出てきますね」

「おっ」

サキアは立ち上がり部屋から出る。

「すみませーん！ ごめんくださーい！」

「はーい！ ただいまー！」

やっぱり客か。しかし、今の声は女の子か？ 迷子の子猫でも探しているのだろうか。

しばらくすると、サキアと思われる足音が階段を上がり部屋に向かってきた。

「あの、ご主人様、今回のお客様なのですが、その……」

なにやら、少し戸惑っているようだ。

「なんだ？ 迷い猫か？ それとも犬か？ もしやライオンとかじゃあるまいな」

「いえ、そうではないのですが……」

「なんだ」

「あの、ご主人様の弟子になりたい、とおっしゃっていて……」

「……」

え？

「で、弟子っ!?!?」

「はいっ！ そうなのです！ お部屋へご案内しようとしたら『この魔術師さんの弟子になりたいんです!』……と」

ええ……弟子い……？

嫌ではない、むしろ嬉しいが本当に俺でいいのか？ 特に名の知れていない引きこもり魔術師だぞ？

「んー……。まあ、とりあえず話を聞いてみないことには分からんし、連れて来い」

「ご、ご主人様！？ お客様とお話するのですか！？」

「何をそんなに驚く」

「いえ、ご主人様は外の人間と関わりたくないのかと……」

「そうかもしんねえけどさ……俺の弟子になりたいって言う奴の話はちょっと聞きたいし……」

確かにあんまり人と話したくはないが、俺の弟子になりたい女の子、ならば立場的には俺が大分上だろうしいちいち気を使う必要もない。

話し相手としてのハードルは大分下がるだろう。

「では、お部屋のお掃除と身だしなみを整えなければ……」

「いや、いいよ。俺がそういう人間だって分かってもらえるし」

部屋は異世界の物品が大分増え、服も同じくだ。怪しまれることもあるまい。

魔術師って自分のこと以外はどうでもいいような人も多いらしいしこのままでいいだろ。

「そ、それではご案内させていただきますね」

「おう、連れて来い」

「ご主人様、お客様を連れて参りました」

サキアが戻ってきた。そして、彼女が連れていたのは、

「し、失礼します……」

声の通りの、女の子であった。

背丈は低め、見た目的には13、4歳程度だろうか。いかにも魔法使いといった感じの紺色のローブを羽織り、手にはこれまたいかにもなとんがり帽子を握っている。そして、木製の大きな杖を抱えている。

見事な「魔女っ娘」だった。

「君が俺の弟子になりたいって子？」

「はい！ カオンと申します！ 弟子にしてくださいっ！」

カオンと名乗る少女は、深々と頭を下げた。

「とりあえず、座ったらどうだ？ サキア、お茶出してあげてくれ」

「はい、ご主人様！」

サキアがカオンにお茶を出したところで、俺は話を始めた。

「僕はハルミ。この街でひっそりと魔術師をしている者だ。外には全く出ないし大して仕事してるわけでもないけど、どうしてここを知ったんだ？」

カオンは床にちょこんと座り、緊張した様子で話を聞いている。

「は、はいっ！ この街で買ったスクロールにここの名前が書いてあったので……」

ああ、一応宣伝効果あるんだな、アレ。

「なるほど。で、君は魔術師なの？ 服装見る限りそんな感じだけど」

「い、いえ……実はそうではなくて……魔術師に憧れてこの服を……」

なんちゃって魔術師なのか。

「じゃあ魔法は？」

「つ、使えません。すみません……」

「ふーん。歳はいくつだっけ？」

「14歳ですっ……！」

やはりそんなくらいかあ。

「でもその歳なら魔法学校に通えばいいんじゃない？」

この世界には各都市に魔法学校がある。この街の近くのお城にも王立の魔法学校があったはずだ。

「いえ、憧れているだけなので……。えっと……今まで、普通の学校に行ってたので……」

「えっ！？　じゃあ学校は？」

「今は……あの、ちよっと……」

んん？　なんか雲行きが怪しくなってきたぞ？

「親御さんは？　家は？」

「それは……、えっと……うう……」

応えに詰まっているのか、うつむいてもじもじと体をゆらすカオソ。

「もしかして家出？　それはちよっとなあ……」

家出娘を預かるなんて、そこまでの責任は持てないぞ。

この子の将来の為に説得して家に帰ってもらったほうがいいのでは。

あんまり俺が言えた事じゃないけどさ、この子はまだ可能性があるし。

「いえっ！ 違うんです、ちょっと複雑な事情があつて……」

「それは余計に困るぞ。俺は親御さんに迷惑かけたくないし、家に戻ってくれるとありがたいんだが……」

「それがですね、ええと……」

再び言葉に詰まる。そして、

「あつ！ あの、私、追い出されたんです！」

「えっ！？」

「私が魔術師になりたいってしつこいから追い出されちゃって、もう家には帰れないんです！」

「え、ええ……」

それ、普通に考えなくても酷い親だぞ。

「でも親御さんはきっと後悔してると思うぞ。自分の子供がいらな
いなんていう親はいないぞ？」

ほんと、なんで俺がこんなこと言わなくちゃいけないんだろうな
あ……。

「いえ！ 私はあの家に帰りたくありません！ 絶対に嫌です！」

うわぁ……。中学生の頃の俺を見ているようだぁ……。

よく考えれば年齢的にも反抗期ドンピシャじゃねえか。これはますます面倒見切れんぞ。

「や、やっぱり考え直したほうがいいぞ」

「でも、もう帰る手段ありません！　ここまで来てしまった以上もう帰れません！」

「な、なんだって……！？」

ちよ、ちよっと待て、この子どんな旅路を歩んできたんだ！？

「君、家はどこに？」

「えっ！？　い、家ですか……えっとですね……、東！　東のずー
ー……っ」と果てです！」

えらいアバウトだなあ。

「東の、どこ？　街の名前とかは」

「えっと、ノウヒン村です！」

「聞いたことねえなあ。サキアは？」

まあ、俺この世界のこと碌に知らないからな。

「いえ……私も。東の地域は詳しくなくて……」

「田舎なので！　ド田舎なので！」

田舎とかいう問題なのか……？

「そうか。で、その田舎からどうやってここに？」

「えっと、船や荷車に載せてもらったりとかして、適当に彷徨って
いるうちにここに……」

「なるほどなあ。それは帰るのも一苦労だな。なあサキア」

「はい、なんででしょうか？」

俺はサキアに尋ねた。

「この街から、東の地域に向かう方法はあるか？」

とりあえず、帰り道くらい教えてやらないとな。

「そうですねえ……。城下町なら東の地域との交流も盛んですし、
あるんじゃないでしょうか？」

「そうか、じゃあ大丈夫だな。サキア、城下町まででも見送ってや
ってほしいんだが……」

「だ、ダメーっ！　ダメです！」

と、カオンが突っ込んできた。

「ダメです！　私は帰りたくない、というか帰れないんですよ！」

「いやでも、城下町からなら帰れるかもしれないみたいだぞ？」

「ダメなんです！ これまたややこしい事情が……」

「だからなんだよ、その事情ってのは」

「……この子、ちょっとめんどくさいぞ。」

「えつとですね……、私の住む村は、他の村との交易がほとんどないんですね」

「ふむふむ」

「で、その交易というのも数年に1回程度のもので、私はその数少ないチャンスを狙って村から出てきたんです！」

「おいおい、それ本当か？」

数年に1回って、どんなド田舎だよ。

「海流などの影響で限られた期間にしか通れない海域の話は聞いたことあるので、そのような要因があればあるいは……」

と、サキアが言う。ありえなくも……ないのか？

「そ、そうですね！ そうなんです！ だから私、今すぐは帰れないんです！ あと数年は待たなくちゃいけません！」

本当かよお……。

「ま、まあいい。で、君は無事に村から脱出してどうしてここへ？」

「それがですね、この国の城下町へ行けば魔術師に弟子入りできると思ったのですが。ダメでした。私みたいなどこの馬の骨とも分からない女の子は弟子にできない、と」

「そりゃそうだろうな」

今の話の中で、彼女を置いてもいいと思える理由は見つからない。

「私は次の街へ向かおうと思ひ、近くのこの町で荷車に載せてもらおうと思っただのです」

「ふむふむ」

「そして、なんとなく店で買ったスクロールに、この家の名前が書いてあったのです！」

「『血肉の館』 魔術師の家、相談受け付けています」の文面を見たのか……。宣伝効果は認めるが、いいことばかりではなさそうだ。

「そして、駄目元で俺のところに来たわけだ」

「はい！ その通りです！ 弟子にしてくださいー！」

カオンは、また深々と頭を下げる。

「えー……」

親が悪いのか子が悪いのかは知らないが、確かに帰るあてがないのはかわいそうだ。どうせこの後訪れる魔術師にも受け入れてもらえないだろう。

だが、弟子と言われてもなあ……。

「家事でも買物でも、なんでもお手伝いいたします！」

カオンは頭を下げたまま言う。

「でもそのあたりはサキアがみんなやってくれるからなあ……。サキアはどう思う？」

カオンの後ろに座り、俺と同じような反応を顔に見せながら話を聞いていたサキアに聞く。

「お気の毒なのは分かりますが、私達があなたを与る責任を負えるかと言われると……」

ですよねえ。

「そうです、教会に行つてはいかがですか？ あそこならば受け入れてもらえると思いますが」

「そうだ、教会だ！ ナイス！」

教会なら食い物もベッドもあるだろうし、困った子供の味方だ。神の御心を学んで、心を入れ替えて村に帰れるだろう。

悪魔バンバン召喚しまくってる俺が言えることじゃないけどな！

「嫌です！ 教会は嫌です！」

カオンが強く否定した。

「なんでだ？」

「教会は、魔術が学べないです！」

こ、コイツ……！ この期に及んで我俣を言うか！

「しかし、神聖系の魔法ならば学べるのでは？」

「悪魔の眷属が教会を薦めているよお……」。

「駄目です！ 私神聖魔法なんて覚えたくありません！」

魔法を選び好みすんなめんどくせえ！ 魔法に夢見すぎだ！

「な、なんで神聖魔法が嫌なんだ？」

俺は、ちよつとキレ気味に言ってみる。

「だって、神聖魔法って治癒や浄化専門じゃないですか！ 大した攻撃もできないし全然楽しそうじゃないです！」

こっコイツ〜！ クソガキじゃねえか！

「私は十分攻撃力あると思いますけど……」

サキアがぼそつと言う。魔界の住人だしね、神聖魔法は大ダメーシだろっ。

「とにかく、私はもっと凄い魔法が使いたいです！」

カオンが目を輝かせながら言う。

「……例えば？」

俺は、しぶしぶ聞いてみた。

「箒で空を飛ぶとか！」

ベタだなあ。だけど、

「俺空飛べないよ」

「えっ!?!」

「だってこの部屋から出ないもん。必要ない魔法は使えなくて当然だ」

2メートル程度飛べても何も楽しくないな。

「じゃ、じゃあ火炎魔法とか！ こうバーツと炎出したり！」

「……ちっちゃい炎くらいしかできねえな」

部屋の中でそんなことしたら危ないし。

ロウソクに火を付ける程度で十分だ。

「えっと……じゃあ、占いー！」

「それはできるぞ」

「本当ですか！ 私占星術がやりたいんです！」

「それは残念ながら専門外だ」

「ええーっ!?!」

グロテスクな悪魔直伝の髪の毛占いならできると。

「なんなんですか！ 何もできないじゃないですか！」

何故か怒られる俺。くっそも力つくなあこいつ。

「幻滅したなら帰っていいぞ。サキア、教会まで案内してやれ」

それはそれで、いいんだけどな。帰ってくれるなら。

「あーっ！ それはダメです！ 教会は嫌です！」

「じゃあお前を受け入れてくれるような魔術師を探すんだな」

多分ないけどな。かわいそうだが、彼女もいよいよヤバくなれば教会に駆け込むだろう。

「……実はそれももう難しくくて」

「……は？」

「お金……もうあとちょっとで……」

じゃあ教会行けよ！ いい加減怒るぞ！ この無気力極まる俺が怒るぞ！

「……なら働いて金稼げよ」

「うう……」

カオンは「でもそれは……」といった様子でうつむく。

これが社会って奴だ。いい勉強になったろう？

ほんつとくに俺が言えることじゃねえけどなあ……！

「あっそうだ！」

と、いきなり彼女は大きな声を出した。

「働けば、いいんですね!？」

「ああ、そうだな」

やっと分かってくれたか。

「雇ってください!」

「……は?」

「だから、私をここに住み込みで働かせてください！ タダ働きで

も大丈夫です！」

なっ……！ コイツ、いらねえこと思いつきやがって！

「い、いや……でもなあ、お前にできることなんて……」

「魔法の知識が必要ならば勉強します！ それができないうちでも、商品を運んだりお客さんにお茶出したりはできます！」

「で、でも……」

「私を雇って絶対損はありません！ 人手が増えるのは良いことじゃないですか？ 食事が出せないなら自分で野草でも食べて凌ぎます！ 泊める部屋が無いなら廊下で寝ます！」

なんだその根性は！ それをもっと早く他の魔術師にやっつけていればよかつたんじゃないか？

「さ、サキアはどうだ？」

「確かに人手が増えるのは嬉しいですが……」

「じゃ、じゃあ雇ってください！」

「ええと……」

サキアも困っている。

正直、このまま教会に連れて行っても戻ってきて家の前で座り込みしそうな勢いだ。

「うーん、じゃあ、こうしよう」

「なんですかっ!?!?」

「とりあえず、1週間は泊めてやろう。で、1週間後お前がどうなるかは、その間の働き次第だ」

「本当ですか!?!? 本当にいいんですか!?!?」

「……あ、ああ」

本当は関わりたくないが、一文無しの少女をほっぽり出すのもかわいそうではあるので、とりあえず1週間で様子を見よう。
そのうち頭が冷えるかもしれないな。

「ありがとうございますっ! 私、一生懸命頑張って師匠に認めてもらえるように頑張ります!」

「お前を弟子にしたつもりはないぞ」

これはお前に試練を与えているわけじゃないからな。

すると、サキアが俺の横に寄ってきて耳元で囁いた。

「……ご主人様、本当によろしいのですが?」

「……俺もそこまで鬼じゃない。これで駄目だったなら本人も諦めがつくだろう」

「分かりました」

俺は、腕を上げて喜んでいたカオンに話しかける。

「じゃあ、これから1週間、お前を俺の雇い人とする。頑張って働けよ」

「はいっ！」

こうして、俺の家に少しの間住人が増えることになった。

第14話 魔力適性検査

「ご主人様、カオン様がお出かけになりました」

サキアが部屋に入ってきた。

「そうか」

俺の家に1週間だけ雇われることになったカオン。

彼女は2階の一室にとりあえずの形で泊まることになったのだ。

そして、1日目の今日は魔道具を納入のお使いに行かせることになった。

「……あいつ、大丈夫かなあ」

「近くのお店ですし、私の書いたメモを持たせてあるので大丈夫だと思いますよ?」

「いや、道草食ったりしねえかなど。田舎の娘だし色々珍しいものもあるだろう」

「そうですねえ……」

どうか、面倒事を持ち込まないでほしい。

「さて、俺は1週間であいつの素質を見極めなければならん」

「そうですね。派手な魔法を使いたいと言われていましたが……」

「そもそも魔法の素質があるかが分からんからな」

「魔法適性を測る魔法はありますか？」

「……あるのか。知らなかったなあ」

というわけで、俺は久しぶりに「世界魔法大全」のページをめくるのであった。

魔法適性検査

魔法を使用するには魔法適性の高さが非常に重要になる。

本書では対象の魔法との相性のことを指すが、魔法を使用するためには本人の知識量や精神力も関わるとされている。

魔法適性の高い者は魔法媒体の量や詠唱時間を少なくすることができる、成功率が上がる、高度な魔法を使用できる等の効果を得られる。

一般的に人間の持つ魔法適性は非常に低く80%の人間は魔法を使用できない者と言われている。魔法適性の高さは遺伝や環境によって変わるが、突如として魔法適性の高い人間が産まれることもある。

魔法適性の低い人間に対し、悪魔や精霊といった超常的存在の持つ魔法適性は高い。

・検査魔法

対象の魔法適性を測る魔法。

検査をするためには対象と、魔法を使用する者の二人が必要。使用する者は魔法適性が必要。

右の魔方陣を紙に描き、魔法適性を測りたい対象の血を一滴垂らす。右の呪文を念じると魔法が発光する。

この光が強い者ほど魔法適性が高いとされる。以下が一般的な広さの部屋を暗くした状態で使用した際の目安。

・発光しない 魔法適性なし
・蛍の光程度 魔方陣が光を帯びる。少し魔法適性のある一般人並の適性。

・蝋燭程度 魔方陣周辺が照らされる。魔法適性の高い一般人並の適性。

・月光程度 部屋全体に光が行き渡る。最低限の適性とされる。
・炎程度 部屋全体が明るく照らされる。魔術師の一般的な適性。

・光魔法程度 やや眩しいくらいの強さ。高い魔法適性を持つ者の基準となる。大半の魔法を問題なく使用できる。超常的存在の一般的な適性。

・日光程度 非常に眩しい光を発する。人間ならば数百年に一度程度の適性。人間に使用できる魔法ならば全て使用可能。高度な超常的存在の持つ適性。

・神光程度 神光とは神が光臨する際に発するとされる光。直視していられないほどの光。神に匹敵する存在でなければこれほどの光を発することはない。

「……なるほど。早速試してみるか」

しかし問題が。

「2人いるのか、どうしよう」

「なら私がお手伝いしましょうか？」

「そうだな、サキアがいたな」

俺は紙に魔方陣を描き机の上に置く。

「じゃあ、俺が魔法を使うからサキアは血を垂らしてくれ」

「はい！」

すると、サキアは右腕に左手の人差し指をあてがい、

「えいつ」

ビシユッ

「うわっ!?!」

ドババッ

爪で切り裂かれた腕から血が吹き出し、魔方陣にどばどばとかがつた。

「おい、ちょっとやりすぎだぞ！」

「あっ！ すいません！ 机が汚れてしまいました！」

「そういう問題じゃねえ！ 大丈夫なのか!?!」

「あ、全然痛くありませんよ？ 治癒魔法で傷は塞がりますし」

サキアは平然な顔をしている。

「いや、うーん、そうじゃなくてだな……」

「舐めてみます？ 血も調味料代わりになりますよ？」

「もういいから、とりあえず机を綺麗にしてくれ……」

性格的には特に問題ないけど、常識が無い、というか魔界の常識で生きているな、サキアは。

サキアはてきぱきと自分で汚した血を拭き取り、机には血まみれの魔方陣が残った。

まだ血が乾いておらず、赤いテカりが生々しい。

「……さて、気を取り直して」

俺は、魔方陣に向かって呪文を念じる。

すると、魔法書にあったように魔方陣が光りだした。

「おおっ！？」

結構光ってんじゃないか？

カーテンも開けていてそれなりに明るい部屋でも眩しいと感じる程度の明るさはある。

「私は悪魔の眷属ですので、魔法適性は十分にありますね」

「なるほどなあ」

魔方陣の光は、数十秒ほどすると収まった。

「ご主人様、自分の魔法適性は気になりませんか？」

と、サキアが尋ねてきた。

「……確かにな」

というか今まで気にならなかったのが不思議なくらいだ。

「じゃあ私が魔法を使います！」

「おう、よろしく」

ということ、魔方陣を新たに用意した。

俺は、ナイフを取って人差し指に軽く傷を入れ、血を一滴魔方陣に垂らした。

「じゃあいきますよ」

サキアが、手のひらを魔方陣に向ける。すると、

「うおっ！？」

「わっ！？」

魔方陣が、激しく光りだした。

「ま、眩しいですー!」

「こ、これは……嘘だろ?」

数百年に1度レベルの魔法適性!?

その光も、しばらくすると消える。

十分明るい室内が、少し暗く感じた。

「やはりご主人様はかなりの魔法適性をお持ちのようですね」

「マジかよ……」

「賢者の石だって作れるんですよ? 何も不思議ではありません」

そういえば、そうなのかねえ……。

「師匠! 帰りました!」

カオンが無事お使いから帰ってきた。良かった良かった。

「おいカオン、ちょっといいか」

「はい、なんでしょうか師匠!」

……師匠と決まったわけじゃねえんだよなあ。

「今から、お前の魔法適性を測る」

「魔法……適性？」

それすらも知らねえのかよっ！

「お前が魔法を使えるかどうかのテストだ」

「ええっ！？ そんなのあるんですか！？」

カオンは綺麗な金髪のショートヘアを掻きながら驚く。

「ああ、これに合格できないとお前は魔法を使うことすらできん」

「嫌です！ 勉強は嫌です！」

「違う違う、テストと言っても筆記試験じゃないぞ。お前の素質を見るんだ」

「……そ、素質？」

「そうだ」

俺は、机の上に魔方陣を描いた紙を置く。

「これでな」

「おおっ！ なんか魔術師っぽいです師匠！」

「魔術師なんだがな」

そして、俺はナイフを取り出す。

「……なんですか、師匠。そんな物騒なものを持って」

「この魔法にはお前の血が一滴必要なんでな」

「えええええっ!?!」

カオンはぴよんと後ろへ飛びのく。

「むむむむ、む、無理です！ 怖いです！」

「こら逃げるな！ でないとお前が魔法使えるか分からないんだぞ
「！」

「でも痛いのは嫌ですっ！」

「サキア、捕まえろ」

「はい」

扉にしがみつくカオンをサキアが抱え上げ、机の前に無理矢理座
らせる。

「ぎゃーっ！ 嫌ですう！ やめてください！ 離してください！」

「暴れるな、危ないぞ」

そこからだんだんと血が滲み始めた。

「ち、血イ！ 早く！早く治癒魔法！」

「駄目だ、魔方陣に一滴垂らしてからだ」

「約束と違う！」

そんなのしてないけどな。

貯まった血はやがて筋となって流れ、ぼたりと魔方陣に落ちた。

「よし。サキア、治癒してやれ」

「はい」

「いいい……！」

カオンは青くなり形容しがたい声を漏らしている。

サキアはカオンの傷口に手を当てる。その部分から光が発せられ、傷口が治った。

「これで大丈夫ですよ」

サキアはカオンの拘束を解く。

「ふえ……あああ……」

真っ青だったカオンは、真っ赤になりぐでつとサキアにもたれか

かる。

「うう……ぐつす……ししょお……ひどいよお……」

何もそこまで酷いことはしていないぞ。

俺は血のついた魔方陣に向かって念を送る。

すると、

「光った！」

「ふえ………？」

魔方陣が光りだした。その光は、俺やサキアのものよりは強くないが、確実に光っていると見えるものだった。

「おお……結構いいんじゃないか？」

「どづいづこと………？」

「お前には魔法の素質がある」

「本当ですかっ！？」

カオンが飛び起きる。復活はええな。

「ああ、魔術師としては十分な魔法適性だろうな」

「わーい！」

両手を挙げて喜ぶカオン。

「じゃあ早速魔法を教えてください！」

「駄目だ」

「えー！　なんでー！？」

「まだお前の仮雇われ期間は始まったばかりだからな。魔法を教えるのは、1週間経って俺がお前を認めてからだ」

あと、俺が人に魔法教えたことないのもある。

「そんなあ！　じゃあ何をすれば認めてもらえるんですか！」

「うーん……、俺がお前を弟子にして育てたい人間だと思わせることだな」

「なんですかそれー！　訳分かんないですよー！」

だって適当に言ったからな。俺はお前がどんな人間か知りたいのだ。

「それは自分で考えろ」

「うう……」

カオンは押し黙る。

「さ、仕事の続きだぞ。カオン、サキアの手伝いをしてやれ」

「えー！」

「さあ、早く立ってください！　まずはお掃除ですよ！」

「ええー！　なんでお掃除しなくちゃ駄目なのぉ！」

カオンはサキアに急かされながら部屋を出て行く。

「こんな調子で大丈夫かねえ……」

俺は、ぼそりとつぶやくのであった。

第15話 弟子のいる日

魔方阵を使用しない場合の魔法

魔方阵の発祥自体は神代にまで遡るが、大月暦100年前後に魔法使用の規格を統一するために魔術師達の間で積極的に使用されるようになった。

本書はこれに倣い魔方阵の使用を推奨しているが、魔法の使用自体は魔方阵以外の方法も存在する。場合によっては魔方阵を使用しない方が成功率が高い魔法も存在する。

代表的なものには、物体の配置や形状、動きなどを魔法陣のように利用する具象式、あらかじめストックされた魔法を魔法陣無しで使用するストック式などが存在。

本書の別冊資料に魔法陣を使用しない場合の魔法について掲載しているが、全てを網羅することは不可能であるため代表的なものみに留めている。

『世界魔法大全』のこの項目だが、俺は最近になって気付いたものだ。

魔法陣を使用しない方法ならば、アニメや漫画で見るとような戦闘中にバンバン魔法を打つようなこともできるのだろう。

俺は部屋で引きこもっているので咄嗟に魔法を使う必要が無く、だから最近まで知らなかったのだ。

このようにまだまだこの世界には俺の知らないことが多くある。

例えば、この世界は意外に科学も発達している。

この前サキアに、スクロールに魔法陣を書き込む作業が面倒では

ないかと言つと、

「印刷機があれば楽なのでしようが、それほど大量に生産するわけでもないですし必要ありません」

と言われた。

このように、この世界には印刷の技術は存在しているようだ。というか俺がお世話になってきた魔法書の大半が印刷されたものだ。

他にも蒸気機関や水道設備が発達している地域もあるらしい。

が、魔法と比べてコストの高いものも多くそのおかげで俺がいた世界ほど発達はしていないようだ。

あとは神様や精霊により自然界に無闇に手出しもできないらしく、そのため大規模な開発を必要とする交通手段は存在していない。

最近までは外の世界のことなんてどうでもよかったが、遠くの村から来たと言うカオンのおかげで気になってきたのだ。

そんなカオンとの共同生活から4日。今日も彼女はサキアに家事を教え込まれている。

俺としては、今のところ彼女を弟子にする気はまだない。なんとか説得して村に帰り、平穩に暮らしてほしいものだ。

「はい！ ただいま参ります！」

と、下からサキアの声が聞こえた。久しぶりに客が来たようだ。

「えー！ なんてー！」

カオンの声が聞こえる。おい、お客様相手に何かやらかしたのか？
すると、階段を上がる足音が聞こえ、そして部屋のドアが開いた。

「ご主人様、しばらくカオン様の相手をお願いします……」

「私もお客さんの話聞きたいっ」

あー……やっぱりか。というか14歳にもなって子どもみたいな扱いられてるぞ、お前。

「分かった。おい、弟子になりたいなら俺の言うことはきちんと聞け」

「はい」

カオンは素直に部屋に入ってくる。

「では、私はこれで」

サキアがドアを閉める。

そして、部屋は俺とカオンの二人きりになった。カオンはどこか不服そうな顔で突っ立っている。

「……まあ、とりあえず座れ」

俺はテーブルの向かい側に敷かれたクッションを指す。カオンはそれに従いそこへ座った。

「ねえ師匠。サキアは今何してるの？」

カオンが俺に質問してきた。

というかコイツ、サキアを呼び捨てにしてんのかよ。まあサキアはメイドだし立場的にはカオンの方が上ってことになるのか？

俺の中では圧倒的にサキア>カオンなわけだが。

「客からの依頼を受けてるんだよ。多分占いだろっな」

そこまで宣伝はしてないし占い以外もやっているが、占いの依頼がやはり一番多い。

「すごい！ 師匠本物の魔術師みたいですよっ！」

「……お前、舐めてんのか？」

俺の弟子になりたいんじゃないのか？

「……だって師匠、魔法見せてくれないんだもん」

彼女はほっぺを膨らませて拗ねるようなジェスチャーをする。めんどくせえなあ。

「じゃあ見せてやろうか？」

「ほんとっ！？」

ちよろいぞこいつ。

「どんな魔法が見たい？」

「ビームがどーんって出るやつとか！」

「だからできねえつつつてんだろ」

そんなことしたら家が壊れるわ！

「むー！ どうせ何言ってもそうやってできないで言っ
んでしょ！ 何もできないじゃん！」

「お前がお使いしてる魔道具は作ってるぞ」

「でもほとんどサキアがやってるじゃん！」

「魔法を込めるのが一番重要なんだぞ！」

確かにサキア任せにして手間を極端まで省いているけどな。

「でもそれ、凄くないし！ 私そんな魔法覚える気ないし！」

ああー！ コイツほんと腹立つな！

異世界の人間のくせにゆとり世代の中学生みたいな発言するな！

こつなったら、俺の凄いとこ見せてやんぞ？

「なあカオン、喉渴かないか？」

「なんですか急に……。まあ、さっきお掃除して喉渴いたけど」

「じゃあ今用意してやる」

俺はそばに置いてあったビールを手に取る。もちろん洗っていで綺麗なものだ。

そして、ペンで手のひらに魔法陣を描く。描いたのは水を召喚する魔法。俺がこの世界で初めて使った魔法だ。

「見てるよ？」

俺は、机の上にビールを置き、手をかざす。そして、呪文を念じた。

チヨロチヨロ……

「わっ！」

俺の手の平からビールに水が流れ落ちる。俺が手を握ると、水は止まった。

「ほら、飲め」

「……これ、汚くないですか？」

「ビールは洗ってるし、召喚した水も純水だ。別に手もそれほど汚れてないし」

魔術師はそういう汚れを魔力媒体にできるからな。つくづく便利なものだ。

「じゃ、じゃあ……」

カオンはおそろおそろビールに口をつけ、ちびっと水を口にした。

「……！」

彼女の目が、光った気がした。するとカオンはビールの水をぐびぐびと飲み干してしまった。

「美味しい……！」

「な？　これが魔法の力だ」

「凄いです師匠！　私こんな美味しい水飲んだことありません！」

「どうだ、ちよつとは見直しただろ？」

「はい！　……でも、地味ですね」

「……お前はよくそんなことが言えるな」

地味ってなんだよ！　この世界で生きる上で特に重要な魔法だということとは俺が実証済みだぞ！

「もっと凄い魔法はないんですかっ！？」

「そんなこと言われてもなあ……」

悪魔召喚、とかは派手だが一般人のコイツの前ではできない。彼女には悪魔よりも神様の元で生きてほしい。

「占いとかアクセサリーの作成ばかりやってるからなあ」

魔術師は魔法をドツカンドツカンぶっ放して戦う者ばかりじゃない。俺のように引きこもって研究に没頭する奴もいるのだ。

「アクセサリーって、お守りですか？」

「そうだな。幸運のお守りとか魔除けのお守りとか」

「じゃあ、それもですか？」

と、カオンが俺の首にかかっている首飾りを指差す。

「いや、これはサキアに貰ったやつだ」

あいつから貰った大事なお守りだ。なるべく肌身離さず着けている。

「サキアが？ 何で出来ているんですか？ その白いのとか綺麗ですな」

「え、っ！？」

思わず、変な声が出た。だって、だってそれは……、

「……珍しい動物の、骨らしいぞ？ はは……」

「へえ！ そうなんですか！」

珍しい動物、というかサキアの骨なんだよなあ……。言える訳ねえよ、使い魔のメイド（存命）の骨を大切に持つてるなんてな。

「俺が作ったのはサキアが持つてるやつな」

「ああ！ あれが師匠の！」

俺の渡した首飾りは、サキアも大切に着けている。

「……ん？」

と、カオンが何か疑問のあるような顔をする。

「なんで、師匠とサキアはお互いの作った首飾り交換して大切に持つてるの？」

「え、っ……！？」

また、変な声が出た。

「なんか恋人みたいじゃないですか」

「そ、そんなことはないぞ」

俺はそんな気は、無い。可愛い使い魔ではあるがな。サキアは俺に「親愛」なる感情を抱いているらしいがそれがどのようなものかは未だに不明だ。

「そもそも、お二人が出会ったきっかけって何ですか？」

「お前、怒涛の質問責めだな……………」

「だって気になりますもん。師匠は部屋から出ないって言ってますけど、いつから出てないんですか？ 出れないならサキアとも会えないんじゃないですか？」

「それはだなあ……………うーむ……………」

そこを突かれるのはマズい。俺が異世界から来た人間で、サキアが元人間だということはあまり知られたくない。
すると、

「ご主人様、お客様の占いをお願いします」

と、サキアが部屋に入ってきた。

「丁度いいところに来たサキア！」

「なんでしょうか、カオン様」

「師匠とサキアの馴れ初めが知りたい！」

「まあ……………。そうですね……………」

「ストップ！ サキア、こっちにこい！」

俺はサキアをさえぎり、こっちへ来させる。そして、彼女の耳元でつぶやいた。

「俺達の事を話すのはやめたほうがいい」

「……そうですね、すみません」

サキアは謝った。俺は、カオンの方を向いて言う。

「今はちょっと、言えないな。複雑な事情がある」

「はい……。じゃあ、他の事はいい、サキア？」

「なんででしょうか？」

「師匠とサキアの関係が知りたいです！　なんかアクセサリー交換なんてしちゃってるし！」

おい、それもやめろ。

「私とご主人様は、切っても切れぬ、深い関係なのでございます！」

「やめろっ！」

その発言はいらぬ誤解を生む！

「えっ！？　深い関係って！」

「それはですね……ご主人様の命は、私の命も同然なのです！」

「えええっ！？　マジ！？」

「やめるーっ！ 違う！ 違うから！ サキアも事態をややこしくするなっ！」

確かに、使い魔としては何も間違っではないがそれは本当にダメなやつ！

「俺とサキアは、主人とメイド、それ以上でも以下でもない！ ……もっと深い事情はあるが、それは今は言えん！」

「……怪しいなあ」

「ご主人様……申し訳ありません、つい口が……」

サキアはしゅん、と肩を落とし反省する。

「ですが、私は少なくとも……ただのメイドではありません」

と、ぼそっとつぶやいた。やめる、やめてくれ……。

「……というか占いだ占い。サキア、紙をよこせ」

「はい」

サキアが、客の書いた紙を俺に渡す。

依頼主は街の商人で、最近眠れなくて困っているそうだ。

「なるほどな、よし占っぞ」

俺は、蠟燭を用意し、芯に指先を近づけ念を送る。すると、蠟燭

に火が灯った。

「わぁ……… 凄い………」

カオンは息を漏らす。

この魔法は魔法陣を使わない方法でのものだ。最近サキアに教えてもらった。

俺は占い用の手袋をはめ、紙を火に近づける。

「師匠、その手袋何ですか？」

「占い用の、特製手袋だ」

素材については……… 言わない方がいいだろう。コイツ、聞いたら
卒倒するかもしれん。

蝋燭の火が燃え移った紙はやがて燃え尽き、俺の頭に占いの結果
が出る。

身の回りで起きた、「死」に目を向けよ

「……… だそうだ。親族の死が気がかりなのか、それとも悪霊の類か
………」

割とありがちな結果である。やはり親族の死は精神的に負担がある
ようつでそれ絡みの相談が多い。

「あ、悪霊……… つ！？」

カオンが自分の肩を抱き震える。

「そうだな、もしかすれば身の回りで死んだ人間が霊となって枕元に現れているのかもしれない」

「ぎゃーっ!」

カオンが顔を青くして後ろへ飛びのく。

「こ、怖がらせないでください!」

「いや、よくあることだからな。話を聞いてみないことには分からないが……。サキア、客に心当たりがあるようならこの札を渡せ。寝る前に枕元に置いておけ、とな」

俺の作った魔除けのお札である。

「了解しました」

サキアはお札を受け取ると、部屋から出て行った。

カオンは、まだ震えていた。

「……怖いのか?」

「だ、だって……! この街、お化けが出るんですかっ!」

「いや、結構あるみたいだぞ? むしろお前の村では出ないのか?」

「お、お化けなんていませんっ……!」

いや、いるから。俺も最初は信じてなかったけどこの世界はマジで出るから。現実逃避をするな。

カオンは頭を抱えている。

「……………うらめしや」

ちよつとからかいたくなつた。

「嫌あーっ!」

カオンは叫び声を上げる。

「おい、客に迷惑がかかるからやめろ」

「だって……………師匠がいじわるするから……………」

「お前、お化けが怖いのか?」

「当たり前ですよっ!」

「……………俺を殺したのは……………お前かあ……………?」

「ぎゃーっ! ほんつとやめてくださいっ……………!」

涙目になりながら、彼女は俺に抗議するのであった。ごめん、ちよつと楽しいかも。

そして、その夜。

「……師匠」

「……なんだ。もう遅いぞ。寝ないと明日の仕事が辛いぞ」

カオンが、俺の部屋にやってきた。

「……一人で寝るの、怖い」

「ガキかよ……」

お前本当に14歳か？ 小柄な見た目と相まって年齢詐称も十分に考えられるぞ。

「サキアに寝かしつけてもらえ」

「……今仕事してて忙しそうだし」

魔道具の作成でもしているのだろうか。

「寝かしつけるまでの数分くらいなら大丈夫だ」

「でも結局一人になるし。それに、私が寝れないの師匠のせいだもん」

「俺だって忙しくてな……」

「……嘘だ」

「ちっ」

面倒くさいが……、ちょっとやりすぎたかもしれないな。

「じゃあここで寝たらいい。布団持ってこい」

「……やだ」

「は？」

「寂しい、師匠と寝る」

「おいおい……」

本当に子どもじゃねえか。仕方ねえなあ。

「ほら、そこに俺の布団があるから入れ」

「……うん」

カオンは、目をこすりながら俺の布団にもぐりこむ。

「……変な匂いがする」

「失礼だな」

多分体臭というよりも薬品や魔力媒体の匂いだろうな。

俺は、カオンの小さな手を握ってやる。

「さ、ゆっくり寝る。俺はまだもうちょっと起きてるが、この部屋からは出ない。安心しろ」

「うん……」

カオンは、拳をぎゅっと握り目を閉じる。

俺は、布団の上から彼女の体を軽く撫でてやる。昔俺もこうやって母親に寝かされたなあ。

だんだんと俺の手のひらの中の拳が、緩まる。カオンの顔を見ると、彼女は安らかな顔で眠りについていた。

「ふう……、世話が焼けるな」

「……お母さん」

「……っ!？」

と、カオンが寝言を漏らした。

お母……さん？ 母親が恋しいのだろうか。よく見ると、月光が彼女の目に光る何かを照らしていた。

両親の元に戻りたくないって言ってた癖に、しっかりホームシックになってんじゃねえか。

「……やっぱ、お前は魔術師になるべきじゃねえよ」

弟子にしてほしい、というのは断ろう。そのほうがいいと思う
ては幸せなのだ。

俺と違ってお前には帰るべき場所があるんだ。

そんなことを考えながら、俺はカオンを見つめるのだった。

……今日は、クッションを枕に雑魚寝するか。

第16話 俺達は、ダメ師弟

「さて、今日が最終日だな」

「はい！」

正座したカオンが元気よく応える。

そう、今日はカオンがうちで働き始めて1週間。これで最後になる。

「師匠の期待に沿えるように、最後まで頑張ります！」

カオンは笑顔でそう言っているが、俺は彼女を弟子にする気はなかった。

「今日は魔道具の配達はありませんので、家事のお手伝いをしてもらいますね」

カオンが漏らした、母親への未練のことを考えると彼女はやはり村に帰るべきだ。

「なあ、カオン。何か食べたいものとかあるか？」

「へ？」

「折角最終日だしな。いいか、サキア？」

「はい。私が知っている料理、作れる料理であれば」

俺は、彼女は村へ帰るべきだとは思っているが、こうやって一人で旅をしてきたことを全て否定する気はない。少しでもいい思い出として覚えていてほしかった。

「いいんですかっ!?!」

「ああ。好きなものがあれば言ってくれ」

「うーん……」

カオンは少し考えると、

「ステーキ!」

と言った。直球だなあ。

「……だそうだが」

「お肉、買えますかねえ……」

サキアが、ちょっと困った顔をする。

「なんでだ?」

「お肉を仕入れている牧場が、数ヶ月前モンスターに襲われて結構な被害が出たようで……安定してお肉を仕入れるには少し時間がかかるらしいです」

「相変わらず物騒な世の中だなあ」

「近くを通りがかった勇者一行によりモンスターは倒されたのですが、牛の半数が食べられてしまい、勇者への報酬も相まって経営が厳しいそうです」

この世界、人間が生きていくには少々厳しいところがあると思う。だからこそ魔法が発達し人間はそれを身を守る手段としているのだが。

こういうニュースを聞くと、つくづく初日に外へ出ないと決めてよかったと思う。

「……てなわけで、ステーキはじめ肉料理は難しそうだ」

「仕方ないですね……」

カオンは肩を落とす。

「肉でなければ、魚はどうでしょうか？」

「うーん……あんまり焼き魚好きじゃないなあ」

俺もだな。骨を取るのが面倒だ。

とは言ってもサキアの作る魚料理は骨の一片も見当たらないが。

「私、お魚は生の方が好きです」

「あ、それは俺もだ」

やっぱり魚は刺身だよ、刺身。ああ、寿司食いてえなあ。

「な、生っ!？」

サキアが、驚いたような反応をする。

「どうした、サキア」

「生でお魚を食べるなんて、そんな気持ちの悪いこと……! お腹を壊しそうです」

あー、なんだか日本の食文化を初めて知った外国人みたいな反応だな。

サキアは山生まれだし、新鮮な魚を生で食べる機会はなかったのだから。

料理に髪の毛入れる奴に気持ち悪いと言われたくはないがな。

「なんですか? お刺身美味しいじゃないですか」

「オサシミ……?」

サキアは、きょとんとしている。

「はい! お寿司とか、私大好きで……」

「オスシ……?」

そうそうお寿司……ん?

「お寿司……?」

「どうしたんですか、師匠」

「お寿司」……？

「……今、お前『お寿司』って言ったな？」

「……は、はい」

「何か、おかしいとは思わないのか？」

「えっ……？」

カオンは眉をひそめて首をかしげる。

「『お寿司』……？ そんな食べ物、俺は見たことも聞いたこともねえなあ」

「あっ……！？」

カオンは、言ってしまった、というような顔をする。

そう、「お寿司」なんて、この世界に存在するわけがない。

いかにも西洋ベースな世界観、生魚を食う文化はほとんど無いだろう。それなりにこの世界に詳しいサキアでも驚くくらいだ。

そんな生魚を、これまためつたに話を聞かない白米と、酢を混ぜたシャリに乗せて食う料理を「お寿司」と呼ぶ。

そんなピンポイントに和食と一致した料理が、この世界に存在す

るか？

もし俺のように日本から来た人間が、この世界で寿司を作ろうと思ったとして、それが可能か？

カオンの発した、俺の故郷の伝統料理の名前、そして彼女の様々な発言から、一つの仮定が導き出された。

「カオン……お前、『異世界』から来たな……？」

「あ……！」

彼女は、息を飲む。

「しかも……『日本』から来たな……？」

「し、師匠……！」

そう。彼女は、日本人だ。

見た目からはそうは思えないが、彼女の発言やノリの数々は、日本の女子中学生の、そのものだ。

「どうなんだ」

「……はい、そうです」

カオンは、しゅん、と肩を落とす。

「……師匠、私、嘘をついていました。ごめんなさい」

頭を下げて謝るカオン。

「いや、俺も嘘はついていたがな。というか言っていなかったただけでもあるが」

「……………え？」

「なんで、お前が日本人だと見抜けたか、分からないか？」

「だってそれは私が……………あっ！」

「そうだ、俺が日本人じゃないと、分からないだろ？」

そう。俺が日本人で、お寿司のことを知っていなければ分からなかった。

「師匠も……………日本人……………！？」

「ニホンジン……………？」

サキアは何が何やら、という反応だ。これに関しては置いてけぼりで申し訳ないな。

「俺もわけあってこの世界に来たわけだが……………まずは、お前の話だな」

「……………はい」

カオンは、俯きながら話し出した。

「私は、元いた世界……日本では、普通の、地味な中学生でした」
やっぱり中学生だったか。

「髪も瞳も黒かったですし、視力も悪くてメガネをかけてました」
と、カオンは懐から黒縁のメガネを取り出してかけてみせる。そんなもの持ち歩いていたのか。

メガネをかけたカオンの顔は、なるほど確かに、どことなく地味な女子中学生を思わせる。

「私、学校ではいじめられて……いや、そんなに深刻ではないんですけど、無視、されてました」

ああ、それはキツツいなあ……。現代社会の抱える問題だな。もう俺には関係ないことだけだ。

「そのおかげで、不登校気味だったんです。家で本を読んだりネットしたり、そんなことが多かったです」

俺もそんな生活だったな。

「そんな時にですね、私は見つけてしまったんですよ、『異世界へ行く方法』をです」

「な、何だつて!?!」

そんな方法が、普通の女子中学生に見つけられるようなところに

転がってたのか？

「お父さんの部屋の奥の方から見つけたんです。ボロボロの本でした」

「はあ……信じられんが、俺が言えたことじゃねえな」

「こんな漫画みたいなこと、って思いながらも当時の私は追い詰められていたので……試しにやってみたんです。多分、厨二病だったんですね、私。楽しそうって気持ちもありました」

多分現在進行形で厨二病だな。

「するとですね、私の部屋に女の人が現れたんです。その人は、神様だと言っていました」

「神様、ねえ……」

俺は真逆のパターンだったな。

「そして、その人が言ったんです。『人生を、やり直してみたくはないですか？』と。そして、私を異世界へ招待したんです」

随分待遇がいいなあ神様は。やっぱり悪魔はクソだな。

「私はその神様によって、この世界で新たな人生を歩むことになりました」

「……それ、怖くはないのか？」

「不安はありましたよ。こんな私が異世界でやっていけるのかつても、元の世界じゃもう私はやり直しが効かない、そう思ったんです」

「そうかなあ……」

まだまだ若いんだし、将来何か良いことがあるかもしれないだろ。

……つと、そんなことを俺が言えるわけねえよな。彼女なりに覚悟してのことだ。

「その時に、髪と瞳の色が変わり、視力も少し良くしてもらいました」

「至れり尽くせりだな。俺はそんなことなかったぞ」

「身長は変えてもらえませんでした……。一番気にしていたのに……」

か、かわいそうに……。

「で、私はこの世界で変わってやるうつて思ったんです！ 魔術師になりたい、それがまず最初の目標でした」

「なんでまた魔法？」

「カッコいいじゃないですか！」

「そうだな……」

「づいつところはしっかり14歳だ。」

「魔術師に、なりたかったんですけど……なかなかなくて」

「ああ、どの魔術師にも断られたっていうのは……」

「そこは本当ですね。結局何も変わらないまま、今師匠の前にいるわけです」

「そうか？ 異世界で旅をするっただけで十分変わっているんじゃないか？」

「んー……、確かに新鮮なことばかりでしたけど……。師匠にはなんだか呆れられているみたいですし……」

自覚はあんのかよっ。

「とにかくっ、そういうわけで私は今ここにいるのです！」

「なるほどなあ……うーむ……」

「……どうしたんですか、師匠」

「いや、少し気がかりなことがあってな」

「気がかり？」

「ああ、お前が本当に日本に未練が無さそうだな」

「当たり前ですよ！ もうあんな生活に戻りたくありません！」

カオンは強く否定しているが、俺は彼女が今のところずっと口にしていない言葉を知っている。

「お母さん……は、どうなんだ？」

「っ……！？」

彼女は、引きつった声を出した。

「この前俺の部屋で寝た時、寝言でつぶやいていたぞ」

「そんな……」

「ご主人様！ それはどうということですか！」

ここで今まで黙っていたサキアが割って入ってきた。

「ややこしくなるからちょっと黙っててくれっ！」

「は、はいっ！」

俺は一旦息を整える。

「で、どうなんだ。『お母さん』への未練は、あるんじゃないか？」

「……そういえば、言っていないませんでしたね」

カオンは、震えた声で言う。

「お母さんは……もう、いないんです」

「なッ……!!?」

「……!」

俺とサキアは、言葉を失う。

「私が小学生の頃に、急死しちゃったんです。優しいお母さんで、私は大好きでした」

……これには、俺も何も言えない。俺には重過ぎる話だ。

「中学に入るときお父さんは再婚して、今は違うお母さんがあるんですけど……その人私はどうでもいいみたいですとお父さんと一緒にいるんです。だからお父さんも私に構わなくなりました」

カオンは、ぼそぼそと、ところどころ声を詰まらせながら話す。

「私は家でも学校でもいないも同然の人間でした。だから、いいんです。私がいなくなっても誰も困らないんです」

「カオン……」

そこで俺はやっと声を出せた。

「あの世界に未練はありません。お母さんは、異世界に来ても私の心の中にいます。だから、大丈夫なんです」

「そうか……大変だったんだな」

今までどんざいに扱っていたが、それがちょっと申し訳なくなつた。

「はい……。だから、私をここに置いてほしいんです。私は、この世界で誰かに自分の存在を認めて欲しいんです……！　お願いします！」

カオンは、正座のまま頭を下げる。

その姿は、か弱い女子中学生のものとは思えない。

カオン、お前は十分に強い人間だよ。俺よりはよっぽどな。

「安心しろ。お前の話は、よく分かる。ひっじょーに、共感できる」

「……え？」

カオンは、ふっと顔を上げた。

「俺も、お前と同類みたいなもんなんだよ」

「同類……？」

「そう、俺は元の世界じゃ引きこもりだった。……おっと、今もか」
頭をかいて、ちょっとお気楽な感じに言ってみる。

「師匠が……引きこもり」

「そうだよ。お前と違って無理矢理連れてこられたんだ、この世界に。俺は変われなかったよ、お前と違ってな」

「……いえ、師匠は凄いですよ！ 魔術師になれたじゃないですか」

「そうです！ ご主人様は、素晴らしい魔術師です！」

「サキア！？」

サキアが急に声を上げた。

「カオン様、ご主人様は、不老不死です」

「！？ 不老不死！？」

カオンが驚く。そりゃそうだよな。

「ご主人様は、この世界で生きてゆく為に『不老不死』という方法を選択しました。そして、賢者の石を完成させてそれを実現させたのです！ その努力は認められるべきです！」

「賢者の石……」

「いや、それはサキアがいたからだな……」

「その私を使い魔にしたのはご主人様です！」

「つつ、使い魔！？」

あ、やべ、これも秘密にしたことだ。

「ご主人様、自分に自信を持ってください！」

「お、おう……そうだな」

そうなのかも、しれないな。なんだかんだでこの世界で引きこもり生活を送る為に必死に努力してきた、と言えるのかもしれない。

「ご主人様とカオン様は、どちらも素晴らしい方です！ 私はそう思います！」

「「サキア……」」

俺とカオンは、声を揃えた。

「……ありがとう、サキア」

「はい、ご主人様！」

サキアはにっこりと笑う。

「よし、カオン」

俺は、改めてカオンに向き直る。

「はい！」

「今から、お前を俺の正式な弟子にする」

「……ありがとうございます！」

カオンは、勢いよく頭を下げた。

「ただ、俺も人に魔法を教えるのは初めてだ。人間的にも問題がある。一人前の魔術師になれる補償は無い」

「大丈夫です！ そんなことよりも、師匠は私の気持ちを分かってくれます！ それだけで十分です！」

カオンは顔を上げて言う。

「……よし、じゃあ今日は初弟子祝いだ！ 今日『血肉の館』は休みだ！ サキア、旨い飯を頼んだ！」

「はい！」

サキアは意気揚々と立ち上がる。

「これからは、俺は本当の『師匠』だ。よろしくな、カオン」

「はい！ 一生懸命頑張ります！」

彼女は、満面の笑みを浮かべるのであった。

「……師匠！ 私もその賢者の石で不老不死になりたいです！」

「駄目だ。自分で作って、自分の力で不老不死になるんだな」

「そんなぁ！ 師匠のケチっ！」

「よく考えてみる、不老不死になるんだぞ？ 歳を取らないんだぞ？」

「それが、どうかしたんですか？ 最高じゃないですか」

「もう、成長しないんだぞ？ お前はその背格好で永遠に生きていくことになるんだぞ？」

「……あっ」

「賢者の石を作れる頃には、お前も歳相応になってるだろうな。老婆になる前に完成できればいいが」

「分かりました！ 師匠を悩殺できるようなナイスバディな大人になるまで、不老不死は我慢です！」

「カオン様っ！ 何を言っているのですか！ ご主人様に色目を使わないでください！」

「……どういえばサキアってなんでそんなに師匠のこと気にしてるの？ やっぱり二人って……」

「ち、違ーう！」

「違います！」

「違う！ よし、今から話そう！ 俺とサキアの馴れ初めについて

もな！
」

第17話 異世界流園芸入門

「暇だあー……」

「なら私に魔法教えてくれないじゃないですか師匠！」

「だるい」

「もー！ 起きてくださいっ！」

「お前はまず、基礎を覚えることが大切だ。魔法書をしっかりと読み込むこ

とから始める」

「難しくって頭に入ってきてませんよっ！」

のどかな昼下がり。

俺は今日も今日とて自堕落な日々を送っていた。

弟子が出来たからといって別に生活が大きく変わるわけでもない。
カオ

ンに魔法を教えるのは暇潰しを兼ねているのだが、今は少し飽きた
のでや

る気はない。

「あー、暇だ。なーんもやることねえなあ」

「隠居したおじいさんみたいなこと言わないでくださいよ」

「隠居かあ。確かに今そんな感じかもな。なあ、ジジババってどうやって

暇潰ししてるんだ？」

「私に聞かれても知りませんよ……。ゲートボールとかしてるんじゃない

ですか？」

「俺運動したくない」

「聞いてきたのは師匠じゃないですかっ！」

カオンは布団に寝転がる俺の背中をバシバシ叩いてくる。

「師匠なんて盆栽とでもお話していればいいんですよ！」

「痛えっ！？ おい、師匠に何するっ！」

尻に強烈な一撃を受けた。

「師匠は師匠だけど、元は私と同じ引きこもりだもん！」

それを言われると反論しようがねえな。

盆栽とお話かぁ……。ん？

「盆栽とお話……」

「……何言ってるんですか」

「いいな、盆栽とお話……！」

「ついに心までお爺さん化しちゃいましたか？ 頭の老化は止まらなかつたとかですか」

「たとかですか」

「カオン、盆栽だ、俺は盆栽をやるぞ」

「……は？」

俺の名案に、カオンは呆れた顔をする。

「この窓あたりに観葉植物でもあればいいなどは、前から思ってたんだが」

、それだ！」

俺は立ち上がり、窓際を指す。

「ちょっと珍しい植物でも育てれば暇潰しにはなる、いいじゃないか……」

「！」

「ししょー、植物に構つくらいなら私に構ってほしいです」

「それは、後でだな」

「むう」

カオンはほっぺたを膨らませた。

「サキア、サキア！」

俺はサキアを呼ぶ。

すると、階段を上がる足音が聞こえ、ドアを開けてサキアがやってきた

。

「なんででしょうか、ご主人様」

「サキア、俺は今日から園芸をすることにした」

「えん……げい？ お花でも育てられるのですか？」

「そうだな。だからその準備が必要で、買出しに行つてほしいんだ」

「それは素敵ですね！ どんなお花が良いでしょうか？ ご主人様のお部屋」

で育てるなら、小さなお花が良いですね」

サキアは顎に人差し指を当てて考えるポーズをする。

「いや、種の調達はいい。お前には植木鉢とジヨウロを買ってきてほしい」

「

はい、分かりました！」

「あ、あとは土を適当に取ってきてくれ」

「了解です。それでは、行ってきますね」

サキアは部屋から出て行った。

「……師匠、結局何の植物を育てるんですか？」

カオンに質問された。

「ふふふ……俺は数百年に一度とも言われる才能を持つ魔術師だぞ？ そ

の辺の草花を育てる気は無い」

「……私を育ててほしいんですけど」

「ということ、今からその植物を調達する。この部屋から出ずにな」

「どっちゃってそんなことを？」

「それは、秘密だ」

「ええ……」

「で、カオン。お前にちょっと頼みがあるんだが」

俺は、カオンを指差す。

「なんですか、面倒事は嫌ですよ」

「サキアが今日オレンジを買ってきていただろ？ 台所からそれの一つ持

ってきてほしいんだ」

「なんで私がそんなこと……」

「実はな、お前の目の前で、ちょっと凄い魔法を使ってやるうと思
った」

「えっ……！？」

カオンの目に、ちょっと輝きが見えた。

「嘘じゃないぞ、約束だ。だから、行って来い」

「は、はいっ！」

彼女はそそくさと立ち上がり、部屋から出て行った。

「さて、と」

俺は魔法書を開き準備をはじめた。

カオンが戻ってきたのはそれから一分ほどだった。

「師匠、オレンジ持ってきましたよ」

カオンはオレンジを俺に差し出した。鮮やかな橙色で、おいしそうだ。

「お、ありがとうございます。じゃあ、今からそれを食べてくれ」

「え？」

「お前の今日のおやつはそれだ。あ、皮と種はきちんと分けておい
てくれ

「よ

「ちょっと！ 私、自分のおやつを取りに行っただけなんですか！
何の意

味があるんですか！？」

「いいから食べ。俺はその間に準備してるから」

「もー！ 分かりましたよ！ おいしくいただきます！」

カオンは床に座り、机の上でオレンジの皮を剥きはじめた。

俺は、クローゼットからポスターを取り出した。そして、その裏に魔法

書を見ながら魔法陣を書いていく。

「師匠、そのポスター、『すぷらった！』ですよね」

カオンがもぐもぐと口を動かしながら言う。

『すぷらった！』とは俺が日本にいた頃流行っていた萌えアニメだ。ホ

ラー映画好きの女の子4人の日常を描いた作品である。

「そうだな。B L U - r a y 第一巻初回購入特典だ」

ちなみにこれは通販サイト限定のものである。アニメショップ毎に絵柄

が違うが、引きこもりにそんな選択肢は無い。

「勿体無くないんですか？」

「今となつては必要ねえしな」

「ふうん……」

カオンはぷっ、と種を皮に吐き出した。

「カオンも見てたのか？」

「はい、動画サイトで」

「誰推し？」

「うーん……。かなりあちゃんですかね」

かなりあちゃんとは、ポスターの左上でVサインをしている金髪の女の

子だ。怖いものを目にするとう金切り声を上げる子だ。

「えっ、かなりあ？ 好きな人いたんだ」

かなりあちゃんは、金切り声が五月蠅い、耳が痛いともっぱらの
評判で

あり人気はあまり無い。

「かなりあちゃん不人気ネタは私が怒りますよっ。私、かなつば推
しなの

で

カオンはびしっ、と指を立てる。

かなつば、ようはかなりあちゃんと、主人公のつばめちゃんの「
ンビだ

。かなりあちゃんはつばめちゃんに強い執着心を持っている、との
設定な

のだ。

「じ、じめん」

俺はつい謝ってしまった。

一応俺は師匠だが、こうして同じ趣味の話をしているとそういう
の忘れ

てしまうな。

俺はちよつとだけ、日本への未練を感じた。

「よし、完成したぞ」

俺は魔法陣の描かれた紙を持ち上げる。

「なんですか、その魔法陣は」

「ふふふ、それはだな……」

俺はばっ、と魔法陣をカオンに向ける。

「これは、悪魔召喚のための魔法陣だ！」

「あ、悪魔召喚!？」

カオンは驚きの声を上げる。

「そうだ! 今から、俺はここで悪魔を召喚する!」

「そんな、大丈夫なんですか?」

「今まで何度もやってきているからな。で、今回呼び出すのはこいつだ」

俺は魔法書を開きカオンに見せる。

「なになに……?」

カオンはメガネをかけ、本を見つめる。

・フォーリオル・ヘオウ

序列270位の悪魔。

元は南の地域で信仰されていた土着神が悪魔として零落したものの

現在

でもこの悪魔を神として扱う地域は存在する。元々は農耕を司る神の1柱

であったため、農耕や植物に詳しい。

自分を崇める者には心優しいが、崇めることをやめた場合にはそ

の者の

土地からは魔界の植物が生え土壌を汚されるとされる。

蠅と蜘蛛とイナゴの3つの首に蜻蛉の体、蜂の羽、蟪蛄の足を持つ姿を

している。神として崇められる際は両手に鎌を持った美青年の姿になる。

召喚者に対してあらゆる農耕と植物の知恵か魔界の植物の種を与える。

使い魔を望んだ場合には力強い牛かよく働く蜜蜂を与える。

魔法陣の中央に植物の種を置き、呪文を念じると召喚することができる

。召喚に失敗した場合、魔法陣から魔界の植物が出現し、これが人食い草

である場合があるので注意が必要。

「今回呼び出すのはこの悪魔だ。この悪魔に、珍しい魔界の植物を貰おう

と思う」

「本当に大丈夫なんですか？」

「悪魔召喚は高位の魔術師にとっては必須の魔法らしいぞ？ お前

もしっ

かり見ているんだな」

俺は魔法陣の書かれた紙を床に置く。

「カオン、さっき食べたオレンジの種どうした？」

「そこにありますけど……」

カオンは机の上を指す。そこには、オレンジの皮に吐き捨てられた種が

あつた。

「よし、それを寄越せ」

カオンは俺に種の乗った皮を渡した。

「師匠、もしかして私にオレンジを食べさせたのって……」

「そうだ、召喚の為に植物の種が必要だからだ」

俺はオレンジの種をいくつつかつまみ、魔法陣の中央に置く。

「それ、私の唾ついてますけどいいんですか」

「気にするようなことじゃねえよ」

さて、これで準備完了だ。俺は魔法陣から一歩離れる。

「カオン、気をつけるよ。お前は黙っていればいい」

「は、はい!」

カオンは肩を強張らせ、拳をぎゅっと握る。

俺は、魔法陣に向かって念を送る。

「……来たぞ」

魔法陣が、薄く輝きだした。そして、

「わっ……!!」

魔法陣が強く輝くと同時に、そこから何者かが飛び出した。

それは、魔法書に書かれた通りの、様々な虫の要素を持つ悪魔だった。

「ひいい……っ!」

カオンはそのグロテスクさに恐怖の声を漏らしている。

「私を呼んだのは、貴様か」

「はい、私は魔術師のハルミと申します」

「ハルミ、か。魔術師ということなら、何か望みがあるのだな」

虫の悪魔、フォーリオルは三つの首の持つ口をそれぞれガチガチと鳴ら

しながら言う。

「その通りでございます」

「農耕の知識ではなからう。魔界の植物か、使い魔を望んでいるな？」

「はい、私は魔界の植物の種が欲しいのでございます」

「よいだろう。何の種が欲しいのだ？」

悪魔は羽をけたたましく羽ばたかせる。

「特に決めてはいないのですが、この部屋で育てられるようなものが良い

のです

「ほう、この小さな部屋でか。何のためだ？」

「趣味、でしょうか。いかんせん、部屋に籠りきりでは息が詰まります。

珍しい植物でも育てて気を紛らわしたいと思ったのです」

「ふむ……、小さく、鑑賞に適した植物が欲しいのだな？」

フォーリオルが両手の鎌をすり合わせるとギリギリと音が出た。

「はい、珍しいものならば尚更良いです」

「なるほど……ならば、面白い植物がある」

「本当ですか!?!」

「ああ。シタイソウと言う植物だ」

「シタイソウ……その、『シタイ』とは」

不気味なその名前を、俺は復唱した。

「まさに、『死体』そのものことだ」

「魔界らしい植物ですね……」

「この植物がつける実の中は、死体のような色と香りをしているのだ」

「ほほう……」

いかにもな魔界の植物である。正直、このようなことは慣れてきている

のでもうそこまで驚かない。

「早くて3ヶ月で実をつけるから鑑賞に適しているぞ。これを好む

魔術師

が意外と多いのだ」

「確かに、それはうってつけですね」

「ある程度育つと後に実になる房ができる。そこに開いた『口』に落ちて

きた虫を栄養とする」

「食虫植物、ですか」

ウツボカズラのなやつか。

「そうだな。ただしこいつは動物の肉でも育ち、与えたものにより
実の性

質も変わるのだ」

「それは面白そうですね」

「性質的に、魔界以外でも戦場や墓場に生えることもあるな。魔界
ならば

エークエルの館の庭は一面シタイソウが生えているぞ」

「エークエル……」

こんなところで、ここに来たばかりの俺を散々引っ掻き回してく
れた悪

魔の名前が出てきた。懐かしいなあ。

「ただ、種から育てるのが少々骨が折れるのだ」

「……一体何が？」

「種に与えるのは水ではなく、血なのだ」

「えっ……!？」

今まで俺の服に掴まってガタガタと震えていたカオンが、変な声を漏らす。

す。

「血……?」

「そうだ。ネズミの血を与える者が多いが、なるべく人間、それも若い女

のものだと尚更良い」

「なるほど、それは手がかかりますね。でも大丈夫です。私は不死身なの

で、血くらいならば問題ありません」

「ほう、不死身だったか。なら問題はないな。では、これで説明は以上だ

。では、シタイソウの種を置いていこう、さらばだ」

フォーリオルがばたばたと羽を鳴らすと魔法陣が光り、その強い光と共に

に悪魔は消え去った。

そして、魔法陣の上には赤黒い種が残った。見た目的には梅干の種に見

えなくも無い。

「……よし、これで種の調達は終わったな」

「……し、師匠」

と、カオンが服にしがみついたまま言う。

「どうした？」

「あの、私、血を抜かれたりしませんよね……」

「なるほど、若い女がここにいるじゃないか」

「い、いやあーっ!!」

カオンはダッシュで部屋の隅に逃げる。

「冗談だぞ。というかお前怖がりすぎだ」

「だって、だってえ……！」

未だにガタガタと震えている。

しかし、若い女の血か。サキアは元人間で肉体年齢は若いだろうけど、

サキアの血でもいいのかな。あいつなら喜んで血をくれそうだけど。

「お前もこうやって悪魔と話できないと魔術師になれないぞ」

「無理、無理ですよ、怖いですよ……！」

「んー、でも高位な魔術師って大体悪魔召喚してるって聞くしなあ」

「ええ……あんなのと私話したくないです……かわいい悪魔とかいないんですか？」

「まあ、見た目がマシなのはいるけど、基本変な奴だな」

俺が最初に呼び出した悪魔ジステイラも霧に包まれて姿が見えなかった

し、そついつのもいる。

「私、魔術師になれるんですか……？」

「お前次第だな」

「うう〜！」

カオンは頭を抱える。

「ご主人様、頼まれたものを買ってきました！」

と、ここでサキアが小さな植木鉢とジョウロを持って部屋に入ってきた

。

「おつ、帰ってきたな。種も調達したし、早速植えるか」

「はい。どうぞ、ご主人様」

サキアが植木鉢をジョウロを俺に渡す。

俺は、植木鉢だけを受け取る。

「ごめんな、どうやらこの植物、ジョウロはいらぬみたいだ」

「そうなのですか？」

「ああ」

俺は、魔法陣の上の種を拾い植木鉢に敷き詰められた土に押し込む。

「これはシタイソウの種で、血で育つそうだ」

「ああ、シタイソウですか！ 私も見たことがあります」

「そうか。だから、そのジヨウ口は客間に飾る花にでも使ってやれ」

「では、毎日血を与えないといけませんね」

「そうだな」

「では、私の血をあげましょう！ シタイソウは若い女性の血液が
大好物

ですし！」

サキアはふんっ、と力こぶのポーズ。

サキアの血でも大丈夫みたいだな、やっぱり。

「じゃあ、今から早速あげちゃいましょうか！」

「そうだな、頼む」

俺は、植木鉢を差し出す。

サキアはその上に右腕を持っていき、腕に左手の人差し指を沿
わせた

。そう、以前やったアレである。

「えいつ」

サキアは、爪をシュツと振りぬいた。

どぼぼ

「ぎゃあああつー！」

部屋の隅で固まっていたカオンが青ざめた顔で叫んだ。

「おい、ちよつと量多くないか？」

「あ、そうですね」

サキアは腕の傷口をさすり、出血を止めた。

俺は、血の匂いを放つ植木鉢を窓際に置く。

「さて、これから俺の楽しい園芸ライフがはじまるぞー！」

日光に照らされ、血を吸った土がぬらぬらと光る。もう数日経てば、こ

こからシタイソウが芽を出すのだ。

日光を浴びる植木鉢とは逆に、薄暗い部屋の隅で丸くなるものがつぶや

いた。

「……うう、魔術師、怖いですう……」

まあ頑張れ、俺も通った道だ。

第18話 『創造』の魔法

「ほーら、今日のご飯はゴキブリですよー」

俺はサキアが退治した害虫をつまみ上げ、シタイソウの房に放り込んだ。

房に貯まった赤い液体に着水したゴキブリの死体は、みるみるうちに溶けて消えた。

「師匠！ できましたよ！ 見てください！」

と、後ろからカオンに話しかけられた。

「お、見せてみる」

「はいっ！」

カオンは、目の前に置かれた器の中に魔法陣を書き込んだ紙を入れる。そして、手のひらを向け目を閉じる。

「んんっっ！」

と、彼女が唸ると魔法陣から水が湧き出した。

「よし、成功だな」

「やったあ！」

カオンはバンザイー、と両手を挙げる。

カオンにいくつかの魔法をやらせてみたが、今のところは特に問題なく成功している。簡単な魔法ならば扱えるくらいにはなっただろうか。

「ご主人様、カオン様、お茶を入れました」

サキアが扉を開けて入ってきた。

「わーい！ 今日のおやつは何なの？」

「オレンジを使ったパイを焼いてみました」

サキアが机にお盆を置く。甘酸っぱい香りが部屋に漂った。

「すごい！ おいしそう！」

「今切り分けますね」

サキアがパイにナイフを入れ、6等分に切り分ける。

「半分は晚ご飯の後にとっておきましょう、どうぞ」

「いただきますーす！」

カオンはサキアに渡された皿に乗ったパイをフォークで切り、口へ運んだ。

「……」

「どつでしようか？」

「甘酸っぱくておいしい！　ねえ、このちょっと固いのは、オレンジの皮？」

「はい。皮も調理すればおいしく食べられるんですよ」

俺もパイを一欠片口に運ぶ。うん、確かに旨い。

「あ、師匠のお皿に蠅が乗ってます！」

カオンに言われて皿を見ると、確かにどこからか入り込んだのか、蠅が皿のふちに止まっている。

シタイソウを育てるようになってから、その匂いに釣られてか蠅をよく見るようになった。大半がシタイソウに消化されるので気にしてはいない。

「あら！　それは大変です！　えいっ！」

ビシイ

サキアが何かを投げた。

「わっ！」

すると、俺の皿に乗っていた蠅はコトリと机に落ちる。その蠅をよく見ると、

ピンと伸びた髪の毛が、蠅を真っ直ぐに貫いていた。

おいおい、お前は妖怪かよ。

「サキア、かつこいい！ これも魔法なの？」

「いえ、これは私が悪魔の眷属として持っている性質です」

「そうなんだ、私もなんかカッコいい魔法早く使いたいなあ。ねえ、師匠？」

カオンが俺に目線を送ってくる。

「……まずは魔法の基礎を覚えてからだな」

俺はパイを食べながら行った。

「えー！ 師匠はいきなり悪魔召喚とかしてたんでしょ！？」

「あれは、俺が魔法適性の高い人間だからできたことだ」

「むー、ずるい！」

カオンはそう言うとパイをぱくりと頬張る。

「そもそも俺がカッコいい魔法つてのをあんまり使えないからなあ」

悪魔召喚くらいかな。錬金術も凄い魔法ではあるが、派手さはないし。

「勿体無いですよ！ そんな魔法適性があるのに！」

「でも使う機会ないし」

「じゃあ作りましょう！ 外へ出ましょう師匠！」

「いやだ！ 出たくない！ お外怖い！」

俺は出ないって決めてるんだからな。今更出てしまうのは、男としてどうかと思うんだよ。

引きこもり自体がっていうのはナシだ。

「なんか、もつと凄い魔法使えるようになりたいとか思いませんか？」

「そりゃ思ってるさ。折角魔術師になれたんだしな。勉強はしている」

「本当ですかあ？」

「ああ、お前がお使いしたり寝たりしてる間にな。なあ、サキア」

「はい。私としては早めに寝たほうがよいと思うのですが……」

オカンみたいなことを言うな。

「で、こんな事もできるようになったぞ」

俺は机に落ちた蠅を指差す。

そして、その指を動かし宙に簡易魔法陣を描いた。すると、

「あっ……!!」

蠅が、羽を動かし飛び立った。

そして、その蠅はシタイソウの房へと飛んでゆき、房の中へと消えた。

「どうだ、最近覚えた魔法だぞ」

「それは蘇生魔法、でしょうか？」

サキアが尋ねてくる。俺は、チツチツ、と指を振った。

「違うぞ。俺は蠅を蘇生させたんじゃない」

「え、どういうことですか？」

カオンが身を乗り出す。

「フッフ……俺は今、『命を創った』んだ」

「……『創った』？」

カオンが首を傾げる。

「創造系の魔法、ですか？」

「正解だサキア」

「創造系？」

「ああ。そこに無かったものを新たに作り出す魔法、それが創造系の魔法だ。今俺は、蠅に新たな命を吹き込んだ。さっきの蠅は、今までの記憶を持たない、全く新しい思考を持つ蠅になったんだ」

「……ど、どういうことですか？」

カオンは、よく理解していないようだ。するとサキアがカオンに話しかける。

「カオン様、この世界では人は死んだらどうなるか、知っていますか？」

「えっと、体から魂が抜けて、彷徨うんだっけ」

「はい。人を生き返らせる蘇生魔法とは、この魂を人体へ引き戻すことで生き返らせているのです」

「ふむふむ」

「今ご主人様がなさったのは、死体に入れる魂を新たに作り出したのです」

「えっ……？ 新たに？ じゃあ先に抜けた魂は？ 新しい魂の入った体はどうなるの？」

「先に抜けた魂は、体に戻ることはできませんね。もしかすると、先ほどの蠅の魂もまだここにいるかもしれせん」

「な、なるほどね」

カオンはあたりをキョロキョロと見回す。

「そして、新しい魂の入った体は蘇生してまた生きることができません。ただ、魂は別のものになっていますが」

「じゃあ、記憶は失われちゃうの？」

「そうですね。ただ、反射行動や常識のような、記憶の奥底にあるようなものは引き継がれる場合があります。そもそも人の心の仕組みはまだ明かされていないようです」

そこんとはこの世界でも一緒だな。人の心の仕組みなんて解明できてしまったら、果たして人は正常な精神を保てるのだろうか。

「ま、俺はそういうことをしたってわけだ」

「へえ〜。……で、それって凄いの？」

「当たり前だ。創造系の魔法は数ある魔法の中でも最上位に位置する魔法だからな」

「そうなんだ」

「なんせ、神の如き力を振るえる魔法だからな。俺ぐらいの魔術師じゃなきゃ使えん」

俺は胸を張ってみせる。

折角の魔法適性を活かすために、創造系の魔法は使えるようになりたかったのだ。

「じゃあ、もつと凄いことできるんじゃないですか？」

「そうだな。今のは創造系の魔法では簡単な部類、魂の創造でしかも対象が蠅だからな」

今のところ、蠅以外にも蜘蛛やネズミで試してみたが見事成功している。

「それならもつと凄いものを創造してみてください！」

「いいぞ、何がいい？」

「うーん……」

カオンは腕を組んで考え込む。

「……やっぱり、生き物がいいと思います。石とか創造しても別に凄いなと思えないですし」

「そもそも地属性魔法なら似たようなことは可能だしな。じゃあ生き物を創ってみるか」

俺は紙を用意し、魔法陣を書く。生き物の創造となるとちょっと難しいので、魔法陣があっただほうが安定する。

「実は、生き物の創造は初めてになるんだよな。理屈は分かるんだが」

「それ、大丈夫なんですか？」

「問題ない。一応、『禁忌』ではあるから躊躇してただけだ」

「キンキ……？」

「カオン様、忌むべきことの『禁忌』です」

「ああ、そっちかあ。でもなんで？」

カオンはサキアに質問する。

「生物を生み出す魔法を乱用すると社会が乱れるとされ、人間の間では禁忌とされていることが多いのです。特に人間や亜人種の創造は特大の禁忌です」

「え、じゃあ今師匠がやろうとしていることって……」

「見つければ、牢獄行きもありえますね」

「それ、ヤバいじゃん！」

カオンが俺の方を見る。

「いや、見つかる気はないし。そもそもこんな魔法、高位の魔術師ならよくやってることだ。そもそも悪魔召喚自体が法で禁じられて

いるし賢者の石の作成も禁術だ。今更今更」

「ええ……」

俺は魔法陣を書いた紙を机に置いた。

「さて、何を創ろうか。魔法陣が小さいか馬やライオンは無理だから、小さな動物がいいな」

「猫、とか？」

「おお、猫はいいなあ。一度飼ってみたかったんだよなあ」

「ご主人様、創り出したした動物には責任を持ってくださいね。私に世話を押し付けるのは、私としては納得いきません」

サキアが俺に忠告した。そ、そうか、そうだよな。創った動物を「飼えないからこの場で殺すか」なんて言うことを言うほど俺は悪魔じゃない。

「師匠、猫もいいですけど珍しい動物も良くないですか？」

「珍しい動物？」

「ほら、ドラゴンとかペガサスとか！」

「そんなにデカいのは出せないし、暴れられても困るなあ……。でも、確かに憧れはある」

折角異世界なわけだ。俺は引きこもってるおかげで異世界生物と

が見たこと無いしな。

「じゃあ、スライムとか？」

「いや、スライムは結構危険だぞ」

「そうなの？」

「ああ」

俺は本の山から『モンスター図鑑』と書かれた魔法書を取り出し、スライムのページを見せる。

・スライム

柔らかい体を持つ生物の総称。一般的には不定形の液体生物を指すが、形が比較的固定されている種も存在する。種類が多くその生態も多岐に渡るため、「体が柔らかく複雑な器官を持たない」という特性を持つ生物はほぼ全てスライム種に分類される。不定形の種を「ゲル」、有形の種を「ジェリー」と呼ぶこともある。

体が滑らかで柔らかいため、物理的な攻撃によるダメージをほとんど受けない。そのため魔法の使えない一般人にとっては脅威となるモンスターである。

魔法の中でも、炎と氷の魔法に弱い。しかし、火山地帯に住むマグマスライムのように種類によってはこれらの魔法が効かないものもいる。また、マナスライムのように魔法を吸収して成長するスライムも存在しこれを倒すことは困難を極める。

液体状であるが故に、水分の多い場所、特に湿地帯などに多く生息する。水中に隠れ、魚や水鳥などを捕食する他、時には水辺にきた大型生物を襲うこともある。体から溶解液を分泌し、獲物を溶かして食べる。

地上では非常にゆっくりと動くため、遭遇しても逃げることは容易い。地上に住む種は木陰や洞窟の天井などで待ち伏せして餌を取るため注意が必要。

一部の種を除き繁殖方法は分裂であり性別の概念を持たない。寿命は1週間ほどの種から数万年生きるものもいるが、多くの種は3年〜5年程度生きる。

原初から存在する生物の一つで、体内構成が単純であり知能の低いので魔法の実験対象としてよく使用される。

「どうだ、決して『序盤に出てくる雑魚代表』ではないことが分かっただろう?」

「はい、そうですね。この世界のスライムは『スライムだと舐めてかかると返り討ちに遭う』パターンのやつですね」

「……………」

ゲーム特有のネタが分からないサキアは疑問符を浮かべている。

「ただ、危険とはいえスライムは多種多様だ。比較的安全なやつならいいかもな」

「それならば、私がおすすめのスライムがいるのですが……………」

と、サキアが手を挙げる。

「何かいい案があるのか?」

「はい、副々々々々メイド長が飼っていたスライムがいます……………
…ちょっとその図鑑貸してもらえますか?」

「おう」

俺はサキアに凶鑑を渡した。サキアはパラパラとページをめくると、

「ありました、これです」

と、机に凶鑑を開いた。

・スィートスライム

主に森に生息するスライム。その名の通り、体に多くの糖分を含んでいる。体表に膜を持ち、それにより饅頭状を保っているが、外敵などから強い攻撃を受けた際は膜が破裂し中身がドロドロに溶け出す。これにより相手を驚かし、液体状になって逃げるといふ。

主食は果物や樹液。食べたものによって体の色が変わるため、生息地によってスィートスライムの色が違う。体に糖分を含むためその体液は甘い、溶解液も混ざり合っており食用には適さない。

温厚な性格で危険性も低いので、愛玩用として飼われることも多い。ビンなどに入れ、果物や菓子を与えて体色の変化を楽しむ者も多い。

「どうですか？ ここに書いてある通り、副々々々々々メイド長もビンに入れて飼っていました。魔界の食物を与えたおかげで綺麗な色にはなりませんでしたが」

「うわあ……！　なんか凄くかわいいです！　私、これ飼ってみたいです、師匠！」

カオンが目を輝かせながら俺におねだりしてきた。

「確かにこれなら安全そうだが……そうだな、これにするか」

創造したものをカオンに渡してしまふのは、彼女のためにならないとも考えたがこんな高位の魔法を使うまでには相当な時間がかかるだろうし今は考えないことにした。

「本当ですか！　ありがとうございます、師匠！」

「さて、創造するとなるとその生物を構成する元素と対応した魔法陣が必要だな。さて、スリートスライムって何で出来ているんだ？」

「やっぱり、お砂糖でしょうか？」

「いや、そんな簡単なものじゃなからう」

俺は魔法書を開く。確か、この本の巻末資料に生物に対応した表があったはずだ。

「えーと、スライムはまず、水とタンパク質と油が基本……、で、スリートスライムはここに砂糖と琥珀、そして少量の土……か。これを適量混ぜるといいのか」

「全てうちにあるもので創れますね」

「え、タンパク質とか琥珀ってどういうことですか」

カオンが尋ねてくる。

「タンパク質は魔力媒体としてよく使われるからな、動物の骨を碎

いたやつが売ってる。琥珀も以前買ったのが余ってるな」

「では、油とお砂糖を取ってきますね」

サキアは机の上の食器を片付けると、部屋から出て行った。

「さて、水は魔法で出すとして、土は植木鉢のをちよっと拝借しようか」

そんなこんなで準備が整った。

机の上には、創造魔法の魔法陣にスイートスライムに対応した魔法陣が乗せられ、さらにその上には先ほどの材料が混ざったビーカ―が置いてある。

「さて、じゃあやってみるぞ」

「はい！」

カオンはわくわくと肩を揺らしている。

俺は、手のひらを魔法陣に向け念を送る。魔法陣が輝きだし、それに呼応するようにビーカー内の液体も光り始める。

そして、魔法陣が一瞬強く光った。

「わっ！」

光が止んだ。魔法は終わったようだ。

そして、魔法陣の上にあったビーカーに変化があった。

「……ん？」

カオンが、眉をひそめる。

ビーカー内の液体は、最初は白く濁っていた。が、それが透明になっっているのだ。

「……師匠、これ成功してるんですか？」

「まあ、見てろって」

俺は、ビーカーをひっくり返した。

「あっ！」

カオンは、水がこぼれると思ったのか声を上げた。が、

「ええっ!？」

ビーカー内の透明の液体が、ある程度形を保ったままつるりと魔法陣の上に抜け落ちた。

その透明の物体は、水饅頭のようにぶよぶよと震えている。

「な、なんですかこれ……」

「よく見てみる」

「え……?」

俺はその物体を指差す。すると、

「……動いてる!？」

そう、その透明な何かはズルズルと、這うように動いていた。

「これが、スィートスライムみたいだな」

「ええっ! こんななんですか!？」

「まだ何も食べていないので色が付いていないようですね」

「何か食べさせてみるか？」

「そう思って、パイに使ったオレンジの余りを持ってきました」

サキアが器に入ったオレンジを出す。

「よし、カオン。こいつにそのオレンジを食わせてやれ」

「えっ!?! 私がですか!?!」

「お前が欲しいって言ったんだろ」

「は、はい……」

カオンは器からオレンジを一切れつまんだ。

「口とか、どこにあるんですかこれ……」

「スライムは体に取り込めれば消化できるので、上に乗せてあげるだけでいいですよ」

「う、うん……」

カオンはそつとオレンジをスライムの上部に持っていき、落とすようにしてそれを乗せた。

すると、オレンジはゆっくりとスライムの体に沈んでいく。透明な水饅頭の中に沈んだオレンジが、浮かんでいるように見える。

と、その時であった。

「あっ!？」

オレンジの一部が弾けた。橙色の果汁が透明な液体の中に滲んで広がる。それが次々と起こり、オレンジは果汁の中に消えて見えなくなった。

「今、オレンジを消化しているんですね」

「へえ………凄い」

カオンは机にしがみつき、スライムをじつと観察している。

やがて、果汁の橙色がスライム全体に広がった。透明だったスイ

「トスライムは、オレンジ色のスライムへと変貌したのだ。」

「こつやって、色が変わるのを楽しむんです」

「うわぁ……」

「カオン、ちょっと触ってみろ」

「えっ、でも、刺激を与えない方がいいんじゃないですか？」

「優しく触れば大丈夫だろ」

「は、はい。なら……」

カオンはそつと人差し指を伸ばし、スイートスライムの体表を軽くつついた。

スライムは、身をぶるんと震わせる。

「柔らかいだろ？」

「……はい」

「どつだ、感想は」

「か、かわいいです……!!」

カオンはさらにつんつんとつく。それにあわせてスライムはぶるぶると震えた。

「ぷにぷにしてて、かわいいです師匠！ 私、この子飼います！
大切に育てます！」

「そうか、それはよかった」

「では、その子を飼うためのビンを買わなければいけませんね。今日はそのビーカーで我慢してもらいましょう」

すると、カオンが言った。

「この子の名前、決めなくちゃ！」

「え、名前つけんのか？」

「当たり前ですよ！ 私のペットなんですから！」

「どんなお名前にするのですか？」

「うーん……。『ぷにぷに』とか？」

「あ、安直……っ！」

落ち物パズルゲームみたいな名前だな。

「じゃ、じゃあ『シュガー』！」

「いや、安直なのに変わりはないぞ」

甘いから「シュガー」はちょっと……。

「『ぶにゆ子』！」

「……一緒ですね」

こいつ、ネーミングセンス皆無だな。

「もう！ 師匠もサキアも敵しすぎ！ 私のペットなんだからいいでしょー！」

「ま、まあそうだな。好きにすればいい」

あとで後悔しても知らんぞ。

カオンはスライムとにらめっこしながら名前を考えている。

「うーん、じゃあ、お前が最初に食べたのは、オレンジ！ だから、今日からお前は『ミカン』だ！」

という事で、「ミカン」ちゃんに決定したそう。後で変なもん食わせてオレンジ色じゃなくなったらどうするんだその名前。

「よーしよし、ミカン、よろしくねっ！」

そう言いながら、カオンはミカンをふるふると撫でるのであった。

第19話 『永遠の引きこもり』

「……これで準備は整ったか」

ぶくぶくと泡を立てるフラスコに入った液体を確認して俺は言った。

そのフラスコは通常のものよりもはるかに大きいサイズで、スイカ程度は余裕にある。

今俺が行っていることは、禁術とされる魔法の実験である。これは結構な時間をかけていて、賢者の石と同じくらいに熱中している。

「さて、あとすることといえば……」

俺は机の上に置いてあった紙を眺める。

「この世界で生きていくための不安要素の排除、そしてサキアの承認、だな」

その紙に書かれていたのは、「マレウリス」という悪魔の召喚方法。

この悪魔は危険であるとされ普通の魔法書には記述が無い悪魔である。

そして、俺をこの世界に連れてきた張本人でもあるのだ。

「ご主人様、どうされたのですか？」

「何、このおっきい魔法陣？」

「見ての通り悪魔召喚の魔法陣だよ。今回は、二人にも見ておいてほしくてな」

俺は魔法陣の上に賢者の石の欠片を乗せる。

「賢者の石！？ ご主人様、本当に大丈夫なのですか？」

「ああ、召喚にはこうするしかないからな」

マレウリスは意図的に召喚する場合大量の魔力媒体が必要となりその条件も厳しいため、今は賢者の石で代用するしかない。

「いえ、そうではありません。賢者の石を使用しなければ召喚できないような悪魔、という危険なものばかりではないですか？」

「そうだな。俺もどうなるかは分からん」

「ええっ！ それ、大丈夫なの？」

「俺は死なんから平気だ。カオンは万が一に備えて後ろの方で見ている方がいい」

「駄目ですご主人様！ 危険な悪魔は死なない程度のもものでは太刀打ちできません！ 今すぐお止めください！」

俺の腕を掴むサキアの手を、俺は握り返してやった。

「安心しろ。こいつは因縁があるとすれば俺にしかない。もしお前らに何かあれば俺が許さん」

「そついう問題ではありません！」

「そつだよ！　なんで師匠こんなときにだけかつこいいこと言っちゃってんの！」

「万が一だ、万が一。俺だってあんまり会いたくはない。が、今後この世界で生きていくための不安要素は取り除いておきたいんだ」

「……不安要素、ですか」

「ああ。今進めている実験が成功すれば、俺はこの世界で永遠に生きなければならぬと思った。だから、それを妨害する要素はなるべく排除しておきたい」

俺は、魔法陣の前に立った。

「じゃあ、やるぞ」

「……はい」

「うん……」

俺は、呪文を念じ魔法陣を発動させる。

普段なら魔法陣が怪しく光り悪魔が出現するが、今回はそのような演出はなかった。

ただ、目の前にいきなり現れたのだ。

「きゃっ……!!」

「わっ……!!」

現れたのは、背の高い黒ずくめの男。まさに「悪魔」といった、あの日から全く変わっていない姿だった。

「久しぶりだな……マレウリス」

「マレウリス……そうでしたね、私はそんな名前で通っているのですかね」

「自分の名前も分からないのか」

「いえ、私は名前を沢山持っているのですね……一つや二つ忘れることもありませんよ」

「……そうだろうな。お前のことはそれなりに調べたから知っているぞ」

マレウリス　この悪魔が危険だとされるのはその性質にある。

「その名前で呼ばれるのはこの世界だけですし、この世界で私は一般には存在しないものとなっていますからねえ」

こいつの特徴は、「どこへでも出現できる」という能力だ。それはたとえ別世界でも通用する。その力で様々な世界を渡り歩いているが故に、名前も沢山持っている。

そして、その力で俺をここへ連れてきたのだ。

「名前のことはもういい。本題に入ろう。……切り出したいのはそっちだろうがな」

「ええ、そうですね。私は今大変機嫌が悪いのです」

「そうだろうな」

ニヤニヤと笑っているが、その見開いた瞳は小刻みに震えながら俺を睨み付けている。今すぐにも殺してやりたい、と言わんばかりに。

「今までこんなことは一度もありませんでしたよ。まさか外へ出ようと思わず、尚且つ不死身の体を手に入れる者が現れるとはね」

「そんなことも想定せず魔法書を大盤振る舞いしたお前のミスだよ」

「全く、困ったものですよ。こうなってしまうとあなたが元の世界へ帰るしか賭けを終わらせる方法が無くなるのですが……あなたは这个世界へ留まるつもりなのでしょう？」

「そうだな。困ったか？」

「困ったもなにもありませんよ。参加者からも酷く文句を言われました。部屋から出ず生き続ける人間を見ても面白くない、とね」

「ずっと見てたのか」

「はい。私も定期的に様子を伺っていますが、参加者の方々もあなたがここへ来たときからずっと見ていますよ」

「……そんな芸当ができるってことは、参加者ってのはやはり……」

「そうですね。神、です」

「神……っ!？」

俺の後ろで、サキアが声を漏らした。

「正確にはあなたが元いた世界の神ですね。墮落した人間が更正できるかどうか、神はそんな賭けを通じて人間の性質の調整を行っているのです」

「大掛かりなこととしてそうで、シヨボいもんだな」

「人間には分からないことでしょうね」

「で、俺はどうだ？ 更正できたと思うか？」

「難しいですね。あなたは今やる気に満ち溢れています。ですが、本質は変わっていません。行動の全てが引きこもる為のものですから」

「そうだな。俺は、更正したとは思ってない」

「おや、そうですね?」

「ああ。俺は、今もこれから引きこもるつもりでいる。お前の言うとおりに何も変わってないよ。だから、この賭けはお前の勝ちになるのかな?」

「自ら負けを認めるのですか?」

「ああ、負けだよ」

俺は言い切った。

「……なら」

マレウリスは、ぼそりと声を漏らした。

「なら、あなたの魂を、私に寄越しなさい……!」

牙を剥き、尖った爪を俺に向けた。

「なんでだ? それは俺が死んだときの条件だろ? 俺は更正できなかった、それだけだ」

俺は、ちよつとからかうような口調で言う。

「それが何ですか! 私は悪魔です! 無報酬で働くことは、許さ
れない……!」

明らかに怒っているのが分かる。我慢の限界のようだ。

「こつなつたのもお前の落ち度だろ。それに俺は死ねないから魂も渡せん」

「私を舐めてもらっては困りますよ……！ 不死身の人間から魂を奪うことなど容易いこと……！」

と、俺に飛び掛ってきた。

「師匠っ！」

「ご主人様あーっ！」

と、その時だった。

「ぐわアッ!？」

部屋にまばゆい光が満ちた。そして、

《そこまでにしなさい》

何者かの声が、部屋に響いた。

「だ、誰っ!？」

カオンが部屋をキョロキョロと見回す。

《私は、神と呼ばれる者です》

声は、そう言った。

「なッ……！ な、何故邪魔をするのですか！」

マレウリスは目を押さえながら叫んだ。

《既に賭けは終わっています。もうあなたが介入する必要もありません》

「ならば、魂を私につ……！」

《それは、彼が死んだときの魂を賭けに出すと言っただけでしょう》

「それは理不尽です！ 賭けに負けたのなら、相応の物を差し出さなくてはなりません！」

《賭けに負けた？ いえ、そうではありません。彼は、賭けに勝ったのですよ》

「そんな、彼は自分で負けを認めました！」

《これは、神の判断です。確かに外へ一歩も出ず生活している彼は、一見墮落した人間です。しかし、魔法を学びそれを実践し、生計を立てている人間を、墮落したとは言えません》

「しかし……！」

《認めなさい。更に言えば、最近では弟子もできたようですしね》

「わ、私……！？」

《ということ、この賭けは彼の勝ちです。こちらの世界に戻って

こないのは想定外でしたが、彼はこの賭けの目的を達成しています」

「……そんな、そんなこと……！」

悪魔は顔を抑え震えている。そして、

「そんなこと、認められるわけねえだろオツ！」

一瞬にしてその痩せこけた体が膨れ上がった。

それは、もはや形を成さない一つの闇であった。

「今すぐ、お前の魂を貰うッ！」

《やめなさい！》

「グワアアッ!?!」

と、神の声と共に闇は散り散りとなった。

《全く、あなたは時々感情的になりすぎますね。 メフィストレ
フィス》

「……し、主よ……、しかし……」

光の中に漂っていた闇の欠片は、そう言い残して消えた。

《……さて、試練を乗り越えた人間よ、賭けに勝ったあなたには褒
美を与えましょう》

「……褒美、ですか？」

《はい。様々な才能やありったけの財産。最高の幸福を与えます》

「は、はい、ありがとうございます」

神を目の前にして、俺はちょっと萎縮する。

《永遠の人生を、幸福に過ごすと良いでしょう》

すると、光がより一層強くなった。

《では、幸せな人生を》

そう言って、光は消えた。

後に残るのは魔法陣だけだった。

「……終わった」

「師匠……」

「ご主人様……」

俺は振り返り、二人を見つめた。

「サキア、これからも、『永遠に』よろしくな」

「ご主人様っ……！」

サキアは俺に抱きついてきた。俺はそれを受け止めてやる。

「えーっ！ 私は!?!」

「カオンはまだ『永遠に』とは言えないからな……とりあえず、今後末永くよろしく、と言ったところかな」

「ふんっ！ すぐに不老不死になって『永遠に』になってやるもんねっ!」

「そうだな。いつか『永遠の』弟子になってくれ」

「あっ違っ！ 弟子はいつか卒業するもん!」

「じゃあとにかく勉強あるのみだな。頑張れ」

「うう……」

カオンは肩を落とした。

俺は、抱きしめていたサキアを離す。

「で、サキア。ちょっとお前に頼みたいことがある」

「はい、何でしょう?」

「俺とお前の、子どもを作ってくれ」

「えっ……!!?」

俺の言葉が理解できないのか、戸惑うサキア。

「えええええっ!?!」

大声を上げるカオン。

「サキア、子どもを……」

「ごごごごごごご主人様っ! ああ、あのっ! そのっ! お気持ちは大変嬉しいというか待ちに待っていたとかそういうのはともかくとしてっ! こんな状況でそんなこと言われてもっ……!」

「ししししししし師匠っ! ななな、何言ってるのっ! ちよ、直球すぎだよっ!」

「いいから、早く、今ここでだ」

「えええええっ!?! 今ここですかっ!」

「ちよ、ちよっと! 駄目だよっ! 14歳のレディーがいる前でそんなこと言うのもするのも駄目だっ!」

「サキア、どうなんだ」

俺は、サキアの顔を見つめる。

その顔は真っ赤に染まり、視線は俺を直視できず言ったり来たりだ。

「あああああ、あのっ……! そのっ……! 私に断る理由は無

いのですがっ……そのっ……色々と問題があるのではと……!」

「サキアも駄目っ! 今からここで何が行われるのっ!?!? もしかして私出て行ったほうがいいの!?!?」

「いいんだな、じゃあ、髪の毛を一本くれ」

「……えっ?」

「え?」

「だから、髪の毛をくれ。いつもやってるだろ」

「は、はい……」

サキアは髪を一本引っこ抜き、俺に渡した。

「よし」

俺はサキアを離し、机に向かった。

「どどどど、どづいづことですかっ……!?!?」

「もう訳分かんないよお……」

俺は机の上に置いてあったフラスコの蓋を開けると、サキアの髪を入れた。

そして、俺も髪の毛を抜き、同じようにフラスコに入れる。

すると、フラスコ内の液体が反応し、様々な色へと変わり始めた。

「……よし、これであとはこうすれば……」

俺はフラスコに念を送る。

成功率は低いらしいが……、神に幸福を与えられた今ならできる気がする。

「ご主人様！ なんなんですかっ！ 冗談では済まされませんよっ！」

「師匠！ 何やってんのっ！」

すると、フラスコが光り輝き、宙に浮き上がった。

「……やった！ 見ろ、成功したぞ！」

「……えっ！？ 何それっ……」

「ご主人様、これは一体……」

「俺が研究していたのは、『ホムンクルス』だ」

「ほ、ほむ……何？」

カオンが首を傾げる。

「フラスコ内で作れる、全知の特性を持つ人間だ」

「人間……」

「これを作るためには男女の体の一部を必要としている。ようは、通常母親の胎内で行われる現象をフラスコ内で再現しているんだ」

フラスコの光はさらに強くなる。

「こいつは性質的には、元となった男女の子になるわけだ。だから、俺はこの世界で永遠に過ごせる地盤を整えサキアに確認した。重要なことだからな」

仮にも子どもを作るわけだから、責任は取らなければならない。

「そ、そうなんですか……」

サキアは、複雑な顔をしている。

「うわぁ……師匠、最低だよ……」

何がだ。

「通常ホムンクルスはフラスコ内でしか生きていけない。しかし、その中で哲学を行い真理にたどり着いた時、ホムンクルスはフラスコを割り、全知の生命として誕生するんだ」

と、そこまで話したとき、フラスコの光が収まった。

その中には、一人の赤ん坊が、手足を丸めて浮いていた。

「やった……！ 成功だ！」

「これは……」

「赤ちゃん……?」

二人はフラスコの中の赤ん坊をしげしげと眺める。と、その時だった。

『パパ、ママ』

どこからともなく、少女の声があった。

「えっ……!?!」

「何っ……!?!」

サキアとカオンが驚く。

「ホムンクルス、お前だな」

『そうだよ、パパ。私だよ』

「赤ちゃんが……」

「喋っているのですか……?」

『そこにいるメイドさんが、私のママだね』

「えっ……!?!? あっ……、はい、そういうことになるんですかね……」

「そうだな。サキアお母さんだぞ」

『そして、隣の女の子がパパの弟子のカオンだね』

「あつ……はいっ！　そうです！」

何故か敬語になるカオン。

『みんなのことは、よく知ってるよ。まだ未熟だけど、私賢いから』

「そうだなあ、えらいえらい」

俺はフラスコを撫でてやる。すると、中の女の子も、笑い顔を浮かべた。

「こんなフラスコの中じゃ窮屈だから、早く外へ出してやらないとな」

『うん。私、沢山勉強して、パパとママに抱きしめてもらえるように頑張るね』

「そうだな」

俺はふわふわと宙に浮くフラスコを抱え、サキアとカオンに向き直る。

「さて、こいつが俺達の新たな仲間で、俺とサキアの娘のホムンクルスだ。名前は後で付けよう」

「よ、よろしくお願ひします……」

「よ、よろしく……」

二人はまだ状況を飲み込めていないようだ。

「で、だ。サキア、もう一つ言いたいことがある」

「は、はい」

「ホムンクルスは、俺とサキアを親として認識している。だから、俺と、夫婦になってくれ」

「っ……!!」

サキアが、顔を赤く染めた。

「あのっ……、気持ちは嬉しいのですがっ……、私もその気なのですがっ……!!」

「何だ？」

「あの、こんな形のは、望んでいないというかつ……!!」

「どうした？ 嫌なのか……?」

「いえ、そうではなくて……。あの、ご主人様……。ご主人様は、私が好き、なのですか……? 人間として、ではなくてですね……」

「好きだぞ」

「えっ……!?!」

「好きだぞ。一人の女性としてな」

俺はサキアを見つめる。

「この世界に来てから、お前は俺を支えてきてくれた。お前がいなければ俺は死んでいただろうな。こんな駄目人間を文句も言わず支えてくれる、お前は俺にとって、大切な人間だよ」

「そ、そうですか……?」

「ああ。そして、この『好き』は『親愛』だ」

「し、『親愛』……!」

「俺にとって、サキアはなくてはならない存在だ。好きだ。だから、結婚してほしい」

「ご、ご主人様っ……!」

「そうだな、俺はお前の主人だ。意味は、違うけどな」

「ううっ……!」

涙を浮かべたサキアは、俺に抱きついてきた。俺はフラスコを抱えていたので、それを挟むような形となった。

「お前はすぐこうやって行動に出すな。そういうところも好き、だ」

ぞ

「ずるいですっ……今までそんなこと全然言わなかったの……」

「お前の気持ちはなんとなく気付いていはいたがな、俺が踏ん切りが付かなかった。すまん」

「もういいですっ……！今、ご主人様が、私を好きとってくださるなら、それでいいんですっ……！」

サキアの涙が、フラスコにぼつんと落ちる。

『ふふ、パパとママ、あつたかい』

ホムンクルスが、そう呟いた。

「これ、出来ちゃった婚だよね……。二人が納得してるならいいしおめでたいんだけどさ……」

カオンは呆れた声を漏らした。

「ほら、カオンも」

「きゃっ!?!」

俺はカオンも一緒に抱きしめてやった。サキアもそれに乗っかかり彼女を抱きとめる。

「ちよっ……！私を幸せ空間に引っ張りこまないでっ……！な

んか恥ずかしいからっ……！」

『うふふ、楽しい家族だね』

「ご主人様、私、今とつても幸せです」

「俺もだよ。人生で一番幸福だ」

そう。俺は、幸福だ。そして、これからもずっと幸福なのだ。

俺はずっとずっと、この部屋で、サキア達と暮らすのだ。

できるならば世界が終わるまで、やってやるっじゃないか。

3人を抱きしめながら、俺は思うのであった。

完

第19話 『永遠の引きこもり』（後書き）

『引きこもり魔術師のマジック在宅ライフ』これにて完結です。

ダラダラと引き延ばすのも良くないと思いつつも前回から間が開き、「夏休み満喫してましたー！」という言い訳ができない季節になってしまい思い切って完結させました。

今後続編なり新作なり書くかもしれないのでそのときはよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9997dk/>

引きこもり魔術師のマジック在宅ライフ

2016年11月6日13時02分発行